
機械魔術の楔人

松村ミサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械魔術の楔人

【Nコード】

N3643X

【作者名】

松村ミサト

【あらすじ】

一千年前、世界は神に見限られたことにより文明を奪われた。

そのとき、人々は残っていた文明を掛け合わせ、『機械魔術』を生み出し、神 『悟神族』の力の大半を封印することに成功する。

それから一千年後 戦いの影響で原初の姿に戻ってしまつた世界で、力を取り戻さんとする『悟神族』と、人類の戦士『楔人』との戦いが続いていた。

プロローグ この世界の歴史

世界はこうして滅んだ

今からちようど一千年前

この世界は滅びた。

この世界に住まう人々は、神に見限られた。

かつて共存し、ともに世界を繁栄させてきた神が、まるでカードを裏返したように簡単に、あっさりと人々を見限った。

神は自分達を『ごしんぞく悟神族』と名乗り、自分以外の存在、『ヒュマニウス人間族』ダイモニウス『ダイモニウス魔族』を見限り、彼らからあるものを奪った。

それは『文明』。

生きとし生けるもの全てが、莫大な時と労力 そして生命を懸けて積み上げてきたものを、悟神族は何のためらいも無く奪った。

その行為を口火に、彼らの配下であったはずの『エンジェリウス天使族』の大半が反旗を翻して地上の者達に味方し、後に『しんめつたいせん神滅大戦』と呼ばれる戦争の引き金となった。

この時、すでに人間族と魔族は自分達の主力となる文明、『ヒュマニウス科学文明』と『エンジェリウス魔術文明』の半分を奪われてしまっていた。

そこで、反旗を翻した天使族は自らの力を使い、人間族の『ヒュウマニウス科学文明』、そして魔族の『ダイモニウス魔術文明』の残ったものを結合させ、新たな力を作り出した。

それが

『デジタル・マジカ
機械魔術』

決して相容れぬはずだった科学と魔術の融合。

その新たな力を持つて、今度は人々が神を見限り、長い戦いの末、彼らの力の大半を封印することに成功した。

しかしその代償と言わんばかりに、文明を奪われたことと相成り、地上は緑が生い茂る原初の姿へと変わり果て、人類も全種族合わせてもかつての人間族^{ヒュミニウス}全人口の三分の一程度にしか満たなかった。

また、悟神族も滅んだわけではなく、人々の精神エネルギー、『ソル・エナジー』を奪い失われた力を取り戻すために人々を襲い始めた。

かくして人々は、この圧倒的ハンデを抱えたまま神の力を借りずに、また新に文明を築き上げ復興の道を辿ることとなった。

そんな風に一度世界が終わってから、千年後

再世暦^{さいせいれき} 1

人々は緑を切り開き、僅かな人口ながら国を作り、安息の地を求めて彷徨いながら、時折現れる悟神族と戦い続けている。

そして、そんな悟神族と戦う戦士を、人はこう呼んだ。

楔人^{みそけびと}

、と。

第一話 この世界の歴史 いまはこんなですが、みんな元気です

明るい。

少女が毎朝眠りから目を覚ましたときに思う最初の感想はそれだ。

『もう朝なのか』みたいな睡眠に対しての執着とか、夢の内容がどうだったとか、少女はそんなことは思わない。ただ目を開けて、今まで真っ暗だった視界に光が差し込むことに素直な感想を抱くというライフスタイルを十六年間続けている。

少女が寝ている場所は、どこかの森の中だ。

壁も屋根も無い。ただ周りに生い茂った木々があり、ちょうど彼女の真上はぽっかりと穴が開いたように開けて、上がり始めた太陽の光が降り注がれていた。

少女は上体だけを起こし伸びをする。背骨と肩の骨がコキコキと快活な音を鳴らすその感覚がたまらなく気持ちいい。

そして勢いよく立ち上がると、そのまま走り出す。

前方の木々の隙間を縫うように走っていくと、すぐに開けた空間に出た。

そこは切り立った崖。その眼下には、小さく見えるコンクリートの固まり、街が見える。別に街自体は今の時代にとっては都市レベルの大きさだが、その周りに群生する自然の規模があまりにも大きすぎて小さく見えるのだ。

少女の目線からは、緑色の中に一滴の灰色を垂らしたようにその町が見える。

少女はその街をしばらく眺め、そして、小さく口元に笑みを作った。

そして少女はその街に向け、切り立つ崖から飛び降りていった。

キーンコーンカーンコーン

例に漏れずつまらない音のチャイムが鳴り響き、生徒達は雑談の続きをしながら席に着く。

「はい、私語は慎みなさい。出席取るから黙れジャリ共」

いつの間にか教壇に立っていた後半口の悪い教師に生徒達は特に驚きもせず、言われたとおりに口をつぐむ。

「飯仲尾いいなかお」

「はい」

出席は続けられていき、最後の一人を確認した後、教師は出席簿をパタンと閉じた。

「さあ、みんな。今日もいい天気ね」

どこにでもある普通の学校風景。

「というわけで、今日は皆さんに殺し合いをやってもらいます」

ではなかった。

生徒はその言葉に特に驚きもしない。ただ冷ややかな空気を教師に対して発している。

「喜吉先生きよきち。いい加減実習日の朝っぱらからバトロフ宣言をするのはやめてください。『今日は』じゃなくて『今日も』ですよ。いい加減気が滅入ります」

そのうちの一人が拳手の後立ち上がって言った。しかし教師・喜吉世子きよよこは意に介さず、

「なーに言ってるの。この時代、学校でクソつまらない授業受けるよりもいかにして相手をぶっ殺せるかという技術を磨く方がよっぽど実用的なのよ。これはそのため気持ち奮起させる言葉なの。分かる？なつめ 棗」

「全然分かりませんが、これ以上聞いても無駄そうなので着席します」

棗は無表情に淡々と語り、再び着席した。すると彼の隣の席のちよんまげのように後ろ髪を結った男子、蝶薙ちようなげアクエリアスが誰に言うでもなくポツリと、

「どうせまた男に振られたからだろ」

と言った。

一瞬、時間が止まったような錯覚を教室にいる全員が味わった。

ドカーンッ！！

そして、喜世子が教壇に盛大に頭を打ちつけた音で、その呪縛は解かれる。

「そーなんだよ、振られたんだよ・・・人生で99回目の失恋だよ・・・なんなんだよこれ・・・あたしゃ漫画のキャラかよ、笑えねえんだよ・・・」

何やら怨嗟の声をブツブツと漏らしている。

「ねえ！！ あたしのなにが悪いの！！」

いきなり頭がグリンツ！と生徒達の方に向く。若干ホラーなその光景に、さすがの生徒達も少し引いた。

「今日のHホームルームLの内容は、先生の男に振られる原因となる悪い点は何かをみんなで考えるわよ！」

HホームルームLの私的利用を高らかに宣言し、喜世子はやっと上体を教壇から起こす。

「はい、後ろの席から！」

「酒癖が悪い」

「がさつ」

「生活力が無い」

「胸が小さい」

後ろの席の丁度真ん中の男子生徒、日向糸祢ひゅうが いとねがそう言った瞬間、座っていた彼の腰にガツチリと腕が回される。そのまま一八〇度回転して後ろ側を向かされた。

糸祢が何かを言い終わる前に彼の身体が高速でブレ、そのまま教室の黒板に向かって放り投げられた。

ドゴーンッ!!

轟音が教室を超え、廊下にまで響き渡る。糸祢はそのまま地面に落下する。

彼が起き上がるうと身体を起こすと、その腰にまたガツチリと腕を回される。

「誰が

」

彼を黒板へと投げ飛ばした喜世子が、ニッコリと微笑んだまま熊でも逃げ出すようなドスの利いた声でそう言った。

「貧乳じゃガキヤコラー……!!」

そしてそのまま糸祢を後ろに向かって投げる。今度はホールドを外さず、喜世子の身体と共に綺麗なブリッジを描き、彼の頭は今度は教壇に叩きつけられた。

バリバリバリッ! ドゴーンッ!

喜世子が放った華麗なジャーマン・スープレックスで、教壇が真つ二つに割れ、脚をだらしなく開いた糸祢がぐったりとしていた。

「そして

」

まるでビデオの逆再生のように今までの軌跡を逆走した喜世子と糸祢。喜世子はもう力の入らない糸祢に何のためらいも無く再びジャーマンをかける。

「ドーンッ!!」

ドーンッ！！

一発目と同じ投げっ放しのジャーマンにより、糸祢の身体は教室の後ろの壁に高速で叩きつけられた。そのまま地面にドタンッと倒れると、ピクリとも動かなくなった。

そんな彼を、教室の生徒全員は敬礼をしながら見送ってやった。頭部で華麗なブリッジを描いていた喜世子は体勢を元に戻し、生徒達の方に向き直る。

「ふうー。先生スツキリ！」

ピッカピカの笑顔でそう言った。そのことに、生徒全員がツッコまなかった。

「さて、冗談はさておき」

生徒に対して三連続ジャーマン・スープレックスを決めたことを『冗談』と流すが、もちろん生徒は全員ツッコまない。

「今日は一時間目から四時間目までは体育の『せんいく戦育』よ。鉄鋼機構スチール・フレームを起動した後校庭に集合。いいわね」

そこで初めて、生徒達から『ええ〜〜！』というツッコミが入った。

「うっさい！ 黙れクソジャリ共！」

教壇が無いため自分の後ろにある黒板をバンッ！ と叩いて生徒達を黙らせる喜世子。

「学園の方針に文句言っつな！ 分かったらさっさと校庭に行く！ 行かないや一人ずつジャーマンで窓から送り出すわよ！」

言われて、生徒達は文句を垂らしながら教室を出て行く。動かない糸祢はクラスで一番小柄でクラスで一番の怪力を誇るアンナ・リーベンスの肩に担がれ運ばれていた。

しかし教室には一人だけ生徒が残っていた。

豪快に机に突っ伏しながら、グーグーといびきを立てている。顔の下にある机にはよだれで水溜りが出来ていた。さらに手にはエロ

本を持っているなど、もうやりたい放題だ。

喜世子はこめかみに血管を浮かび上がらせ、学校一の問題児の机の前にまで歩いていく。

そして、腹の底まで大きく息を吸うと、それを声にして盛大に吐き出した。

「起きなさい！ 神風かなまぎ森羅しんら！！」

呼ばれた男子生徒、シンラはビクリッ！ と身体を震わせ、ゆっくりと顔を上げた。

「……ん？」

その顔は余すところ無くよだれで汚れており、机との間に糸を引いている。

そしてその汚れきった顔で、森羅はニツコリと笑顔を作った。

「グツモーニン！ 喜世子センセツ！ あれあれ、何だかご機嫌斜めな顔だな。そうだ！ そういう時はパンツ見せてください！」

寝起き早々ウザいくらいにテンションが高い森羅の態度に、喜世子のこめかみに血管が一つプラスされた。

「君ね……まず言わせてもらおうと学校は居眠りをするところじゃないし私のご機嫌が斜めなのは君のその態度を見たからだしパンツを見せる気は無いし話の脈絡が無さ過ぎる。森羅、アンタいったい私の話どこまで聞いてた。もうみんな実習で校庭に

「先生……」

急に森羅が深刻な顔になったので、喜世子は口を閉じる。

そんな彼女に、森羅は持っていたエロ本をバツ！ と広げて見せて、

「これ！ よだれで写真濡っれ濡れでめっちゃくちやエロくね!？」

パリーンッ！

校庭で雑談をしたりウォームアップをしている生徒達の目に飛び込んできたのは、三階の自分達の教室の窓を割り、おそらくジャーマン・スープレックスで投げ出されたのであろう森羅の姿だった。

少女は走る。

生い茂る木々を避け、その速さをまるで変えず、ただひたすらに、街に向かって一直進に。

走る。

その顔に笑みを刻み、ただ走った。

「はい。全員集まったわね」

手をパンパンと叩きながら、喜世子は校庭に集まった全員の顔を見回す。

校庭と言っても、それはただの森の中だ。学園は一応国際機関であるため、土地を大量に保有しており、ここもそのうちの一つ。一般的な運動ではなく戦闘訓練を行うための実習場だ。

彼女は自分の専用武装『^{デバイス}デイベイブ・コンダクター』を背負い直し、空中に電子画面を投影させる。

「今日の授業はこれ。単独での戦闘実習。ルールは簡単。ただお互いの本気を出して潰しあうだけ。全員ぶっ倒すまで四時間ぶっ通しです」

その言葉に再び生徒が『ええ〜』と声を上げる。

「なに、不服？ そうねえ・・・じゃあ、こうしましょう。今日は特別に先生が相手してあげる。ここでルール変更。先生をぶっ倒すか自分以外の全員をぶっ倒したら今日の授業は終わり。五時間目と

六時間目も校長脅して無しにしてやるわ！」

その言葉に生徒達は『おお〜〜！』と歡喜の声を上げた。

「ただし！！！」

と、その声に喜世子が割り込む。

「四時間経つても決着が付かなかった場合は、午後の授業で全員の名前を恋人っぽいアダ名で呼びます」

嗚咽を漏らすものもいるほどのその恐怖の罰ゲーム宣言に生徒達から大ブーイングが上がる。しかし喜世子はそれらを華麗に無視した。

「それじゃ、各自鉄鋼機構スチール・フレームは展開したわね。リョーヘイ。マキ。あんな達は本気出したらダメだからね。はい、これ。模擬戦用の制御チップ」

そう言つて喜世子は一八〇センチの大男、神楽リョーヘイと、地面に付くほどの長い黒髪の少女、マキ・シュナイテッドにチップを渡した。

「分あつてますよ、センセツ。カードも五枚までですよ」

リョーヘイは自分が背負っていた超長距離砲撃武装デバイス『メントモリ』にチップを挿入する。マキも無言のまま、自分の近接戦闘刀剣武装デバイス『ミカギリ』にチップを挿入する。

それを確認してから、喜世子は首を押さえてあくびしている森羅に向かつて、

「森羅、あんたも加減しなさいよ。最大でも『橙』までだからね」

「分かつてるよ先生。分かつたからパンツ下さい」

「もう一発ジャーマン喰らう？」

「ブラを貰えるなら喜んで！」

「畜生っ！ 逃げ場が無い！」

森羅への説教は無駄なので諦め、喜世子は生徒達に向き直る。

「じゃ、分かつてると思うけど一応言つとくね。鉄鋼機構スチール・フレームは確かに強力だけど、人体の急所に合わせた部分は非常に防御は薄くなつてゐるわ。だからそこを狙つたら比較的早く相手をぶつ倒せるわ。狙う

べきは頭部、心臓、肝臓、股間^{タマ}。相手の命取る急所はこの四つね。あつ、でも女はタマ無いからな。そもそもタマって潰されてもタマが直接取れることはないし、タマを取るための部分にタマは入らないのかな？ でも一応急所だしタマもタマ取るための部分に入れといたほうがいいのかな」

「先生。後半からタマがどちらを指しているのかまるで分かりません」

「あー、もう考えるの面倒くさい！ さっさと散開！ 一分後に開始よ！」

喜世子がヒステリック気味に叫んだため、全員が蜘蛛の子を散らすように森の中へと消えていった。

「さて……。どうすつかね」

実習が開始されてから三分。リヨーヘイは森の中を当ても無くぶらぶらと散策していた。

ただ今彼がいる場所は『森エリアC-9』。スタート位置である『森エリアE-1』から六百メートルほど離れた地点だ。

授業終了条件が教師の喜世子一人倒すこととクラスのメンバーを倒すこと。普通に考えれば前者だが、それはかなり難しい。学園の教師の強さはまさしく人外レベルだ。下手をすればクラス全員を相手にする以上の労力を費やしても勝てるかどうかは怪しい。

だから彼は今、そのどちらとも言えない条件同志を天秤にかけていたところだった。

そこに、

「リヨーヘイ……。リヨーヘイ……」

小声で誰かが自分の名前を呼んでいることに気付く。リヨーヘイは警戒し、背負っていたメメントモリを構えた。

「待て待て。俺だ、俺」

「！ 森羅」

そこにいたのはいつものヘラヘラした笑いを浮かべた森羅と、
「クラスみんな・・・？」

その森羅の後ろには、他のクラスメイト十三名が大挙していた。

「どうしたんだぞろぞろと・・・」

リョーヘイはメメントモリを下ろし、森羅のほうに歩み寄っていき。

「いや何。手っ取り早く授業終わらせちゃおうと思ってね。早く帰って通販で買った同人誌読み漁って悶えまくりたいからさ」

「何か策があるのか・・・」

「簡単だっつもの。人海戦術で攻め込めばいいわけだよ。いくら喜世子センセが強くて、俺ら十五人丸ごと相手にすんのなんか不可能にも程があるって。そっちの方がよっぽど賢明だと思わね？」

すらすらと、ヘラヘラ顔を崩さないまま真剣な話をする森羅。

その話のリョーヘイはふむ・・・と考え込む。しかしそれもすぐのことで、物の数秒立たないうちに、

「分かった。その話のった」

「だろー？ そうこなくっちゃ！」

森羅はリョーヘイの肩をポンポンと叩き、そして他のメンバーに向き直った。

「ということ、クラス全員の協力は求められたわけだ。まあ、作戦なんて言っただけ、ぶっちゃけ詳しいこととか考えてないんで。

ただ各々が全力で喜世子先生のおっぱいと下着を狙って突っ込んでいくっていう至極ストレートな作戦だ」

「本当に欲望にストレートな奴だなお前は」

「いやあ、実に青春だねえって感じだよ」

「教師の下着と身体が目的の青春なんて御免こうむるね。まあ後半はともかく、各々全力でつてのは気に入った。そういうやり方は嫌いじゃねえ。いくぜ、みんな」

リョーヘイの言葉に『おおー！』と全員が返事を返し、前進して

いく。

号令をかけたリョーヘイを先頭に進んでいったため、森羅は最後に付いていく。

森羅はヘラヘラしたまま、両手の拳を胸の前で合わせた。

その手には奇妙な文字が描かれた手甲と、同じく奇妙な文字が描かれた包帯が手首から肘までを覆っている。

森羅は胸の前に合わせた拳を上下に強く擦り合わせると、手甲の部分がカツカツ！と快活な音を響かせる。

それを合図にしたように、彼の手甲と包帯の文字が赤い光を発する。

次の瞬間にはそれは光ではなく、燃え盛る赤い炎へと変貌していた。

ヘラヘラ顔をニヤーと歪ませると、森羅は大きく炎を纏った拳を振り上げ、

「せきえん赤炎！！」

ドゴーンッ！！

自分の前方のクラスメイト達のいる地面に向かって思い切り叩きつけた。

何のためらいも無く。

轟音が鳴り響き、爆煙が視界を覆う。

しばらくは微動だにしていなかったが、微かに聞こえるキィィイン・・・という高い音と同時に、森羅の前方の煙を吹き飛ばし、白い閃光が飛来してきた。

彼はその光を炎を纏った拳で思い切り横合いから殴りつけると、光は方向を変え、森羅の隣を通り過ぎて彼の遙か後方に着弾する。

その衝撃で、あたり一面を覆っていた煙が晴れる。

辺りは森羅を中心に半径二十メートルの木々は台風の直撃を喰らったように薙ぎ倒され、発生源である森羅も周りのものは焼け焦げていた。

そしてその薙ぎ倒された木々の中に、彼に向かって白い閃光を放ったリョーヘイが立っていた。その手にはメメントモリが砲撃モードで展開されている。その砲身から、白い煙がゆらゆらと上がっていた。

そしてそのリョーヘイを中心に、クラスメイト十三人が立ち塞がるようにして立っていた。その手には全員、武装を展開している。

「あっちゃー。いい作戦だと思ったのになあー」

森羅は頭をかきながら残念そうに呟く。

「バーカ。お前の考えてることなんかすぐに分かったよ」

リョーヘイは明るくそういうが、目は少しも笑っていない、完全に戦闘にスイッチが切り替わってしまったている。

「まずお前が先生相手と戦って勝つなんていう面倒くさいことするわけねえし、人海戦術なんて泥臭くて面倒くさいことをするわけねえ。だったら俺たちを集めて一網打尽にする。この作戦が一番面倒くさくねえ。だからお前はこうすると思ったよ」

「あらら。ずいぶんひねくれ者だと思われてんのね、俺」

「安心しろ。ある意味では信頼してるんだ。嫌われ者って訳じゃない」

ニツ、と唇を歪める森羅に倣って、リョーヘイも唇を歪める。

そして、

「逃げるーーーーー!!」

リョーヘイのその一言で、クラスの全員が一目散に逃げ出した。

「あ、おい！ 行っちゃうのかよ!？」

すでに構えを解いて全神経を走ることに使っているリョーヘイに

向かって声をかける。

「当たり前だ。お前とやりあうんじゃ、俺たちはハンデがでかすぎる！ 協力できないんなら戦わず逃げるだけだ！」

そう言うのと、もうリョーヘイどころかクラス的全員の姿は見えなくなっていた。

『心配すんな。俺たちだけでも何とかやってやるよー！』

という声が最後に聞こえた後、全ての気配が消え、そこには森羅だけがポツンと立っているだけだった。

「・・・あーあ」

森羅は両手に付けた魔道具『コウテン』チャージャーをカチカチと鳴らして、

その場にへたり込むようにしゃがんだ。

「なんだよ・・・俺だけハブかよ・・・」

一人でブチブチと文句を垂れていた森羅はしばらく地面におっぱいの絵を描いていたが、それを一〇八個 所要時間七十秒

描いたところで、スクツと立ち上がり、

「よし！ 先生も含めて、今日はクラスの女子全員の下着を取ろう！」

一人馬鹿な宣言をした後、みんなを追って走り出した。

「良かった？ あれで」

森羅を振り切った後、マキはたまたま逃げた『森エリアA-3』で合流したりョーヘイに質問した。

彼女の一般会話は、大抵このおかしな倒置法で行われる。

「ん？ ああ。あいつはああ見えて寂しがりやだからな。ハブにしたらと思わせられりゃ、自分から仲間になりに来るさ。さすがに先生相手に俺たちだけじゃ戦力的に足りなさ過ぎる」

「してくれなかつたら？ 協力」

「そんなときや まっ、俺たちが何とかすりゃいいさ」

「リョーヘイ。そうだね」

「返しなさい！ この卑怯者！」

「なんとも言え！ 俺にはやり遂げなければならないことがあるんだ！」

『森エリアH-2』に、十百千羽撃とせせと森羅はばたきの声が響いた。

「羽撃。最後通牒だ。これを台無しにされたくなけりゃ、おとなしく今つけている下着を差し出せ。おっと！ 時間をかけちゃダメだぜ。脱ぎたてホヤホヤじゃなけりゃな」

「そんなの嫌に決まってるでしょうが！」

羽撃は着ている巫女装束の長い袖とともに腕をぶんぶん振って、拒絶の意思を必死に表している。

「大体、なんで下着なんか取るのよ。あんたの変態に付き合ってるほど暇じゃないの。いまエル君から連絡入って、先生のとこに行かなきゃいけないのに」

「俺の行動が変態だと！？ 馬鹿を言うな！ 俺の行動は生物の雄にとつては至極当然のこと！ 女子のパンツを被るのは雄として生まれたからには必ず通らなきゃならない道なんだよ！ それを否定する貴様こそ変態だ！」

「なんでよ！」

「変態とは人とは違う性的趣向を持つていることだ。だったら男としてのこの性への探究心が理解できん貴様は変態 まてよ。

男にしか理解できないなら、つまりは男から見れば女は全員変態・

・！？ だとしたら女から見た男もまた変態・・・！！？ やつた

！！！！ みんな変態だ！！！！ 世の中変態だ！！！！ 変態の

バラダイス
樂園だ！！！！！！

「ダメだっ！ 完全に頭に蛆うごが沸わいてる状態だわ！ エル君！？
エル君！！」

羽撃は空中に電子画面を展開し、この戦闘で参謀を買って出たエル君こと、エルⅡエルに連絡を入れた。

『どうしたの、羽撃？』

「大変よ！ いま森羅と接触したんだけど、あいつハブにされたときのショックで変なスイッチが入っちゃってるみたい！」

『変なスイッチ？』

「女子の全員の下着を取って被ったあと、それで自分の服を作ってパリコレに出すって！」

『何をどうすれば仲間外れにただけでそんな考えに辿り着くの！？ テンシヨンの具合はどう？ 出来るならその考えを正させて作戦に加わってもらわないと』

「無理よ！」

『どうして？ まさか、もう手出しできないほどのテンシヨンに・・・！？』

「違うわ！ 私の四つある早弁のうち、一番大好きな幕の内弁当を人質に取られてるの！！」

『自分で何とかして』

急に冷たくなったエルに、羽撃は慌てて、

「ま、待って！！ わたしいつたいどうすれば・・・」

『弁当と下着、どっち取られたい？』

「そんなもの天秤にかけられるわけ無いでしょ！！」

『健闘を祈る』

ブツッ！！ と。そこで通信は乱暴に切られた。

「待って！ 待ってエル君！ この変態と片時でも二人きりだと思わせないで！」

何度か通信を試みるが、エルの方は完全に着信拒否チャットキヨ状態だった。

「さあ、どうする羽撃！ このままじゃ、この幕の内弁当の塩鮭が大変なことになるぜ」

羽撃はおろおろしながら電子画面と森羅を交互に見て、やがて、決心したように。

「わ・・・分かった・・・下、だけで・・・いい・・・？」

いやに艶なまめかしく訊いてくる羽撃に森羅は首が取れそうなほど大きく首を縦に振った。

そして、羽撃は自分の巫女装束のいやに短いミニスカートの中に手をいれ、そこからスルスルと布を下ろしていく。

「っ
！！」

森羅は歓喜のあまり声にならない歓声を上げる。

「こ・・・これでいいでしょ・・・」

恥ずかしそうに、羽撃は手に持った縞模様の丸めた布を見せ付ける。

「早く、早弁そひを返して。ここに置いておくから・・・」

羽撃は地面に丸めた布切れを置くと、一步、そこから下がった。

そして、森羅は何かを悟ったような清々しい顔になっていた。

「ありがとう、羽撃。本当に ありがとう」

森羅はその場に屈みこみ、手に持っていた弁当の包みを地面において滑らせ、羽撃の元に送ってやった。羽撃はそれを拾い上げ、

「ありがとう、森羅」

それだけ言うと、一八〇度反転して一目散にどこかへ行ってしまう。

「さて」

屈んだ状態だった森羅は、そのまま犬のように四足でダッシュする。目的はもちろん、目の前にある布切れだ。

わくわくした顔でそれを摘み上げた森羅は、それを広げてみる。

赤と白という、ちょうど羽撃が着ていた巫女装束と同じ配色の縞模様のある

四角い、ただ四角いだけの布

「え………?」

だれがどう見ても、それはただのハンカチだった。
そう。擦りかえられていたのだ。

あの脱ぐ動作のときからすでに、羽撃は手の内に握りこんでいたこのハンカチをうまく脱いだように見せかけ、それを丸めて森羅に渡してきたのだった。

「………!!」

鬼の形相をして歯を食いしばる森羅の頬を、一筋の熱い雫が滑り落ちていく。

「っ

!!」

そして、彼の心底どうでもいい雄叫びが、森の中に響き、消えていった。

第一話 この世界の歴史 いまはこんなですが、みんな元気です (後書き)

どうも！

この作品から見始めた人は始めまして。『ANGEL』のほうから見てる人はお久しぶりです。

作者の松村ミサトです。

そんなこんなで自分の二作品目の小説です。基本は『ANGEL』のようにファンタジーですが、ここでは向こうでは少し影の薄めの機械や科学と言ったメカ的なものも出てきますので、皆様これからなにとぞよろしく願います。

こちらが初見の方も、『ANGEL』の方、よろしく願います。

『ANGEL その天使、凶暴につき』
<http://ncode.syosetu.com/n6796g/>

意見や感想などがありましたらお気軽にしてください。

それでは、また次回。

第二話 自由こそが生き様な人たち

どこかから獣のような悲痛な叫び声が森にこだましている。

そんな中で、喜世子は背負っていた銃剣両用武装^{デバイス}「デイバيب」コンダクター』を脇に抱えるようにし、木にもたれかかって静かに眠るように目を閉じていた。

その姿はまるで無防備で、まるでピクニックにでも来ているかのような穏やかな顔をしている。

しばらくすると、喜世子は薄く目を開ける。

「来たわね」

そう言った直後、彼女の頭上から突如として雷が落ちてきた。

喜世子はそれを文字通り目にも留まらぬ速さで前方に移動し、直撃を避ける。落ちてきた雷は木の幹に直撃し、その部分から木を真っ二つにしてしまう。

喜世子はそれを見つめながらデイバيب・コンダクターを背負い直し、辺りを見回した。

「やっぱあたし狙いか。しかし一番槍をエル君が務めるとはね」

「外したっ！ 間髪いれずに二番槍、棗くんっ！！」

そんな声が数十メートル先から聞こえてきたとき、そちらに気を取られて声のした方に向いた喜世子の真逆から、弾丸のようなスピードで飛来してくる人影があった。

その人影、棗影明^{かげあき}は自身の手甲型武装^{デバイス}「クリスタル・ブレイク」を展開させ、すでに入力してある高速移動型身体強化術式^{シユトルム}「過速」を起動し、さらに残像を消すほど加速をつけ、右拳を振り上げ、思い切り喜世子の後頭部目掛けて振り下ろす。

「もらったーーーーー！！」

こうしたら死にそうだな、などという配慮は無い。この程度で死

なないことを熟知した上で、棗は殺す気でさらに拳に力を込めた。

「なーにをもらったってー！ー！ー！」

しかし喜世子はディバイブ・コンダクターを鞘から少しだけ抜き、その抜き身なつた刃の部分で自身の後頭部に振り下ろされた拳を受け止めた。

「クソっ！！」

「その形の奇襲なら、あと十倍以上は速くなりなさい！！」

「物理的に不可能っばいですが、善処します！！」

そう言つた棗の顔面に喜世子の回し蹴りが入り、棗は数メートル近く吹っ飛ばされる。

「あらっ？」

軸にしていた左足首に違和感を感じた喜世子が下を見ると、彼女の足下にはいつの間にか水溜りが出来上がっている。

そしてその水溜りから水でできた手が伸び、彼女の足首を掴んでいた。

「あら、糸祢いとね。大丈夫だった、頭？」

「そう思うんならジャーマンなんかかけんな！！」

そう激怒した水溜り、糸祢は、掴んだ喜世子の足を振り回し、何処へともなく投げつける。

喜世子は空中でクルクルと回りながら体勢を立て直し、投げられた方にあつた木の幹を蹴つて軽く飛び上がり、フワツ、と、軽く着地する。

するとその背後から、周りの木々を切り倒し、一本が二メートル以上もある巨大な大剣を二本持った蝶薙ちやうなげアクエリアスが突っ込んできた。

「ふおおおおおおおおお！！！」

雄叫びと共に二本の大剣を振り下ろすが、喜世子はディバイブ・コンダクターを背中から下ろし、鞘に収めたままそれを受け、その反動で後ろに飛ぶ。

「来たわね、チョンマゲ！」

「チョンマゲじゃない！ 蝶薙アクエリアスだ！！」

「そう言われたくなきゃ、その髪型やめるか、婿入りして苗字変えなさい！！」

吹き飛んでいく喜世子を追うアクエリアスの眼前に電子画面が展開され、その中に記載されていたアイコンを数個選択し、それらを展開する。

すると彼の背中の部分に、後光のように円を描く形で小ささまざまな刀剣が出現した。

「だああありゃああああアアアアアア！！」

小ささまざまな刀剣を、時には速さ重視で短いものに変え、またある時は威力重視で長大なものへと次々に切り替えながら、高速で喜世子と切り結ぶ。

しかし、喜世子は顔色一つ変えずにそれらをいなす。しかもダイバンプ・コンダクターは一度も鞘から抜いてはいない。

「武器が多けりゃ勝てるって訳じゃないわよ。使えるのは二個までなんだから」

「常識に凶とらわれたら、その時点で負けるぞ！」

すると、背面に展開していた刀剣が一斉に喜世子の方に向かってその切っ先を向ける。

アクエリアスは展開していた電子画面に映っている『フルバースト射出』を迷わず選択した。

「いけええええええ！！」

ちょうど鏢迫り合いの状態に持ち込んだところで、喜世子目掛け一斉に刀剣が射出される。

「歯が溶けるほど甘いつ！！」

そう言った喜世子の眼前にも電子画面が現れている。彼女はそこに映し出されたいくつものウィンドウを一瞬で処理しきるとダイバンプ・コンダクターをガン・モードに切り替える。そして自らが引く形で鏢迫り合いから抜け出し、銃口をアクエリアスに向け、引き金を引く。

射出された散弾型の光線は目の前にいたアクエリアスごと自分に向かつてきていた武器を弾き飛ばした。

「ぐふおああ!!」

彼は後ろにゴロゴロと転がっていき、その跡を追うように弾かれた武器が落ちていく。そしてアクエリアスの鉄鋼機構スチールフレームが防御エネルギー残量0を示し、彼は脱落となった。

「勇猛果敢は良いことだけど、ちよーっと考えが浅かったわね。ま、あんたに当たる分の弾はエネルギー調節しといたから大丈夫でしょ」

喜世子はガン・モードのデイバイブ・コンダクターをガシヤツ! とポンプアップする。そこから高エネルギー圧縮札「ライト・カード」が飛び出し、役目を果たしたことで空中で燃え尽きて消えていった。

「く……くそ……」

喜世子の読みどおり、アクエリアスは弾が当たった胸部を押さえて立ち上がった。賞賛の声をかけようと喜世子が彼の方を見ると、その口元が薄く笑っていることに気付く。

反射的に、彼女は三メートルほど跳躍した。

そこに金属製の重たい拳が振り下ろされて地面を砕く。土が舞い上がり、地面にクレーターが出来上がった。

「やるじゃない系祢!」

喜世子は下にいる系祢を見る。

そこにいた系祢の身体はさっきの液体状とは打って変わり、体中が金属に変換され、ピカピカと光を反射して輝いていた。

「まだまだまだアー……!!」

系祢は下半身を液体に変換し、水流を地面に噴射して重たい金属製の上半身を空に打ち上げる。

その勢いを保ったまま、空中にいる喜世子に向かつて拳を突き出す。

「あー」

喜世子はそれをデイバイブ・コンダクターで受け流す。その反動

で重心がずれ、彼女の身体は落下していく形になる。

糸祢の目がキラリと輝いた。

「これを待っていたー!!!」

糸祢は身体を全て金属に変換し、空中で身動きが取れずにただ落下していくだけの喜世子目掛けてその重い身体で落下していく。

「ウリイイイアアアッー！ ぶつつぶれよオオッー!!」

「そんなどこぞの吸血鬼みたいなセリフを吐くと 大失敗

犯すわよ!!!」

喜世子はガン・モードのデイバンプ・コンダクターを自分の真横に向け、バンツ！ と。何も無い空間に発砲した。それだけで彼女の身体は反作用の法則で発砲したのとは逆方向に飛んでいった。

「あらアツ!?!」

糸祢は喜世子のすぐ隣を通り抜け、そのまま地面に派手に墜落する。第二のクレーターの中心で、人型にできた窪みの中に埋まってしまったっていた。

そのすぐ脇に、喜世子はスタツ、と着地する。

「あんまりスマートな戦法じゃないわね。応用の利く技なんだから、もうちょつと攻撃バリエーションの可能性を見つけてみなさい」

クレーターの中心に向かって教師らしくアドバイスを出し、喜世子はそのまま背を向けて立ち去っていつてしまった。

アクエリアスは遠くからクレーターに向かって、

「大丈夫かアー！ー！」

と、声をかけてやった。すると窪みから上体だけを起こした糸祢が、

「くっそ……! あの胸なしめ……」

と呟いた。

ガシャンッー!!

ポンプアップの音と同時に、彼の後頭部に硬い銃口が押し付けら

れた。

それと同時に、金属変換から元の身体に戻っていた糸祢の体中から冷たい脂汗あぶらあせが雑巾を絞ったみたいに流れ出した。

「どんな気分？ 糸祢……」

その問いかけに、糸祢はまるで時間が止まったかのように固まって答えられない。

そんな彼を無視して、喜世子は言葉を続ける。

「動けないのに背後から近づかれる気分ってのはたとえと……戦いに負けて見逃してもらった男が……負かされた相手の聴力も考えずに悪口を言っただけで多少なりとも自分の中の鬱憤うっぷんを晴らすように固まった瞬間！ グイッ」

喜世子は銃口をより強く押し付ける。

「……と、動けない男の後頭部に銃口を押し付けられてる気分似ているってのは……どうかかな？」

「それ今の状況を普通に説明しただけ……」

やっと搾り出したかすれた声は、しかし喜世子の心を動かさない。彼女は小さく、

「そう……」

と、呟いて、ディバイブ・コンダクターを何回もポンプアップする。

ディバイブ・コンダクターは普通のショットガンと違い、ポンプアップするほどライト・カードからエネルギーを抽出して、威力や一度の射撃回数を増すことができるのだ。

ガシャッガシャッガシャッ！

徐々に近づいてくる地獄の重圧プレッシャーに耐えられず、糸祢は友人に助けを求め。

「助けてー！ー！ー！！ アクエリアスー！ー！ー！！」

「あっ、アクエリアスならさつき『脱落したから自分は何も関係ありません』ってすごい速さでどっか行っただわよ」

「チクシヨ！ー！ー！ー！！」

ガシヤツガシヤツガシヤツガシヤツ！

そんな話を続けながらも、ポンプアップの手は一向に休まらない。「私はね、これでもこはあるのよ」

そして喜世子がぐずり出した糸祢に向かって言葉をつむぐ。

「でもね、教室にいる生徒が私より大きいから私の小さく見えるの。だからけして私が小さいわけではないの。分かる？」

「分かります！ 分かりましたから助けてください！！」

ギヤーギヤー喚く糸祢を見下ろしながら、喜世子はポンプアップの手をピタリと止めた。

「そう、分かったのね」

糸祢は何回も何回も肯定のために首を縦に振る。

「でも、もう遅い」

喜世子はニッコリと笑ったまま、引き金を引いた。

「ッ ！ いやだアアアアアアアア！！」

チユドーンッ！！

大地を揺るがすほどの大爆発が起きてから数秒経ち、煙が晴れたそこには、鉄鋼機構で相殺しきれなかった余剰エネルギーで黒焦げスチール・フレームになっそうさいている糸祢と、それを見下ろす喜世子だった。

「糸祢。あんたの敗因はたったひとつ……たったひとつの単純な答えよ……」

そう言っシンプルて喜世子は気絶した糸祢に背を向ける。

「『あんたは私を怒らせた』」

それだけ言っシンプルて、彼女は歩み去っていった。

「本当にあれでよかったのか？」

アクエリアスは逃走中に合流した棗とエル君に声をかける。

エル君は自分の目の前に四面ものコマンドスクリーンを展開し、四つのキーボードを休みなく打ち続けている。それを棗が肩車をして運びながら、アクエリアスと並走している形だった。

「仕方ないよ。あの状態になった喜世子先生には何を言っても無駄さ」

「でも、俺は鉄鋼機構スチール・フレームが解除されてて無理でも、棗なら止めに入れたんじゃ・・・」

「アクエリアス。お前は俺が全裸にオリブオイル塗りたくってライオンの檻おりの中に入っていくような馬鹿に見えるのか？」

「ライオンがオリブオイル漬けに喜んでくれるかどうかは知らんが、確かに状況的には似たような感じだな」

アクエリアスは納得しているが、しかしどこか腑に落ちないような微妙な表情をしている。

そんな彼を慰めようと思い、エル君は口を開く。

「まあ、死して屍拾うもの無し、って言うし」

「まだ死んでないぞ!？」

「あつ、そうか。まあ別にいいよ。どうせあの状況からの救助なんて死亡届出した後の電気ショックぐらい意味が無い」

「エル・・・相変わらず顔に似合わずえげつないな・・・」

「そんなことより、作戦を第二段階に移そう」

エル君は忙しそうなふりでキーを叩きながら、第二段階への準備を進めるのだった。

「さーって、と」

しばらく森を探索していた喜世子は、かれこれ三十分は誰も攻めてこないの、この間使シグ俱に入力したばかりの『世界の銘酒丸分

りブック』というアプリを見ながら暇を潰していた。

使俱はこの世界の人間が必ず持つ高純度情報圧縮型端末であり、これによって連絡を取り合ったり電子画面の展開、さらには戦闘用術式を使う者にとってはそれらを入力・発動までが可能になる。ちなみに喜世子の使俱は狛犬型で、名前を『あーちゃん』という。狛犬の阿形の方だからというのはいうまでも無い。

「あいつら、もしかして全員で潰しあう方に切り替えたのかな？」
イギリス原産の、一本が自分の給料三カ月分もするワインのペー
ジを眺めながら、ふと、寂しいような感じになる。

今日はこのようなルールになったが、実際なら教師は実習が終わるまでは特に何もせず、生徒達が戦闘を行っているエリアで監督を行わなければいけない。

他の教師なら本を読んだりして時間を潰すのだが、生憎ながら喜世子は大抵の本は読み飽きてしまっている。かといって寝たりすると、何の用も無いくせに気まぐれに『見学しに来た』などという校長と鉢合わせて小言を言われたりする。それを差し引いても、彼女のクラスには放っておくと授業を抜け出して女子更衣室に行こうとする森羅がいるので、寝たりしてその馬鹿が新聞に載るような事態を避けるため寝ることなど出来ないのだ、ぶっちゃけ戦育の授業中は喜世子にとっては拷問級に退屈なのだ。

だから今日は喜世子にとっては非常に楽しめる時間になるはずだったのだが、相手が攻めてきてくれなければ神経を使う分、こちらの方が退屈且つ疲れてしまうのだ。

「まあ、でも」

喜世子はアプリ画面を閉じ、

「ウチの生徒はそう簡単に退屈にはさせてくれないわよね」

瞬間、喜世子は右に勢いよく飛んだ。

そして、それとほぼ同時に、さっきまで喜世子がいた場所を高速で何かが突っ切っていく。

それは数メートルほど先で大きくドリフトして、喜世子の方に向

き直る。

一枚の鋼鉄製の板、サーフボードのような形状をしたそれは、搭乗機型武装『デバイス・パルス・ウェーブ』だ。

それに乗っているのは、その持ち主であるいかにもそこらにいるストリートボーイのようなファツシヨンのノリエル「シーゲット」。

それともう一人。一見すれば浅黒く見える濃い赤銅色の肌をして、額にはサイのように皮膚に包まれた二本の短い角が生えている、鬼族の間切丸だ。

「あら、ノリエルとキリちゃん。今度の相手はあんた達？」

喜世子はデバイス・コンダクターの柄を掴み、臨戦態勢をとる。それを見ると、ノリエルと切丸は表情を硬くした。

「行くよ、切丸くん。しっかりね」

「まかしとけ、ノリエル」

それだけ言うと、切丸はボードの上から降り、ノリエルだけが喜世子目掛けて突っ込んでいく。

突っ込んでいく途中で、パルス・ウェーブは刃となっている両端の部分がガシャツと音を立てて開き、底から発生した青い光の粒子で刃がコーティングされた。それにより両端部の切れ味はさらに威力を増す。

喜世子は背中から武装を下ろして構える。ノリエルはさらに速さを増して突っ込んでいく。

が、予想だにしないことが起きた。

いきなりノリエルが大きく喜世子の頭上をまたぐように進路を変えたのだ。

そして彼が上に移動したことにより、ノリエルの後ろにいた切丸の姿が見えるようになる。

切丸は自分の身長ほどはある金棒型の武装を野球のバツターのように構え、そして、

「『衝々撃々崩々打』ッ！！」

思いつ切り、それを振り切った。喜世子はそれを見てとっさに自

分の前に武装を防御体勢で構えた。

すると、ドンッ！！と。喜世子の身体が数メートルほど後ろに吹き飛ばされる。

切丸の金棒が通った軌道上から、とてつもない速度で複数の衝撃波が飛んで来たのだ。

さらに飛んでいる喜世子目掛け、上空に移動していたノリエルがボードからビームを発射してくる。喜世子はそれを全てデイバイブ・コンダクターで弾き落としながら、地面にすべるように着地した。

彼女は自分の鉄鋼機構スチール・フレームの損傷度合いを見るが、対衝撃防御が完璧であったため、まだ防御エネルギーは無傷の状態だった。

「いやー、今のは危なかったな。先生ちょっとヒヤッてしたよ」

素直な感想だ。てつきりノリエルが波状攻撃でも仕掛け、それを援護として一撃必殺としての威力が高い切丸が攻撃を至近距離で当ててくると、二人に遭遇した瞬間に予測していた喜世子にとっては、まさしく最初からその考えを覆されたのだから。

「いやはや、成長したね二人とも。去年とはだんちの戦術に、先生は嬉しいぞ」

「そりやどうも！」

ノリエルはボードの端を左手で掴み、ひっくり返るほど後ろに体重をかけて旋回すると、再び喜世子目掛け突っ込んでいく。その途中、使シグ俱グにアクセスすると、その中から取って置きシグの式を選択し、起動する。

バツ！！と。いきなりボード両端に展開されていた青い粒子が矢印の先端のように巨大になる。ボードを掴んだままの体勢のノリエルがそのまま身体を捻ると、ボードはそのままコマのように高速回転し始める。

「一気に決めるよ！ これ十秒以上は耐えられないから」

「あら、時間制限付きの技？ その分強力なのかしら」

「違う！ 酔っ！！」

弱点を堂々と告白しながら突っ込んでくるノリエルを警戒しながら

ら、喜世子は後ろにいる切丸にも注意を向ける。彼は相変わらず金棒をバットのようにつまみ、遠距離からの攻撃に徹するようだ。

そして、ついにノリエルが喜世子を射程内部に捉える。

「『アイス・ダスト
氷滑斬』!!!」

その名のとおり、青い粒子が削られた氷の粒を連想させる幻想的な攻撃が前方から飛来し、

「『しんしんへき
震々壁』!!!」

後方からは金棒を振るって発生した衝撃波が壁のように一面を制圧しながら向かってくる。

さてどうするかと喜世子はコンマ一秒以内で思考を回転させ、すぐに行動に移る。勢いよく地面を蹴ると、そのままノリエルのほうに向かって疾走していく。

そして鞘に収めたままのデイバィブ・コンダクターを前方に構え、回転するノリエルの刃に接触させる。それと同時に、彼女は回転の流れに乗るようにそのまま左に向かって飛んだ。

バチィッ! と火花を散らせながら、自らも加えた力の勢いで喜世子は吹っ飛んでいく。予想以上に威力が強く、身体がグルグルと回転して視界が定まらない。今日は予想外な事が多いなと驚きながらも、生徒達の成長に少し嬉しく思う。

オエエエエエエ!!! と、ノリエルのえずく声が聞こえてくる。ところを思うに、もうあの技自体は停止しているのだろう。あんなもの使うのならもうちょっと三半規管を鍛えろと後で説教してやらねばと思う。

徐々に視界が定まると、地面に鞘ごとデイバィブ・コンダクターを突き刺し、無理矢理勢いを殺して停止する。

すぐに二人の方に目を向けると、

「ヒィィアッハアアアアア!!!」

さっきまでえづきまくっていたノリエルは、先ほど切丸が発生させた衝撃波の壁の上を波乗りしていた。

「最高のビックウエーブだ!!!」

その声に満足するように、上機嫌になった切丸はどんどん同じように衝撃波を発生させ、波を強くしていく。

「コラー、授業中に遊んでんじゃない！ 遊ぶんなら先生も混ぜるー！」

すぐに武装を背中に担ぎ直し、教師にあるまじき注意をする。

「止めたければこつちに来てくださいよ先生。でも、来たら多分負けますよ」

そのあからさまな挑発にカチンと来た喜世子は、ありや一発シメてやるか、と物騒なことを思いながら、拳を二、三度握ったり開いたりすると、遊んでいる生徒二人に向け、鉄拳制裁のために地面を蹴って走り出した。

「今だ！ イコル君、ゼンオー君、伸太君！！」

それを待っていたかのように、ノリエルが大声で叫ぶ。それを合図に、近くの木々の間や草むらから三つの影が、喜世子の前に立ち塞がるように出てきた。

出てきたのは、大柄で目つきは悪いが実は優しい竜人族のイコルドラゴニア、銀色の長い髪に八重歯と童顔が素敵な人狼族の双海ゼンオーウルフェル。そして色黒でラテン系の吸血鬼、飯仲尾伸太いいなかおしんただ。彼らは後ろにいる切丸も含め、クラスでは魔族男子四人組と呼ばれている。

「行くぞ！ 気を引き締めていけよ貴様ら！！」

「行くぞ行くぞ行くぞおー！ 行っちゃうぞー！」

「さあつて、行くとしますかね」

イコル、ゼンオー、伸太はそれぞれが三方向から取り囲むように喜世子に向かってくる。

「ウアガアアアアアアア！！」

その途中、イコルとゼンオーは自らの細胞を活性化させる。彼らの身体が発光し、その形が変わっていき、光が砕け散るように消え

去ったときには、イコルは堅牢な鱗の肌と巨大な翼を持つ竜の姿に。ゼンオーは銀の毛並みが美しい巨大な狼の姿に変身していた。

「切り捨て御免!!!」

イコルの鋭利な爪を持つ巨大な腕が喜世子目掛け振り下ろされる。しかし、喜世子はそれを真つ向から拳で受け止めた。ぶつかり合った拳同士から腹の底に響くような重低音が響く。

「しまつ　　ッ!!!　　唯技か!!!」

「鍛えが足りんわあー!!!」

喜世子はそのままイコルの腕を掴むと、インゾアピタキルミステイ・タイラント唯技・『神秘力豪』を使い、思い切り振り回す。

インゾアピタキルデジタ・マキカ唯技とは機械魔術で言うところの奥義であり、その名の通りその者が持つ唯一無二の魔術式のことである。

喜世子が使用している『ミステイ・タイラント神秘力豪』は簡単に言えば身体能力の術式だが、同系列の能力、すなわち『筋力強化特化型』『速度強化特化型』『頑強性強化特化型』全ての特性を兼ね備えた珍しい術である。

イコルは竜巻よろしくぶんぶんと振り回され、喜世子に攻撃を加えようと突っ込んできていたゼンオーをそのまま弾き飛ばす役割を担ってしまっていた。

「ギャヒイーンッ!!!」

その姿通り犬みたいな鳴き声を上げ、ゼンオーは地面を転がる。

「おい、大丈夫か?」

「平気だい!」

ゼンオーは起き上がり、かぶり頭を振って気合を入れなおす。

「おい、シンちゃん。今からでもスーパーマード使え!　今の状態じゃ先生に勝てないぞ!」

「い、嫌に決まってる!」

伸太は慌てて首を振る。

「男の血なんか使ってスーパァー・シンちゃんになるのなんて真つ平ごめんだっつもの!!!」

「この際我慢しろ！ 見る。イコル君あのままだと空飛べそうなくらい回されてるぞ。あの女人間じゃないぞ。化物並に凶暴すぎるぞ」
「嫌なモンは嫌なんだよ！」

イコルが涙目になってハンマー投げのハンマーみたいに放り投げられたが、それでも伸太は首を縦に振らない。

ゼンオーは焦りながら、

「わ、分かったぞ。なら俺が女つばい髪型になるから、それで頑張つて！ 何がいい！？ ポニーテール！？ それとも三つ編みおさげにするか！？ 俺的にはポニーテールの方がいいんだけど、この長さなら中華風のシニヨンにもできるぞ！ でもやつぱりお勧めはポニーテールで――」

「ポニーテール推しすぎだろ！ いくらお前が長髪で女つばい童顔だからって言つてもな、例えばウンコをカレーだと思つて食べる奴はいねえだろ！！」

「お前にとつて男俺らつてウンコと同列なのか！？」

伸太の発現に酷くショックを受けたゼンオーだったが、次の瞬間再び喜世子に向かつていつて敢え無く左フックで返り討ちになったイコルに巻き込まれる形で吹っ飛んでいった。『キユツ』という断末魔のような小さな声が、すぐ隣にいた伸太の耳に残った。

ダメージ過多でリタイアとなった二人は変身も解け、小柄なゼンオーの上に大柄なイコルがのしかかっているという最悪な形で地面にのびていた。

それに一瞬目を奪われていた伸太が慌てて視線を前方に戻すと、いつの間にか距離を詰めていた死神が笑顔で目の前に迫っていた。

「次はお前かぁー！！！！！！」

「やつぱなつときゃよかつたぁー！！！！！！」

後悔を言う口はこの口か！ と言わんばかりに放たれた喜世子の拳は真つ直ぐ伸太の顔面に突き刺さり、そのまま折り重なつて山になつている失格者組の二人の所にふっ飛ばし、見事頂上にもう一つの屍しかばねを築き上げた。

「ふうー。先生スツキリ！」

額の汗を爽やかに拭い、喜世子は邪悪な笑顔で残りの二人に向き直る。

ノリエルはその顔を見て本気で『あ、終わった・・・』と思ってしまう。

「ノリ！ もう大丈夫だ、行けるぞ！！」

しかし下から聞こえてきた切丸の声に何とか正気を取り戻す。ノリエルはすぐにパルス・ウェーブに蓄積されたエネルギー量を確認する。

今までアホのように切丸の発生させてきた衝撃波に乗り、全て受けきってきたのは、それをエネルギーとしてパルス・ウェーブの推進力と攻撃力を跳ね上げるこの荒技を使うためだ。実家の整備工場で改造し、容量を五倍以上にしたエネルギータンクはすでに満タンになっていた。

「ありがとう切丸君！ これで今日は半ドン決定だ！！」

ノリエルは画面に展開されたロックオンカーソルを慎重に合わせしていく。しかしそれをさせまいと、喜世子は身体能力を強化したままこちらに向かって突っ込んできた。その速度は速く、おそらくもう数秒でこちらに接触できるだろう。

しかしノリエルは慌てない。ただ必死に意識を集中し、ロックできるタイミングを見定める。下から切丸が不安げな視線を送っているのが分かるが、それでも焦らない。むしろそれを糧により一層集中する。

そして距離が十メートルを切った時点で、カーソルが完全に喜世子を捕らえた。

「行っけええええええ！！」

ノリエルは推進力を最大値に上げ、パルス・ウェーブを射出した。轟ッ！！ と巨大な音を立てながら空気を切り裂き、コンマ一秒足

らずで喜世子の目と鼻の先程の距離に詰め寄る。両端部の刃は今はい実体剣に戻してあるが、それは切丸から供給された振動をそのまま開放し、超々高周波振動ブレードへと変貌を遂げている。触れればいくら身体強化術式を展開しているとはいえダメージは必至だ。それはこのまま行けば喜世子の喉元に直撃するコースを進んでいる。

そしてその距離が数センチにまで迫った途端、喜世子はほんの少しだけ身体の心をずらし、そのコースから外れようとする。

ノリエルは高機動下での反応支援術式でそれを確認すると、ボードを回転させ、回転力で威力を上げた一撃を叩き込もうと重心を低くした。

しかしそれがまずかった。重心を低くするときに必然的に低くなる頭部、顔面に、喜世子の突き出した拳が思い切り突き刺さった。

自らの速度も相成って高威力のカウンターを喰らう形になったノリエルの身体は喜世子の腕一本で遮られ、その衝撃でパルス・ウェーブはノリエルの脚を離れて制御を失い、木々を薙ぎ倒しながらどこへともなく飛んで行ってしまった。

「触れられないんだったら、触れられるところを叩くのみ。ダメよ、絶対的優位なときでも気を抜いちゃ」

そのアドバイスはすでに気を失い、防御エネルギーも切れて脱落したノリエルには届かない。喜世子は鼻血を出しているノリエルをそっと地面に寝かせてやる。こういうちよつとした優しさが、傍若無人な彼女が生徒達に慕われている理由でもある。

さて、と後ろを振り向いてみると、一目散に自分に背を向けて走る切丸が目映った。

喜世子の眼光がキラリと怪しい輝きを見せ、驚くほどの跳躍で十メートル以上距離が離れていた切丸の上に着地し、すぐにマウンットの体勢をとる。

パニックであうあうと言葉にならない声を上げていた切丸は、喜世子が顔面に放った一撃で、すぐに静かになつて動かなくなった。

「やられたアーーーーー!!!」

スクウェア・フォーエス

魔界男子四人組とノリエル組の戦闘を遠距離から観察していたエル君は頭をボリボリとかきむしりながら叫ぶ。

「おい、どうなってる。ノリエルの新技があれば何とかなるんじゃないか、エル」

その光景をエル君の使シク俱から転送された画面で見ていたアクエリアスがあきれたように言った。

「途中までは良かったよ。でも甘く見すぎてた。まさかあそこで『ハイド・コマンド 鋭加神経』と多重唯技デュアルリンクできるなんて……。完全に僕の読み違いだ」

デジタ・マキカ 機械魔術で唯技スキルを二つ以上同時に発動する技術を多重唯技と呼ぶ。

ノリエルの一撃が当たる一瞬、喜世子の反応なら避けることまでは可能であるとはエル君はふんでいた。だが計算違いだったのは、喜世子がああのタイミングで自身の持つもう一つの唯技スキル、ハイド・コマンド 感覚神経を鋭敏化させ、反応速度を数段階以上に上げる『ハイド・コマンド 鋭加神経』をあの土壇場で発動させたことだった。

ハイド・コマンド 感覚を跳ね上げる鋭加神経と身体能力を向上させる神秘力豪。こ

ミスティ・タイラント

れほど相性のいい技同士は無い。なにせ鋭加神経で向上した反応に神秘力豪で強化された身体能力が加われれば、一メートル以内の距離で撃たれた弾丸など簡単に叩き落とすことが出来るからだ。実際に酒に酔った喜世子が繁華街のチンピラともめてその荒技を使ったことがあるのを、クラスの間なら誰でも知っている。

「っていつか、リョーヘイ君やマキちゃんには制御チップ渡しておきながら自分は一切加減してないよ！ さてはあの暴力女、初めから約束する気無かったな。くっそ……理事長に今までの非道の数々を暴露してやるうか」

エル君が今までの喜世子の暴拳の数々を脳内で箇条書きにして整理していると、近くの茂みがかさがさと揺れ、中からいつも何を考えているか分からない棗影明の仏頂面が顔を出した。

「いや、そうでもないぞ。喜吉先生が本気を出したら、開始三分で決着が付いている」

茂みからのそのそと体を出しながら棗がエル君をなだめる。彼はエル君に言われた次の作戦の仕込みが終わり、今帰ってきたところだった。

「分かってるよそんなことくらい。まったく、あのチート性能は本当に厄介だよ」

棗の方を見もせずに、エル君はイライラしながらキーボードを叩く。

「あと残ってるメンバーは森羅君を抜いて八人。せめて欠席してる四人がいれば戦況も変わったんだろうけどなあ。獅子緒さんがいればなあ」

「まあ、今残ってるのはほとんど女子だし、戦闘向きは羽撃とアンナしかない。エルも直接戦闘は無理だし、まともに戦えるのは六人。あの怪物教師を相手にするには心許ないな。あつ、そう言えば比較的無傷だから忘れてたけど俺脱落してたな」

木にもたれかかりながら、アクエリアスは思い出したように言う。思えばあの台風のような戦闘教師と一戦交えてこの程度だったことに、彼は少なからずホツとしていた。

「ってことは戦闘要員は実質五人か。一番いいことを言えば、森羅が何とかこちらの軍勢に加わってくればいいんだが」

「俺がどうしたって？」

「だから森羅を仲間に取り込めれば　　って、うわああ!？」

とつさにアクエリアスはその場から飛び退く。

見ると彼が今まで寄りかかっていた木の枝に、森羅が逆さまになってぶら下がっていた。膝の裏で木に引っかかりながらいつものヘラヘラとした表情をしている。

「し、森羅!？」

「そつだよ、森羅だよ」

勢いをつけ、くるんと一回転して森羅は地面に着地する。それを

見て三人は後ろに数歩下がった。

「んだよ、どうした？ 何そんなに怖がってんだよ？」

「お前、一時間も経ってないのにもう俺らにしたこと忘れたのか・
いいか、よく聞け森羅。俺はな」

アクエリアスは言いながら、いつでも武器を展開できる体勢を取っていた。すでに脱落して入るものの『またまたあ、そんなこと言うのはお前らしくねえな』などといって攻撃されないと分らないからだ。

素はすでにクリスタル・ブレイクを展開して戦闘態勢に入り、エル君も逃げるための準備をしている。

「つて、おい！ 何お前だけ逃げようとしてる！ 立場的に俺だろ！」

「エル君！ ここに来てそれは無いと俺も思うぞ！」

「無理だよ！ 僕が真つ向勝負で森羅に勝てるわけ無いだろ！？ だから二人の邪魔にならないようにここは撤退を」

「させるか！」

アクエリアスと素は一齐にエル君に飛び掛り、押さえ込む。もともと小柄な上に戦闘向きではないエル君は、体格のいい二人に押しつぶされて簡単に無力化された。

「は、離せー！」

「誰が離すか！ いいから戦え！」

「死ぬときは一緒だ。エル君！」

男三人がギャースカと喚んでいるうちに、森羅は三人下に歩み寄っていく。

「おいおい。何勘違いしてんだ？ 俺がいつお前らと戦うなんて言つたよ」

「えっ？」「」

その言葉に、本気で嬉しそうな声を出す三人。

「ほ、本当に戦う気はないの？」

「ああ」

森羅は拳を胸の前で合わせて上下に擦る。そうすると、彼の拳にオレンジ色に発光し、それとまったく同じ色の炎が発生した。

「俺は単純に、みんなを無力化しに来ただけだから」

その声はまったくいつものトーンであったはずなのに、なぜか三人には地獄の底から自分達を呼ぶ亡者の声に聞こえた。

「っていつかいつの間に関シオンがそこまで　！」

「馬鹿だなあ。二段階までなら女の子のパンチラ妄想しただけでもいけるんだって」

エル君の疑問にニコニコ顔で答えながら、森羅は腕を振り上げた。

「三人ならやっぱ、こんくらい威力ないとな」

「待て！　俺は実はすでに脱落してて　！」

「くそお！！」

アクエリアスの言葉を遮るように、半ばやけくそで棗が拳を構え、森羅に向かって飛び掛っていった。

しかし森羅は別段驚きもせず、ただ一言、

「『とうえん橙炎』」

技名を言い、思いつきり突っ込んできた棗に拳を叩き込む。喰らった棗はオレンジ色の炎を纏ったままエル君の所に吹っ飛び、非難しようと走り出していた近くのアクエリアスも巻き添えに盛大に爆発した。

爆煙が晴れて現れたのは、黒焦げになり防御エネルギーが切れて動けなくなった三人だけだった。

「いやー、これで残ってんのは俺入れて六人か。ルーちゃんは多分戦わないから五人かな？」

森羅は額を拭い、からからと笑いながら他のメンバーを探しにどこかへと行ってしまった。その姿はまるで悪びれた様子も無く、むしろ清々しくさえもあつた。

「あの・・・や、ろう・・・俺巻き添えじゃねえか・・・」

「虚しい・・・」

「くや・・・し・・・」

最後の力を振り絞って言葉を残した後、三人は揃って気絶した。

棗影明、エル＝エル、リタイア脱落。

蝶薙アクエリアス、とばっちり。

残り六人（欠席四名）。

少女は街に到達した。

基本的に街と森の境目である外周部には結界が張ってあるのだが、悟神族以外のものならば簡単に通ることが出来る。

しかしそこには同時に小さな門ゲートがあり、数台のカメラが侵入者に対して常に目を見張らせている。少女は今の形式となった国家に属していないためこの街、『関東』には正式な形での入場を行うことが出来ない。

仕方が無いので、少女は軽く能力ちからを使うことにした。

彼女が軽く地面を蹴ると、一瞬でその身体はゲートを突破し、街の中に入ることに成功した。おそらくカメラには何かが写ったというのがばれているだろうが、画像を解析してもばれない自信があったため、少女は何食わぬ顔でその場を離れる。

少女は人込みを縫うように進み、目的の場所を見つけた。少し古ぼけた感じのするその建物の中に、何のためらいも無く足を踏み入れる。

そこには、一人の女性が笑顔で立っていた。愛嬌の溢れた丸っこい顔。見ているだけで人を和ませるような不思議な魅力がそこにはある。

少女はその女性の目を真っ直ぐ見て、言った。

「コロッケ十個下さい！」

「あいよー！」

女性、総菜屋『風見』^{かざみ}のおばちゃんは笑顔で返事をし、慣れた手つきで目の前にある大皿からコロッケを取り、僅か数秒足らずで少女に注文の品を手渡した。

「はい、十個で五百円ね」

「はい」

少女は嬉しそうな顔で代金を払い、嬉しそうな足取りで店から出る。

早速手に持った袋からコロッケを一つ取り出しかじった。

カリカリと香ばしいころもに、中から溢れる芳醇なじやがいもとひき肉のうまみに思わず頬に手を当ててしまう。冗談ではなくほったが落ちそうになったと少女には感じられた。

早々に一個目を食べ終わると二個目を取り出し、口に運ぶ。が、その手が途中で止まる。

少女の目は、前方にある地図看板、そこにある『関東区総合霊園』という場所に目が止まっていた。

そしてその顔が、少し悲しさを帯びたものになった。

「先に、行っておかないとね……」

そう言って地図で道順を確認し、少女は霊園へと向かって歩いていく。

その足取りはどこか重く、どこか、儂げだった。

第二話 自由こそが生き様な人たち（後書き）

どうも！

まだ始めたばかりなので早めに投稿しようとしてたんですが、少し時間がかかってしまいました。申し訳ない。

次回はもうちょっと早めに最新話出したいと思います。
質問、感想など随時待っていますのでお気軽にどうぞ。

それでは、また次回。

第三話 四十パーセントの激闘

関東区総合霊園。

街の中心部から少し離れた場所に位置するそこは、丘のように少し高い土地にある。

住居区画から離れているため緑も多く、その高い場所に位置する土地柄のため穏やかな風が吹くそこは、命を終えた者たちを今日も優しく眠りに付かせている。

霊園の入り口には、一つの巨大な石碑があつた。

縦が二メートル、横は十五メートルを超えるその石碑は、奥のほうにある各家の墓石よりも少し真新しい感じがする。

石碑には『再世曆さいせいれき九八七年 関東機関だいしんさい大神災慰霊碑』と大きく刻まれていた。さらにその文の隣には、優に千は越えるほどの人名が刻まれている。

そしてその石碑の前に、少女は立っていた。目を瞑って両手を合わせ、ただ無心で拝んでいた。その透き通るほどの銀髪の短い髪が揺れ、彼女の甘い香りが、風の中へ溶けていった。

やがて目を開けると、脇に置いてあつた水桶とロッケの入った袋を持ち、奥の墓標が立ち並ぶ区画へと入っていく。中は非常に広いので、時折通路にある案内板を見ながら、少女は目的の場所まで歩いていく。

そして角を曲がり、目的の墓標が見えたところで、一人のある人物を見つけた。

日系特有の黒髪を後ろで二つに束ねた少女がいた。その左眼には髪の色と同じように黒い眼帯が付けれられ、しゃがみながら一つの墓標を拝んでいる。それはちょうど、少女が目的としていた墓標だった。

丁度眼帯がついていて死角である左側に少女がいるためか、またはよほど真剣に拝んでいるのか、眼帯少女は少女の方には気付かな

い。

一方少女の方は、少し驚いたように一歩近づき、恐る恐る眼帯少女に声をかける。

「もしかして、真白^{ましろ}？」

その声に、真白と呼ばれた眼帯少女は拝むのをやめ、少女の方に顔を向ける。こちらも驚いた顔になり、ゆっくりと立ち上がる。

「ルナ・・・？・・・ルナだあ！」

すると真白は少女、ルナの下へと走って行き、思い切り抱きついた。

「ルナだルナだルナだあ！ やつと会えた！ 十三年ぶりだね！」

まくし立てるように言葉を続ける真白に、ルナは困ったような笑みを浮かべる。

「そうだね、十三年ぶりだね。分かったから少し離れて」

さつきから顔をグリグリと胸に擦り付けられ、さすがに同性であっても恥ずかしいため引き離す。真白は満足したりしないような顔をしていたが、やがて興奮が収まったのかおとなしくなった。

「本当、やつと会えた。もう会えないのかと思うってたけど・・・」

「私も。こんなところで会うとは思ってなかったからびっくりしちゃった。元気だった？」

「元気だよ元気！ あれから友達もいっぱい出来て、今じゃもういるんな話したりするんだ！」

「へえ、どんなの？」

「んーっとね、女性週刊誌に載ってるセックス体験談ってあれ本当なのか

「他にはどんな話するの？」

「他にはねえ、電子系の強い子にエロゲーのモザイクの除去方法とか

「それにしても大きくなつたね」

これ以上は聞いてはいけない気がしたため、ルナは早々に話を切り上げた。いったい十三年間の間にこの子に何があったのか、少し

不安になった。

「うん！ ルナは全然変わんないね！」

「私はね。いま、いくつになったんだっけ？」

「今年で十八！」

「そっか。じゃあ私の歳、追いついたんだ」

そう言っつて、ルナは視線を真白の後ろ、最初の目的であつた墓標に向けた。その視線に気付き、真白も道を譲るように少し下がる。

「参つていつてよ」

「うん・・・」

ルナは水桶の水を柄杓ひしゃくですくつて墓石にかけ、墓前に持っていたコロッケの袋を供えて眼を閉じ、手を合わせる。真白もさつき水をかけていたのか、ルナがかけた分で墓の周りが少し水浸しになった。彼は元気？」

やがて眼を開けると、ルナは真白にそう訊いた。

「うん、元気だよ。今も学校で授業受けてるんじゃないのかな？」

「えっ？ あなたはなんでここに？」

「今日たまたま寝坊しちゃつて。っで、どうせ学校遅れるなら、久しぶりに顔出してあげようかな、って思つてさ」

真白はばつが悪そうに笑みを作っている。そっか、と言つて、ルナは立ち上がった。

「おい真白。こんなところで何やつてる」

不意に聞こえてきた声に、二人はそちらを向いた。

そこに立つていたのは、水桶を携えた壮年の男だつた。

歳は四十代後半から五十代前半ほどだが、その髪はほとんどが白髪になり、そこに黒髪がおまけのように混じっているだけで、それをオールバック気味にまとめている。着ている服が立派な作りの紋付袴つきはかまであるところを見るに高い身分にいるものなのだろうが、どこか着崩しているようなその風貌がどこか高貴さを感じさせない。逆にとつつきやすそうな軽い感じがした。

「裁牙のおっちゃん！」

自分と呼んだ真白を男、裁牙は呆れたような顔で見る。

「お前な、俺のことは理事長って呼べて言ってるだろ」

「今学校じゃないんだからいいじゃん。固いこと言いつこ無し！」

「そうか。じゃあなんで本来学校があって俺を理事長と呼ばなけりやならない時間帯にお前はこんなところにいるんだ？ 納得のいく説明してみろ」

「それは・・・その・・・」

言いよどんだ真白は裁牙から目を背け、どこか遠いところを見ている。

この男、裁牙は真白の通う学園の理事長である。そして何を隠そうこう見えて、この関東の管理者でもある男だ。

その裁牙が、真白の後ろにいるルナに気付いた。

「お前さんは・・・！」

「・・・ご無沙汰しています」

眼を見開いた裁牙に、ルナは深く頭を下げた挨拶をした。

「こいつは驚いた。十二年前、いや十三年前か。こいつらが世話になつたな」

「いえ、こちらこそ」

「ええ、と」

「ルナ。ルナだよ」

「ああ、そうだった。すまねえすまねえ。なんせあの時一度つきりだったし、お前さん自分じゃ名乗らずに行っちまうからよ。ろくな礼も出来ずに、すまなかつたな」

「いえ、そんな。こちらこそ、あの時はろくに挨拶もせずすみませんでした」

ルナはもう一度深々と頭を下げた。そういえば、と思い出したように裁牙は真白のほうに向き、

「話は変わるが、真白。お前本当になんでこんな時間にここにいる」

「あー！ そういえばルナ、お兄ちゃんに会いたいよね？ 会いたいよね！？ 裁牙のおっちゃん、お兄ちゃんどこにいるか知らない

「？」

「どつて、学園に決まってるんだろ。さっき出てくる前にキヨちゃんから直々に体育を戦育の授業にしたいって申請があったから、多分街の外の学園領区画じゃねえか？」

「あー・・・喜世子センセまた振られたんだ。あの人大抵振られたとき意外はそんなんしないからな・・・」

「でだ真白、お前は何で」

「さあ、行こうルナ！ レッツゴー、マイ・ブラザーのところへ！」

真白はルナの手を強引に掴むと、そのまま走って行ってしまった。霊園を出て行く二人の少女の背中を見ながら、ボリボリと頭をかきながら言う。

「ったく。どうせ寝坊でもしたんだろ、あのじゃじゃ馬娘め」

やがてその姿が見えなくなると、裁牙は墓標に向き直り、持っていた水桶の水を柄杓でかけてやる。しかしすでに間髪入れずに二人分の水がかけていたため、墓石を伝って地面に落ちた水は水溜りになり、彼の草履ぞうりと足袋たびを濡らす。

「うあつと！？ なんだよ、ったく・・・」

少しブルーな気持ちになりながら、ズリズリと足を地面に擦り合わせて水気を落とし、裁牙はしゃがみこんで手を合わせた。

真白にも、そして彼女の兄にも言っていないことだが、こうしてこの墓を参るのは彼の十三年前からの日課となっていた。

「姉さん、義兄にいさん。あんた達の子供は本当に手がかるよ」

そう言って、まるで本人達に向けるように、彼は何も言わない墓石に向かって笑みを作った。

その墓にはこう刻まれていた。

『神凧家之墓』と。

森エリアB - 5。現在時刻十時五九分。

授業開始から約二時間三十分。リミットの十二時三十分までにはあと一時間ほどあったが、授業はいよいよ大詰めになってきていた。丁度木々が密集しておらず、空が開けた空間に喜世子は訪れた。

周りの木もさほど多くないから見晴らしが非常にいい。だが逆にそれは、こちらのことにも向こうには見えていることをあらわしていた。「さーって、仕掛けるならここよ。いい加減、隠れてないで出てきなさい！」

喜世子が声を張り上げた瞬間、彼女の左右の茂みから人影が飛び出してきた。いや、飛び出すなどというぬるい表現ではない。茂みを吹き飛ばして二つの影が飛び出てきた。

右から攻めるのは二振りの刀剣の形をした^{デバイス}武装・『フタツトモエ』を構えた羽撃。左から攻めるのは日本刀型の^{デバイス}武装・『ミカギリ』を携えたマキだ。

「なるほど、一斉攻撃はまだしないのね」

喜世子は周りの気配に気を配りながらデイベイブ・コンダクターを背中から降ろす。

「行きます！」

「ッ！！」

二人の少女の剣戟が喜世子に向かって放たれる。羽撃は体に両腕を回し、そこから放つ二刀による同時攻撃。マキはギリギリまで鞘に刀を収め、自身の射程に入った時点で抜刀を開始する。

喜世子はデイベイブ・コンダクターで羽撃の攻撃を受ける。鍔のよう^{よう}に両端から迫る攻撃を真ん中に異物を挟む形で止めたが、羽撃はむしろそれを読んでいたのか、思い切り力をいれ、デイベイブ・コンダクターを完全に止めた。

押し切れることも引くことも出来ない喜世子に、マキが刀を抜き放つて、一撃を加えようとする。

「まだよっ！」

完全に抜刀しきる前、喜世子は脚を思い切り伸ばし、あるうこと

か自らマキの射程の中深くに飛び込み、抜かれようとする刀の柄頭つかがしらに思い切り蹴りを入れ、攻撃を発動前に食い止めた。

「ッ!?」

「そんな!?!」

マキと羽撃が同時に驚愕する。

喜世子はその動揺の瞬間、力が緩んだ羽撃の武装を思い切り押し切り、体を捻って向きを変え、マキへと向かって振りかぶる。

マキはとっさに防御しようとしたが、半分ほど抜き放ったときに鋭い蹴りと正面衝突したため、壁にボールを当てるように跳ね返って刀が鞘へと逆戻りしていたため反応が遅れる。

しかしとっさに切り返すことは考えず、とにかく防御に専念するため、マキは鞘を握った左手を前に突き出し、鞘に収めたままの刀でそれを受ける。

「やるじゃない!」

「やりますね。先生も!」

鏢迫り合いの状態になった喜世子に向かい、羽撃は後方から攻撃に入る。

すぐにこの状態を解こうとした喜世子だが、それをさせまいとマキがダイバブ・コンダクターを右手でしっかりと掴んでいた。鞘に収めたままだったのがここに来て弊害になった。完全に武器を封じられてしまい、防御が出来ない。

しかし喜世子は慌てない。出来ないならば出来ないなりに出来ることをやるのが彼女の信念であり、今の彼女を作り上げたものだ。

羽撃の刀剣が振り下ろされる。喜世子は片足を上げると刀剣の腹を思い切り蹴って軌道を反らす。どれほどの強さで蹴ったのか、使った手の羽撃が蹴られた方向に若干体勢を崩したが、すぐに逆に持っていたもう一振りが迫る。しかしそれも同じように刀剣の腹を蹴って反らされる。そしてその反動で帰ってきた脚を、円運動を利用して力を込め、向き合っているマキに思い切り叩き込む。

「ぐむっ!?!」

蹴りはマキの脇腹に深くめり込む。鉄鋼機構を展開しているはずなのに脇腹に鈍い痛みが走る。鉄鋼機構スチールフレームは基本的に五回は重度の損傷を負う可能性のある攻撃を防げる作りになっている筈なのだが、今の攻撃での損傷度合いを見るに、どうやら今の蹴りはその一回分相当の威力があったらしい。いつたい目の前のこの女はどれ程強いのかとマキは呆れてしまう。

そんなことを思っていると、もう一撃を放とうとしてきたため、やむを得ず握っていた鞘を離し距離をとる。蹴りは空振りだったが、金属の棒でも振るったかのような鋭さと重たげな風切り音が、本人が意識せずとも威嚇になっていた。

一旦距離を置かれたが、二人はそれでもかまわず突っ込む。喜世子は今度は冷静に、羽撃の剣閃を受け、マキの高速の居合いを体勢を低くして避けた。

するとマキは左手に持っていた鞘を上振り上げて殴打しにかかる。それを喜世子は空いていた左腕で難なく掴んだ。

それを見て二人の少女は口元を綻ばせる。それに気付き、何事かと警戒を強くする喜世子。リョーヘイの遠距離からの砲撃かと思っただが、その理由はすぐに分かった。

自分の丁度目の前に見える木が、さつきより近くに見える。いや、今も近づいてきている。

よく見ると木の根元が土煙を上げながらどんどんこちらに近づいてくる。逃げようとするが、両端から武器を、腕を取られてしまう。今この状態では逃げる事が出来ない。

「ハアッ!!!」

次の瞬間、掛け声と共に十分な距離まで近づいてきていた木の根元が土を巻き上げて跳ね上がる。それが木の根元を蹴り上げたことにより起こったことだと喜世子が気付いたのは、打ち上げられた木の根元部分が身体に直撃し、吹き飛んだときだった。

「げへっ!!!」

直撃した腹部を押さえながらも何とか受身を取り、体勢を立て直

す。自分を吹き飛ばした木の陰にいたのは、小柄な身体をした金髪の少女、アンナ＝リーベンスだった。

「アンナか……。まさかそんな形の奇襲とは思ってなかったわ。先生ビツクリ」

「どうもですわ、先生」

アンナは一礼すると、すぐに意識を戦いに切り替え構えを取る。その手にはすでに籠こて手型武装デバイス『ゼン』が装着されている。

この少女、元EC連合の貴族だった祖父母を持つため、この典型的なお嬢様言葉が普通なのだ。

三人の生徒に囲まれながら、喜世子は鉄鋼機構スチール・フレームの損傷度合いを見る。急所に分類される腹部にもらったため、損傷度合いは二十パーセント。残り四発分となっている。

それを見て、喜世子の目が少し細くなった。

「ちよーつちやバイかな。先生もう少し本気出しちゃってもいいかな？ あと十五パーくらい」

「あら、それでいったい何パーセントになるのですの？」

「四十パーセント」

その半分にも満たない数字を聞いても、別段生徒達は憤慨しなかった。加算された分を引いても二十五パーセントと本来の四分の一程度だったことを、むしろ妥当な線だなと皆一様に納得する。

皆それぞれ自分の強さや能力に少なからず自信やプライドを持っている。だが、はつきり言って今の自分達の強さは喜世子に本気を出させるレベルのものでないことを熟知している。しかも言うならば、その強すぎる担任教師に初めて途中で強さの割り増しを使用させられたことを、生徒達は逆に誇らしく思っていた。

「では、わたくしたちもそれに答えられるよう、力を出し尽くしましょう！」

「そうだね。うん」

「……そう……だね……」

「あれ？」

今何かおかしなテンションの人物がいた気がする。

「い、行きますわよ！」

「行くよ。うん」

「…い…くぞ…」

「ちよつと羽撃さん！ 何であなたそんなにテンション低いんですの！？」

アンナは隣でテンションが壊滅的に激減している羽撃に声を荒げる。

さつきまで威勢良く喜世子に向かっていた姿は今は見る影もなく、本当に同一人物かと思うほど元気がない。

「さつきまでの勢いはどうしたんですの！」

「…だって…」

「だって？」

「お腹すいたんだもん…」

「あなた攻撃に入る前にお弁当三つも食べてたでしょ！ なんでもうお腹すくんですの！」

「だって…今日は急いでだから有り合わせのおかずしか入れてなかったし…戦育用のスタミナの付くもの入れてなかったのよ…」

「幕の内弁当にのり弁、山菜弁当まで食べてましたわよねあなた！ しかも体育会系男子が愛用してるような底が深い弁当箱で！」

「それにしたってどうしてこんなに早くお腹が……」

「合流する前に…森羅から逃げるときにたくさん力使っちゃって…」

「あのクサレ変態！」

森羅のこともそうだが、アンナはこの暴食巫女の燃費の悪さに頭が痛くなるのを感じた。成績優秀、品行方正、性格もいいが、この異常な食欲と休み時間の早弁がどうにもいただけない。しかも三時間分の休み時間全てで早弁を平らげたあとの昼休みに五段の重箱弁当を一人で食べ切るのだから、本当に胃袋が異次元にでも繋がってるんじゃないかと思う。

数人を除いてこのクラスの面子めんつは小学校時代からの付き合いで、アンナと羽撃もそのころからの付き合いだが、誕生会などのお呼ばれがあると、必ず次回から親が『たくさん食べていってね』という台詞を言わなくなったのは今でも憶えている。それだけ食べていながら出るところは出過ぎていて、引つ込むところは引つ込んでいるスタイルを維持しているのは同じ女性として本当に不思議でならない。

「他にお弁当ないんですの？」

「無理…あれお昼用……」

「もう！ こんな大事なときに！」

「あー、もうとりあえず行くね」

そのやりとりに業を煮やしたのか、次の瞬間、一瞬で数十メートルの距離を詰めた喜世子の武装デバイスが衰弱している羽撃に向かって振られる。

速い、と思う暇も無い。アンナは防御に入ろうとするが間に合わない。当の本人の羽撃も武装デバイスが半分ほど振るわれて今やっと気付いたという風だった。

逆袈裟気味に脇腹を狙った一振り。頭を狙わないのは女性であるからという喜世子の優しさだ。一見甘さとも取れる行為だが、彼女達との実力差を鑑かんみれば当然といってもいい配慮だ。

しかしその一振りは一本の刀によって防がれる。アンナを挟んで二つ隣にいたマキが、いつの間にか羽撃の前に立っていた。刀はまだ鞘に納まったままだ。

「速いわね。相変わらず」

「負けます。素には」

一撃で手が痺れるほどの打撃に顔色一つ変えず、マキは力任せに押し切つて拮抗状態を解除する。そして素早く自分の腰まで刀を引き、居合いの構えを取った。

喜世子はマキの手を止めようとしてアンナに反撃を受けるのを避けるため、一旦地面を蹴つて後ろに引く。

「『三疊断！』」
さんじょうだち

マキは一息に刀を抜き放ち、何も無い空間に振るう。しかしその太刀筋の直線状にいた喜世子を斬撃が襲った。武装を防御に回していなかったら恐らく防御エネルギー大幅に削られていただろう。なにせ迷うことなく真っ直ぐ首を狙ってきたのだから。

三疊断。その名が示すとおり遠くにある物体を切る技である。それはマキの持つ達人級の剣術と、彼女の唯技スキルによって始めて使用が可能となる。

斬撃の着弾を確認し、刀を鞘に納めたマキは追撃に出る。

踏み出した彼女の足裏に、突如として術式発動用の陣が展開される。そして術者の発動の意思を受け、陣はマキを高速で発射した。

射程圏内に入ったところで、マキは武装デバイス・ミカギリを抜き放つ。

喜世子はそれを受け、鞘と刀で両手が塞がってから空きなマキの腹部に向け蹴りを放つ。

するとマキの前方に先ほどよりも巨大な陣が現れ、彼女を元来た方向に跳ね返した。

マキの唯技スキル、『受け容れざる者』は引き離す力、斥力せきりょくを制御することが出来る力であり、先ほどの三疊断もその力を使い、斬撃を刀から引き離すことで発動する。このようなとっさの回避行動などにも使うことが出来る便利な力だ。

引き下がったマキを、今度は逆に喜世子が追う形になる。マキは牽制のために三疊断を放つが、喜世子は難なくそれらを受け流す。

そこで、マキと入れ替わる形でアンナが前へと出る。喜世子は一度最後の斬撃を払ったところで僅かに隙が出来ている。このタイミングの取り方のうまさには感心するしかない。

アンナは喜世子に向かい手を突き出す。掌底しては遅いそれをとっさに武装デバイスで払おうとしたところで、喜世子はしまった、と思う。

アンナは自分に向けて振られた喜世子の腕とまったく同じ動きをしながら彼女の懐へともぐりこみ、その手を取ると一気に捻り上げる。

瞬間、自分より十センチ以上身長差のある喜世子の身体を真上に持ち上げてしまっていた。

アンナは幼少期より柔術を主体とした格闘技を身体に叩き込まれており、それらを用いて戦闘を行う。武装が籠手デバイスなのもそのためだ。さらにその怪力による強力な打撃技を持ち、『柔よく剛を制す』ではなく、『柔と剛にて制す』というのが彼女の姿勢スタンスなのだ。

喜世子は空中に逆さまに持ち上げられたまま思考をめぐらせる。ここから恐らく地面に落とされることは容易に想像できる。そこからどうするかを空中にいる僅かな時間で懸命に考える。

だが、その考えは自分の背中に突如走った衝撃で全て無駄になる。アンナは衝撃と同時に手を離し、喜世子はそのまま衝撃に流されて吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。それでも途中から強引に受身に持っていたのはさすがの一言に尽きる。

すぐに体勢を立て直すと、そこにはアンナとマキが同時に迫ってきていた。マキの剣戟を、アンナの手を払いながら、喜世子はある場所を凝視する。頭の中に叩き込んだある地形が正しいならば、そこは少し高く盛り上がった形になっているはずだ。

「リヨーヘイね……くっそ、すっかり忘れてたわ……」

ここにはいない、遠距離から自分を打ち抜いたリヨーヘイの技量に感心しながらも、内心は少し悔しく思う。どこかで砲撃してくるとは思っていたが、まさか照準と威力の調整がずればアンナをも巻き込んでしまう可能性のあるあんな状態からとはさすがに予想していなかった。よほどのチームワークと信頼がなければこんなことは出来ない。

今日は本当に嬉しい事だらけだと、喜世子は薄っすらと口元に笑みを作る。

するとその隙を突いて、アンナが喜世子の左手首を掴んだ。そのまま捻りを加えて投げようとする瞬間、喜世子は加えられたものは真逆の方向に力をいれ、その動きを逆に封じる。

「くっ！」

アンナはすぐに別の手を加えようと手を離す。が、手を離して引こうとした途端、喜世子が今度は逆に捻りを加え、掴んでいるアンナを投げ飛ばそうとしてきた。

柔術は基本的に掴んで技をかけるものだが、それが達人級になると条件さえあつていればその逆に、掴んでいる相手に技をかけることが可能になる。

それが分かっているからこそ、アンナはとっさに握り返し、さつき喜世子がしたように逆方向に力を加えて動きを相殺する。それによつて、離そうにも離せない完全に拮抗した状態に追い込まれてしまった。

傍から見ればただ手を掴んで動かないように見えるが、どちらかが動きを見せればすぐに投げられる、非常に高度な技の応酬が繰り広げられているのだ。

しかも喜世子はそれを行いながら逆の手でマキの相手をし、さらにそのままアンナをリョーヘイの射線に入れて盾代わりになっている。さらに言うならば、喜世子はこの技を今初めて使ったのだ。たった今受けたばかりの技の仕組みを一瞬で理解し、その対抗策をすぐのものにしてみせるのだから本当に強さの底が知れない。

しかしアンナも柔術だけなら喜世子以上の実力を持っている。マキへの対応で一瞬だけ出来た意識の隙を突き、その瞬間に手を離して体勢を立て直す。ここで深追いして技をかけることは得策ではないと分かっているからだ。その代わり、懐ふところからあるものを取り出し、後ろを向いて羽撃に何かを投げた。

「羽撃さんっ！」

「え……？」

投げられたものは三つの飴玉と、細長いクッキーを柔らかくしたような携帯食料『熱量メイト』が一本。甘党のアンナが持っていた食料の全てだった。

それを見て、羽撃の眼に復活の灯火ともしびが宿る。

投げる前に全て封を切つてあつたそれを、羽撃は素早く前進し、

方向がそれぞれバラバラに投げられていたそれらを、あろうことが口だけで全てキャッチしてしまう。

ゴリゴリと飴玉を噛み潰し、水がなければ食べられない熱量メイトを難なく飲み込み、プハー、と一息。

それで、彼女の眼に再び闘志の火が戻る。

「行くわよー！ー！ー！」

完全復活を果たし、羽撃は一息で喜世子の眼前まで肉薄した。

「やりましたわ！」

「三対・・・いえ、四対一ね」

武闘派女子三人の猛攻に、さすがの喜世子も押され始める。きちんと腰を据えて戦い合えるのならまだしも、遠距離からの狙撃に常に気を配っておかなくてはならないこの状況ではさすがに難しい。といっても、生徒達からすればまだまだ彼女は脅威であることに変わりはないのだが。

そうこうしている内にどんどんと押され始め、喜世子はたまたま体勢を立て直すために大きく距離をとる。それをさせまいと、三人はさらにそれを追い続ける。

「ちよつちヤバイかなあー・・・」

これではジリ貧だと判断した喜世子は一旦引くしかない、生徒達に背を向けて駆け出した。

「しっかし、一時はどうなることかと思っただけど、これで何とかなっただな」

森エリアA-3で、リョーヘイは武装・『メントモリ』を肩に担いで安堵の息を漏らす。

一時は羽撃が脱落するのではと内心ヒヤヒヤさせられたが、何とか持ち直し、今はエル君が脱落する前に残した作戦通りに事が運んでいる。

「さあつて、こつからは俺たちも前線に出るからな。頼むぜ、ルーちゃん」

リヨールへイは後ろを振り向いたが、そこにあつたのは頭を抱えて岩陰に隠れている少女の尻だった。

「ルーちゃん…怖いのは分かるけど、もう腹括ろつぜ」

そう言つて後ろで震えている若干男性恐怖症の女淫魔^{サキコバス}、ルーリイ
「ネリオットに声をかける。」

「で、でもでもでも…」

情けない声を上げながら、ルーリイは顔を上げて岩陰から顔を出す。脚の位置を変えるときにバルンツ！ とその巨大な胸が大きく揺れる。Gはあるらしい。

ふわりとした緑のロングヘアで、淫魔族特有の端整で美しい顔立ち、まだ成人していないため可愛らしい部類に入る造形をしている。

リヨールへイはハア、と思息を吐く。

「大丈夫だつて。別に喜世子先生とガチでやり合つて訳じゃないんだから。そんなこと言うなら俺だつて後方支援が主体だから前線出んの怖えんだぜ」

なんとか説得を試みるが、ルーリイはどうにも決心がつかないらしく『う〜ん…』などの煮え切らない返事を返してくる。

そうこうしている内にリヨールへイの使^{シゲ}、白蛇型の『シラバミ』が音声を発し、作戦開始が近いことを告げる。

「ルーちゃん、頼む！ 俺たちにこれが成功するかどうかがかかっているんだ！」

手を顔の前に合わせて頭を下げてくるリヨールへイを見て、ルーリイはしばらく考え、やがて、恐る恐る首を縦に振る。

「分かった……」

「おっしや！」

ガッツポーズをしたあと、リヨールへイは急いでメモントモリを構え、スコープを展開してそれを覗き見る。

そこには、三人の追撃から必死に逃げる喜世子の姿が映っていた。

現在喜世子たちは森エリアB-6にて戦闘を行っていた。

正直、喜世子はすぐに距離が開いて体勢を立て直せるだろうとふんでいたのだが、思いのほか彼女達が追いつきそれをさせてくれないため、

(これって…ヤバい…?)

と、少し焦りが見え始めてきていた。

そこへアンナの当て身が飛んできたため、慌てて避け、意識を戦闘に切り替えた。

このまま逃げ回っていても埒が明かないと、喜世子は思考をめぐらせる。このままあと一時間ちよつと逃げ切れれば時間切れで彼女の勝ちになるのだが、それは全力で向かってくる生徒達に対して最低の侮辱だと端から考えていない。

そのため、次にある空間が開けたポイントで勝負を決めると決心した。

それはもうあと数十メートルの所まで迫ってきている。

(決めるっきゃないか)

そのとき、アンナの声が森に響いた。

「羽撃さんっ!」

「まかせて!」

「ッ!?!」

見ると、羽撃はフタツトモエの柄同士を合わせ一つにする。それは一本の弓となる。エネルギー体で出来た弦を引き絞り、煌々と光る光の矢を生みすと、一気に発射した。

喜世子はデイバイブ・コンダクターで防御したが威力が強く、そのまま後ろに弾かれてしまう。体勢は崩さなかったものの、吹き飛ばされている間もマキとアンナが追いついてくるため気が気では

ない。

羽撃はさらに弦を引き、複数の矢を生成して一息に放つ。それを弾き落としながら後退を続けると、目的地の開けたポイントに到着した。

ここで決着をつけようと構えようとした瞬間、突如として周りの地面から複数の筒状の装置が円を組む形で飛び出してきた。

これこそが、脱落前にエル君が棗に設置させていた最終兵器だった。

それらは起動するとドーム状の結界を作り、彼女達四人を閉じ込めてしまった。そして後退していた喜世子の背中が結界にぶつかってしまう。

まだ少し距離を取る気でいた喜世子にとっては迷惑この上ない完全な予想外だった。結界は思ったよりも狭く、四人で闘うには窮屈すぎるため、喜世子はすぐに結界を破壊しようと、結界の壁に向き直って武装デバイスを振るう。

そんな彼女の眼に飛び込んできたのは、さっきまで逆方向にいたはずのリョーヘイのメントモリの砲弾だった。

白い光線が真っ直ぐ喜世子を狙って飛んでくる。喜世子はいつの間にも逆方向に移動したのかということよりも、このまま結界を破ればそのまま返し手が出せない自分に直撃すると察知し、すぐに防御体勢を取る。

直後に、結界に砲弾は直撃した。

初めからあまり丈夫なものではなかったのか、結界はその一撃で崩壊する。しかしその時に生じた爆発で、喜世子は地面に叩きつけられた。

今度のは完全に予想外だったため、受身を取る暇も無い。ごろごろと地面を転がり、しばらくしてようやく止まる。

粉塵が立ち込める中、痛む身体を押さえて立ち上がる。

瞬間、背後から彼女の肩口に巨大な光刃が突きつけられた。巨大な砲身の下部から出現しているそれは、間違いなく近接戦時に展開

されるリョーヘイのメメントモリのものである。

反撃しようとするが、前方からマキに首元に刀の切っ先が突きつけられ、さらにアンナに右手首を掴まれて捻られ、固められてしまふ。

さらに粉塵が晴れた前方には、羽撃がフタツトモエに矢を番えてこちらを狙っていた。

完全に包囲され、誰がどう見てもチェックメイトに追い込まれていた。

「あららー……ヤバくね？」

「ヤバいんじゃないかって、終わりなんですよ、喜世子先生」

後ろから聞こえてきたリョーヘイの声に、喜世子は顔を向けることが出来ないため『そっか……』とだけ言っておく。

「で、ルーリーの『ジャンプウォーカー阻まれない歩み』であたしをここまで追い詰めたわけだ。すごいじゃない。ルーリー、あんたもね」

さつきから感じていたもう一つの気配、ルーリーに向かい、喜世子は^{ひねま}勞いの言葉をかけてあげた。

リョーヘイの後ろに隠れていたルーリーは一瞬ビクリと飛び上がり、おずおずと顔を出す。

今までリョーヘイが一瞬で色々な場所から攻撃を行ってきたのは、クラスで補助系最強の異名を持つ彼女の^{スキル}唯技の一つ、^{レポート}空間跳躍能力・『ジャンプウォーカー阻まれない歩み』あつてのことだった。

「あ、ありがとうございます……」

ボソボソと、少し照れくさそうにルーリーは礼を言った。

それを聞いて、さて、と喜世子は覚悟を決める。

「さあ、やっちゃいなさい。今回はあんた達は本当によくやったわ。私の負けね」

ハア、と少し悔しそうに息を吐く彼女を見て、生徒達は嬉しそうに笑った。

ドゴーンッ！

途端、羽撃の頭上からオレンジ色の炎が降り注ぎ、彼女を吹き飛ばす。完全な不意打ちだったため防御する暇もなく、
「きゃ」という短い悲鳴だけが聞こえ、羽撃は脱落リタイアとなった。

他の五人が何が起こったのか分からずポカンとしていると、さっきまで羽撃がいた場所に人影が降り立った。

両手に不可解な文字の描かれた手甲をはめ、黒色の短髪を風になびかせ降り立った人物は、

「……森羅!?!?」

「そうだよ、森羅だよ」

人影、神凧森羅はニヘラッと笑い、そう言った。

第三話 四十パーセントの激闘（後書き）

どうも！

ここ最近筆の早い作者です。自分でも驚いています。

やっぱり感想とかもらうと「ああ、頑張らなきゃ」って気持ちが変わってきますね。

ご意見ご感想ありましたらいつでももください。それだけ励みになります。

それでは、また次回。

第四話 過去とコロッケと関節技

真白とルナは手を繋ぎながら、商店街の中を歩いていた。

真白は今年十八歳であることを差し引いても女性の中では長身に入る部類の体格なので、それは一見すると年のそう離れていない姉妹が歩いているようにも見える。しかし見るからにうきうきとした空気を噴出させている真白に比べ、手を引かれているルナは非常に落ち着いた雰囲気であるため、どちらが姉か、と訊かれたら答えに詰まるところだ。

「あれ、真白じゃないかい」

途中、ルナの買ったコロッケを二人で食べていると、前方の曲がり角から出てきた人物が二人を見かけ声をかけてきた。

真白たちの通う学園の制服の上から着物を着流しに羽織り、帯で腰辺りを無造作に結んだだけのだらしない格好の女性だった。

「あっ！ しつつん！」

それに気付き、ぱたぱたと手を振る真白に、しつつんこと獅子緒ししおは、のっぺりとした足取りで彼女の下まで歩いてきた。

「どうしたんだい、こんなところで」

「寝坊っ！」

「威張って言ったこっちゃんいだろ、それ」

胸を張って答える真白に、獅子緒は苦笑いを浮かべている。

「そう言っしつつんの方はどうしてこんな時間にここにいんの？」

「寝坊？」

「あんだじゃあるまいし。あたしは今羽撃んところからの帰りだよ。兄者あにこやのお使いで新術式を受け渡しに行ってたのさ」

羽撃の実家である十百千神社とせは、ここ関東においては二つしか存在しない神社の一つだ。神がいなくなつたこの時代では、神社や寺院は神を祀り讃える場所ではなく、術式の研究機関兼術式の販売などを行う場所になっている。

獅子緒の家はあまり裕福では無く、そこへの個人的に開発した術式を『奉納』することで生計を立てている。もっとも、彼女が趣味でやっている市場取引の方が稼ぎはよく、今の財産総額なら三年何もせずに食べていけるだけの蓄えはあるらしい。

「ところで、その子は？」

獅子緒はそこでルナに意識を向けた。さつきからどうしていいかわからないような雰囲気、ルナは真白の後ろで佇んでいる。

「ルナだよ！」

「いや、ルナだよって言われても……いや、ルナって確か……」

「うん！ あたし達の命の恩人！」

そこまで言われ、獅子緒はハツとしたような顔になる。そして次にまじまじとルナの顔を舐めるように見る。

「命の恩人って……確か十三年前だよ。あたし達より年下じゃないのかい、あんた？」

「へっ！？ あ、はい……」

はつきりと自分に対して声をかけられ、恥ずかしいのかルナは眼を泳がせる。

「年下なんですけど……年下じゃないと言っか、なんと言っかですね……その……」

しどろもどろで要領を得ないことを口走るルナの心情を察したのか、獅子緒はもういいよ、と言ってそこで話を切った。

「あたしの名前は獅子緒。真白とコイツの馬鹿兄貴の友人だよ、よろしく」

「あ、ルナです。ルナリアアルテミル。よろしく」

互いに名乗りあい、獅子緒はルナに手を差し出す。お近づきの印にまず握手は彼女のスタイルだ。ルナは察し出された手に一瞬戸惑うも、その手をしっかりと握った。獅子緒もその手を力強く握り返した。

「さて、挨拶も済んだことだし、学園に行くよ」

「ええー！ 行くの！？」

「え！？ 行くつて言つてなかつたっけ？」

「そんなん裁牙のおつちゃんから逃げる口実に決まつてんじゃん」

「裁牙のおつさんも大変だな……」

獅子緒はやれやれと息を吐く。

馬鹿言つてないで行くぞ、と真白を促し、学園の方に歩いていつてしまった。

「あ、待つてよしつん！」

真白は慌ててルナの手を取つて駆けていき、獅子緒と一緒に学園まで歩いていく。

(……どうしよう)

ルナは真白に手を引かれながら、内心ドキドキしていた。

最初はただ久しぶりに街を見つけたため、好物のコロッケを買つて墓参りをして帰るつもりだったのが、そこで真白と出会つていきなり学園に連れて行かれることになるなんて思いもしていなかった。

これから行く学園で、十三年ぶりに再会するもう一人の人物。

いったい彼はどんな風に成長したのだろう。素敵な青年になつているのだろうか、それともあの時のまま成長して、今でも誰かを笑顔にしているのだろうか。

ルナは自分の格好を見る。

細身ながらもしつかりとした肉付きの自分の体に纏つているのは、毎日洗濯してはいるがもう何十年と変えていない着古したインナーに上着とスカートだけだった。

それを見て恥ずかしさに赤くなる。

(あの時よりも、格好良くなつたのかな)

最後に分けられるときに、彼は言った。

いつか必ず合に行つて、その時は絶対に、自分と家族になる、と。

まだたった五歳の少年が力強い眼で言ったその言葉に、そして最後に見せたやわらかな笑みに、自分がどんな感情を抱いたのかは今でも憶えている。いや、今でもその感情を抱いている。

そう思っ、ルナは自分の顔が熱くなるのを感じた。

そして冷静に考えてみて、当時にその感情を抱いたのであれば、自分はもしかしてとても危険な部類の人種に当てはまるのではと思っってしまう。

(い、いやいやいや!! そ、そりゃ確かに当時、当時はね! 確かに彼もまだそんな歳ではなかったし、もしかしたら当時、当時は!! 私もそう見られて当然かもしれないけど、あの時は……: そう、友人! 大切な友人として抱いていた感情! だから私はそんな口りだかシヨタだか言う危険な人種では断じてなくて!)

「がああああ!」

不意に聞こえてきた真白の悲鳴に、ルナはハッと我に返る。見るといつの間にか自分は恥ずかしさのあまり握っていた真白の腕に思いつき関節技をかけていた。

「痛っイイ!! お…折れるっ!!」

「それ以上いけない!」

もうあと一步で枯れ枝をへし折ったような快音が聞こえる前に獅子緒が間に入って事なきを得る。

「ご、ごめんね真白! ちょっと考え事してて……」

「あいたたた……もう、痛いよルナ」

真白は決められた左腕を押さえながら苦笑いを浮かべる。

「本当にゴメンね」

「いや、いいよ。私もコロッケ全部食べちゃったのが悪いんだし」

「……………えっ?」

ルナの声のトーンが二つほど下がった。自分でも出そうとは思っていなかったが出てしまった。

真白の手を見るとさっきまであと六個は入っていたはずのコロツケの紙袋は折りたたまれて鶴になっている。さらによく見ると自分の手を握っている手は油でギトギトに汚れ、口の周りにはコロツケの衣がびっしりと付いている。すでに目の前の少女はそれだけで女として終わっている感じだった。

「いや、これ風見のコロツケでし、ウチもよく食べるんだけどねってあれルナどうして腕を捻り上げるの」

言葉が終わる前に、ルナの腕は勝手に動き、勝手に少女の腕を決めていた。

「がああああ！」

オレンジ色の炎が燃え盛る中、森羅はへらへらと笑みを作る。

「何だよ何だよ、先生絶体絶命の大ピンチじゃん。これじゃ俺出てきた意味ねえじゃん。先生倒して終わりじゃん」

「ちよつと」

「ん？」

呼ばれて振り向いた森羅の眼前にあつたのは眩い光の矢だった。

一瞬時間が止まったかのような沈黙のあと、それを番えていた羽撃は口パクで死ねと言って満面の笑みで弦を放す。引きつった笑顔になった森羅は、速攻で頭を下げてそれを避けた。

まず見えたのは羽撃が起き上がるころだった。

リョーヘイは緊張した面持ちで森羅を見ていたが、森羅は後ろの羽撃に向き直る。次の瞬間、羽撃が零距离で森羅の頭にヘッドショットをぶつ放して、森羅がそれを避けた。

まあそこまではよかった。別によかった。いつも教室内部で見る

光景だ。

森羅が女子の着替え中に教室に入って撃たれ、昼休みに魔界男子スクウェア四人組がエロゲーのジャンルはどれが至高かを討論していると食事ラオース中にうるさいと羽撃に叩き伏せられ、エル君がクラス的女子をモデルにした同人ゲームを作成していて運悪くベツドシーン作成時に羽撃に見つかり持っていたノートパソコンごととんでもないことにされたこともいつものことだ。

しかし外れた矢がこちらに向かってくるのは完全に予想外だった。 「逃げるーーーーー!!!」

リョーヘイの号令で矢の射線上にいた五人が一斉に飛び退く。流れ弾は四人がいたところに着弾し、盛大に辺りを爆破する。確実に頭部は吹っ飛ばすつもりだったのがよく分かる。

リョーヘイはすぐに起き上がったが、次の瞬間、目の前にとんでもないものが現れた。

喜世子だ。

笑っている、楽しそうに。拳を握っている、めっちゃくちゃ硬くしまった、と思いきわててメメントモリを振るうが、元々近接格闘用の光刃は緊急時に使用するための予備兵装でエネルギー効率の問題を考慮していない。すでに装填していたライト・カードが底をつき、光刃は展開されていなかった。すぐに体内生成の心力しんりょくで補おうとするが遅く、一発目の拳が顔面に刺さるり、一気に防御エネルギーの二十パーセントを持っていかれる。術式を展開した形跡はない人間の徒手のみでどうしてこれほどの威力なのか毎度毎度不思議に思う。

もはや形振りかまわず、リョーヘイは光刃の生成されていないメメントモリをただの鈍器として振るうが、喜世子相手には速度が足らず、振りぬく前に四発の拳の乱打を喰らいリョーヘイは脱落リタイアした。さらに喜世子はその近くにいたアンナに飛びかかる。アンナはとっさにその腕を取って技をかけに入るが一步遅く、逆に力を利用して風車のように一回転し、伸びきった喜世子の腕に引っ張られて

地面に叩きつけられる。背中を思い切りぶつけたため呼吸が一瞬止まり、その直後に喜世子の腹部への一撃で脱落^{リタイア}。

さらに切りかかってきたマキの剣閃を避け、二、三度剣を交えるがやはり喜世子の実力の方が上であり、大きく振りかぶった一瞬の際に五本急所を突かれて防御エネルギーがゼロになり、マキも脱落^{リタイア}。そして、そこから少し離れた草むらに隠れていたルーイにも迫るが、彼女は涙目で両手を挙げて降伏のサインを出す。それで全てが終わった。

僅か十一秒、羽撃の矢が着弾してからの大逆転劇だった。

「つぶねえな羽撃！　あにすんだよ、なんでそんなご機嫌が四十五度なんだ！？」

「もう一発喰らわすわよこのアホ！！　あんた今何したか分かってないの！！」

「俺の溜まりに溜めたものを羽撃の頭からぶっつけた」

「卑猥な物言いをするなあ！！」

顔を真っ赤にしながら『卑猥な』の部分で矢を生成、『物言いをする』で番え、『るなあ！！』で発射。この間僅か一秒弱。あまりの早業に森羅は避ける間もなく顔面に矢を喰らい吹き飛んだ。

しかし若干芯がずれていたため、矢は着弾と同時にそれで別の場所を爆破する。

「チイツ！　次は確実に仕留める！！」

「ちよい待ちちよい待ち！　お前今女の顔してねえよ！」

防御エネルギーを八割失いながらも平然と起き上がる森羅を見て、鬼の形相の羽撃は一瞬条約で禁止されている『対人に対しての戦力上限』のリミッターを本気で外しかける。

「はい、そこまでよ羽撃」

しかしそれは制止させられた。あと一歩で世界の害虫を駆除でき

そうなときに横槍を入れられ、半ば女性がするようではない据わった目つきで羽撃は声のほうを見る。

そこにいた喜世子はやれやれといった感じに頭をかき、

「悔しいのは分かるけど、あんた、自分の鉄鋼機構スチールフレームのエネルギー見てみなさい」

そう言われて羽撃は電子画面を展開する。そこには残量ゼロという表記だけがなされていた。

「あんたはさっきので失格、今授業中だからあんたは森羅に攻撃することは出来ない。分かるわよね」

羽撃は何か言おうとしたがすぐに口をつぐみ、しばらく悔しそうにしていたがやがて息をつく。

「解りました、先生の言うとおりにします」

「ん、よろしい」

羽撃は疲れたように手を下げる。弦を引いていた右手だけを。

「うわおう!!」

ビュンツ!! と風切り音を立てて矢が森羅の頭上を掠めていった。

「おめえ今攻撃しないって言ったべ!!」

「いやいや、今のは手を順番に下ろそうとしたらなつた事故よ事故」

「何で順番に下げんの!? 怖いわ、ちびりそうに……いや、なんでもない」

「ちびつたの!?!」

「ば……、違えよ! んなわけねえだろ、ちよつと汗が股間に集中しただけだよ! 断じてちびつてねえからな!」

「だって今……」

「ちびつてねえって! 証拠」

「証拠見せてやるって言つてズボン下ろしたら男として再起不能にするわよ」

喜世子に釘を刺され、森羅は渋々腰元にかけていた手を下ろした。舌打ち付きで。

「あんだねえ……」

「だってせっかく合法的に下半身露出できるチャンスだったんだぜ」
「ちびつてないことを確認させるために下半身をさらけていいなんて法律はこの世界のどこにもない！」

喜世子は本気で何かにつけて脱ぎ出すこの馬鹿のタマを潰してやるうかと思ってしまう。水泳の授業でも気付くと海パンを脱いでいるし、保健体育の授業を担当した後輩の日野ひのは泣きながらもこのクラスを担当したくないと言うほどのことをしでかしたこともある。もちろん後で同じ女性としてクラスの女子勢から制裁を受け、男子勢からは『童顔眼鏡っ子教師という重要枠を泣かした』という意味不明な理由でのリンチを受けた。もちろん自分もやっておいた。男子勢の中で『どんな気分だった』という尋問をしていた奴も危険思想を正すためにやっておいた。

「なあなあ、先生」

そんな馬鹿の馬鹿な行動の一部始終を思い出していると、馬鹿が口を開いた。

「これって結局どうなんの？ 俺の勝ち？ それとも先生との一騎打ち？」

森羅の視線は喜世子の後ろの倒れた三人と涙目のルーリイを見て言っている。確かにさっき喜世子は負けを認めたが、実際には止めを刺される前だったため今こうしている。これはルーリのどのようなだろうと思っただが、さっき止めを刺せと言いはしたが降伏はしていないことを思い出す。

「そうね、続投よ。あたしとの一騎打ちね」

「ええー、マジかよ！」

森羅は露骨に嫌そうな顔をした。

喜世子の降伏がどう取られるかは置いておくことにして、この場合、実際生徒側の最後の一人の状況を作り出したのはその生徒側の森羅の撃破によるものではなく喜世子が作り出したことにある。

生徒同士が潰しあって最後の一人になる、喜世子が生徒全員を倒

すという条件の場合、どちらの場合においても必ず生徒側の誰か一人と喜世子が残るように出来ている。その戦闘続行か否かを決めるのに重要になるのはその状態をどちらが作ったかになる。

簡単に言ってしまうえば喜世子に自分と誰か一人以外を倒させて、自分が残った一人を倒せばその場合生徒側の勝利、一方その逆に自分と誰か一人以外全員倒して決着をつけようとしても、喜世子がどちらかを倒せばその時点で生徒同士潰し合うという条件は消えてしまうという、やり方しだいではなんとも漁夫の利が目立つ勝利条件なのだ。

そしてこの場合適用されるのは後者である。

「マジだりいよ。俺せっかく嫌われ者演じてまでこの授業終わらせようとしたのにさ」

馬鹿は口を尖らしてブチブチ文句を垂れてくる。

「大丈夫、みんなそんなにアンタの事好きじゃない」

「人間不信になってやるう!!」

涙目になって走っていきこうとする馬鹿にイラッとして来て、喜世子は空に向かって二、三度発砲して黙らせた。

「あー、もうさっさと始めるわよ。授業時間も後一時間ちよいしがないんだから」

「それなんだけどさ、喜世子センセ」

「なによ」

始めるといったのにまだごねるように会話を続けてくる森羅に、喜世子はイライラと返答する。しかし次の瞬間、森羅の口から出た言葉に耳を疑った。

「手加減はすっからさ、とりあえず出せるとこまで解放していい？」
その言葉に、喜世子に羽撃、草むらに隠れたままのルーリイ、さらに意識を取り戻していたリョーヘイ、マキ、アンナもその言葉の意味を理解し目を丸くした。

あの森羅が面倒くさい戦育の授業で本気を出すと言ったのだ。

「どうゆう風の吹き回し？ あんたが本気出したいなんて」

「馬つ鹿だなあ、本気じゃねえつて。大体俺が自分の意志で力出せねえの知ってんべ？　ただ、いけるとこまででいいから本気出したってただだよ」

「じゃあもう本気でいいじゃねえか！　と面倒くさそうな顔で全員にツツコミを喰らう。」

「そっか、と森羅は頭をかいて、

「さつき羽撃が撃った矢が頭掠ったじゃん、あんときに思い出したんだよ。ニュースでやってる朝の占術せんじゅつコーナーでさ、『全力で物事に当たればいいことがあるでしょう』って」

森羅はニカツと笑顔になって、

「それつてすつげえ最高じゃね？　ちよつとメンどいの我慢すればいいことがあるだけ！　ちよいリスク、ハイリターンじゃん！」

笑顔を向けられた喜世子は、この馬鹿の純粹さとポジティブさと馬鹿さとアホさに今一度呆れてしまう。

まさか本気を出す理由が朝のニュース番組の占術の結果だとは。

しかし、喜世子はニカツと同じくらいの笑顔を向け、

「面白そうね、一回全力のアンタとやってみたかったのよ」

「おいおい、買い被りすぎんなよ。いくら俺が全力でも先生とじゃまだまだ戦力差ありすぎんぜ」

「大丈夫よ、生徒相手に本気出すなんて大人気ないことしないわ。でも、せめて六十パーセントまでは出させてよね。あんたも威力の方は鉄鋼スチール・フレーム機構が耐えられるまでなら好きだけ出していいから」

「んー……ま、それくらいならいつか」

アイツ特に考えてないな、と喜世子は思いながらも、今まで授業でおちゃらけているだけだった森羅が本気を出してくれることになんな理由でも嬉しかったりもした。

「それにしても『好きなだけ出していいから』か……なんて青少年にとつて甘美な言葉吐いてんだよ先生。大丈夫、そんなこと言わなくても先生のこととはちゃんと意識してっから俺」

「八八八ッ、何を言っつてんのかなこの脳内ピンク野郎は」

喜世子はディバイブ・コンダクターを構え、森羅は両腕のコウテ
ンを胸の前でカチカチと鳴らした。

「見せてもらうわよ。」プロト・マギカ「**原初魔術**」の力を」

「おうよ！ この“**火炎騒動**”パラダイスフレア」こと、**神凧森羅**かなきの力、見せてやるぜ
」！

第四話 過去とコロッケと関節技（後書き）

どうも！

戦育授業は次話辺りでラストです。次からは世界の解説を入れていくと共に物語が大きく動き出します。

それでは、また次回。

第五話 再会と誓い（前書き）

用語解説

使俱^{シグ}

この世界のほとんどの人間が持つてる高純度情報圧縮型端末。正確には高純度情報圧縮型演算補助端末、と長ったらしい名前なんだ。人間の中枢意識の中にあり、術式などを使うときはこれらが演算を代行してくれるから戦闘面などにおいても術式の高速構築が可能になるんだよ。簡単に言えば計算する用の意識と自分達より出来のいい脳味噌がもう一つ搭載されたって感じかな。言葉だけで聞くとグロいけど。

形は色々あって、動物型はもちろんのこと、人間型っていうのもあるんだよ。ある程度の自立意識や個性を持っているからペット感覚で持っている人もいるんだ。

これらは神社や寺院などで形状モデルが販売されているんだよ。ま、僕は今のやつは自分でプログラムして作ったんだけどね。

b

y エルllエル

第五話 再会と誓い

《再世曆一〇〇〇年 七月十五日 午後十二時九分》
さいせいれき

関東近辺の森の中をひたすら走る影がある。

数は二つで両方とも男。彼らは今、絶賛逃亡中だった。

「な、なあ……」

息も切れ切れに、後ろを走っていた男が言った。

「な……んだよ……」

前を走っている方も辛そうに答える。こっちは後ろの男よりも辛そうだった。ここまで明確に身体機能が低下するなら煙草なんて吸うんじゃないかと、彼は後悔していた。

後ろの男がなおも言葉を続ける。

「あれ……なんだったんだ……」

知るか、と辛そうに答え、前の男は考える。

二人は関東の守護兵団所属の平隊員だ。先日、関東最大の探知機レーダー『オテント』が探知した強力な神力反応しんりょくを調べるためここに派遣された。

最初は異常な反応があつたこともあつて全員が強張つたような面持ちだったが、現場に到着し、作業も一通り終え、特に何の問題もなかったため、全員で『オテント』の性能も当てにならないなどといって笑っていた。

そして、あれに出会った。

最初は自分達をいれ七人いた調査団は遭遇して僅か三秒で、その中ではトップの実力を持つ二人がやられた。それを見て逃げ出したメンバーも、それから三十秒後に三人目がやられ、それからは憶えていない。気がついたら後ろにいる男と二人だけになっていた。

「あ、あれ……どう見ても……」

「喋るな！ 今はとにかく走れ！」

前の男は荒い呼吸で痛む喉を振り絞り、怒鳴りつける。

通信を入れようと使俱^{シケ}を呼び出しているのだが、先ほどからまるで連絡がつかない。電子画面に映るのは砂嵐でもなく、ただ『通信中』という文字だけが映っている。壊れていたり通信を妨害されているというよりも、まるで通信という技術そのものが無力化されているというような感じだった。

「で、でもあれ……」

自分も必死なくせに、後ろの男がなお食い下がるように言葉を発する。通信も出来ず、イライラしていた前の男はまた怒鳴っていた。

「だからなんだって言うんだよ！」

後ろの男は今でも信じられないと言うような口調で、

「あれ、どう見て……も……にんげ」

そこまで言つて、不自然に言葉が消えた。呼吸を整えているのかと思つたが、そもそもその呼吸の音がしない。

転んだのかと思つて前の男が振り向くと、

そこに、あれがいた。

後ろを走っていた男が、それに首の後ろをつかまれて宙に持ち上げられている。

「っ!?!」

驚き、呼吸が乱れ、足がもつれて盛大にすっ転んだ。

「あ……ぎい……!!」

涙目になつて後ろの男は暴れるが、それは一向に動じない。それどころか微動だにもしない。

不意に、それが掴んでいる男の首から、青白い発光が起こる。それは煙のように空間を一度漂い、すぐにその手の中に吸収されていく。

「ああ……!!」

そしてしばらく経つた後、後ろの男は徐々に動きが小さくなって

いき、やがてピクリとも動かなくなった。

前の男はその光景を見て、何もできずに震えていた。知っている。今の光景を、彼は知っていた。

だが同時に信じられずにいた。今の現象を引き起こすことが出来る存在はあんな姿はしていない。

目の前にいるそれは、白と黒、純白と漆黒の入り混じった衣装を身に纏い、光り輝く金髪をなびかせたその姿は、間違いなく人間だ。人間の男性だ。自分の知っているあの現象を引き起こす存在とは似ても似つかない。

その時、その金髪の男が同僚を脇に放り捨て、自分のところに向かってきた。

尻餅をついたまま後退るが、二足歩行となれない尻餅歩行などでは勝負にならず、簡単に近づかれ首を掴んで持ち上げられた。

彼は研究担当員であり、戦闘訓練を受けていない。全力疾走して息も切れ切れで、尚且つその状態で呼吸の要である喉をつかまれたら満足に暴れることも出来ない。

「ふん」

金髪の男が口を開く。見た目は若く、まだ幼さも残るその顔はどれだけ見積もっても二十代前半ほどだろう。

「お前、何をそんなに怖がってたんだ？」

金髪は言った。解りきったことを。

仲間を全滅させられた相手に首根っこを掴まれているのだ、怖くないはずがない。ためしに銃口を脳天に突きつけて同じ質問をしてやりたいが、いかんせん彼は銃を持っていなければそんなことを言っている場合でもない。今はただひたすらに逃げるべきなのだが、どうもさつきから体が動かしにくい。

もう空元気すらも出なくなったのかと思い、男は気付く。自分の首から淡い光が発生していることに。

男の顔が強張る。声を上げようにもすでに全身の筋肉が弛緩し声が出ない。

ソル・ドレイン
神力還元。

金髪が男にやっているのは間違いなくそれだ。体中から生命を定着させる効力を持つソル・エナジーを吸い上げる力。

しかしこれは人には使えない。人はソル・エナジーの許容量キャパシティーが生まれてから減っていくだけであり、上昇はしない。器の中の水が減っていくと言っより、その器自体が小さくなって水が零れていくようなものと表現すればいいだろう。とにかく、人にはこの力は使えないのだ。

男は金髪を睨みつける。お前はいつたい何なんだ、なぜこの力を使えるんだ、そう問いかける眼だった。

それを金髪は理解したのか、二カツと、口の端を吊り上げた。

「俺が何者かって？ 決まってるんだろ」

金髪は言う。それは自慢すると言っより、解りきったことを訊くなよ、と言っような調子だった。

しかし、力を全て吸収された男は、その言葉を最後まで聞くことは出来なかった。

「俺は」

悟神かみだ」

「あれ？」

動かなくなつた男を見て、金髪はゆすつたり叩いたりしてみたが、反応が返ってこない。それをもう一巡ほどやってようやく男が死んでいることに気付く。

「んだよ、せっかく悟神のこの俺が自己紹介してやっただけなのに。勝手に死にやがって」

自分勝手な理屈をこねながら、金髪の悟神かみは男の死体から手を離す。ドスツという無機質で鈍い音が森の中に響く。

「あまり乱暴にするなよ、カース」

不意に後ろから聞こえた低い声に、金髪、カースは振り向く。

そこには彼と同じ純白と漆黒のカラーリングを施された服を着て佇む青年がいた。カースのように服を着崩しておらず、かけている丸眼鏡のせいもあってか嫌でも理知的に見える。

名を、デミューという。

「んだよデミュー。だってよ、俺の自己紹介だぜ、身分証明書なくつても一発でレンタルビデオの会員カード作れるほどのインパクトのあるこの俺の自己紹介を聞き逃したんだぜ、コイツ。別にいいじゃん」

「試してみればいい。多分、『少々お待ちください』なんて言ってる時間稼がれてる間に自警団呼ばれて袋叩きにされるから。そういう意味ではインパクトはあるね」

「だろー！」

はあ、とデミューは大きな息をついた。なぜだろう、とカースは考えるが、面倒くさいので適当に切り上げて放っておくことにした。「それにしても、予想以上に釣られてくれたね、人間ども」

デミューは眼鏡をかけなおしながら少し意外そうに言う。カースは興味がないため、地面に転がった男の死体をつついたりして遊んでいる。

「最初これ提案されたときはさすがにどうかと思ったけど、やってみると以外といけるもんだね。勉強させてもらうよ」

「だろー！ なんとたつて俺悟神^{かみ}だからな。こんくらい楽勝だよ！」

僕もなんだけどね、とデミューは一応付け足す

彼らが行っていた作戦とは、簡単に言えば人間の警戒心を使った釣りのようなものだ。

悟神族への警戒を常に怠らない人間たちの都市施設の近くで神力を展開ししばらく動かなければ、向こうはこちらを探りに来るしかなくなる。そこで退路を断ち、人間達からソル・エナジーを吸収する。

最初、デミューは反対していた。いくらなんでもそう簡単にはい

かないと。しかし立案者である目の前のカースと他のメンバーがある者は面白半分に、ある者は面倒くさいからという理由でこの案が採用されたときの彼の心中を知るものは少ない。

しかし蓋を開けてみれば面白いほど簡単にいくので、これは素直に褒めるしかなかった。

すると金髪の悟神が口を開き、

「なあ、今の分くらいでもう充分じゃねえか、神力」

「そうだね、この短期間にしては集まったほうだよ。他の場所にいるみんなも充分集めたみたいだから、連絡入れとくよ。これ以上溜めると作戦に支障が出そうだ」

言つて、デミューは眼鏡をかけなおす。新しいのにしたら、とよく言われるのだが、遙か昔からの愛用品であるため頑なに拒み続けている。

そういえば、と前置きをして、

「いい情報が入った」

カースは死体の持っていたものを漁りながら首だけを向ける。デミューは一呼吸おき、

「例のものが襲撃予定地にいるらしい。うまくいけば両方手に入れられる」

それを聞き、カースの顔に満面の笑みが浮かんだ。

「マジにかっ！？ すげえな流石俺！」

「いや、君関係ない」

「いやいやいや！！ 俺だろコレ、作戦考えた俺のおかげだろ！

むしろ一周して俺だろ！ もう一周してもつつつか何週しても俺だろ！？」

むしろお前を文字通り一蹴してやりたいとデミューは思うが口を慎む。彼は一応クールで通している自分のキャラが崩壊しかけていないことを確認し、

「とにかく、決行は今夜、だね？」

冷静に、訊いた。

「もちろんだつつの！」

カーズは力強くうなずき、

「我慢はもう終わりだ！ クソツたれに窮屈で欲求不満な毎日は終了だ！ 今宵、俺たち復活だぜ！！」

喜世子はデイバイブ・コンダクターを構えながら、目の前に相對している馬鹿を見る。

相も変わらずその顔にはいつもの微笑を浮かべてはいるが、雰囲気は違う。戦闘を行うもの特有の、ピリピリとした、熱気にも冷気にも似た不思議な感覚。それが今は漂っている。

さあて、どうくる……。

自分は強い。傲慢でも誇張でもなく、事実だ。

実際に本気で向かえば、自分のクラスの生徒がどんな策を持つてこようと姿を見せた瞬間に倒すことの出来る實力を持っている。もちろん目の前の馬鹿も例外ではない。

しかし今はそれをセーブして、最大でも六十パーセントが限度だ。実力的にはこれでイーブンだろう。

一人の生徒に対して**贖**するつもりはないが、森羅は強い。

爆発的な攻撃力、考えもしないような奇抜な戦闘法。どれをとっても他の生徒達よりは實力は秀でている。もつとも奇抜な戦闘法といつても、本人曰く単純にコレがよかったと思うことをがむしゃらにやっているだけらしいが。さすが馬鹿だ、と思わざるをえない。なら、それを踏まえた上で戦略を組み立てるか……。

これでも学生時代は最強の内一人にも数えられたことがある。自分の實力に生徒達が追いついてくるのは教師として嬉しい限りだが、

(でも、教師として上に行かせたくないっていう意地が出ちゃうのよね……)

そんな自分は意地が悪いかな、と思いながら、改めて喜世子は森羅を見据えた。

後ろでは、生徒達が固唾を飲んでこの戦いを見届けようとしている。せいぜい無様な戦いだけはないでおこうと心中で誓う。

街の方から建設現場の作業音が聞こえてくる。ハンマーの甲高い衝撃音が鳴り響いてくる。

その瞬間、両者が同時に動いた。

授業が、始まった。

両者が同時に距離を詰めた。

喜世子がデイベイブ・コンダクターを右から水平に振るう。

森羅はそれを見越していたかのように踏み込んできた喜世子の左脚に向かつて両脚で滑り込みでくる。このまま当たれば恐らく足をすくわれて体勢を崩して転ぶか、最低でも重心を崩されてしまう。間に合わない、すぐに分かった。なので喜世子は踏み込む左脚に思い切り全体重をかける。

ズンツ！ という重低音で地面がくぼみ、それと同時に森羅の低くなった頭上をデイベイブ・コンダクターは素通りし、森羅の両脚が喜世子の左脚と激突する。

「……あら？」

体勢を崩すどころか微動だにしていないう喜世子に森羅が引きつった笑みを見せる。蹴りの感触が地面に食い込んだ杭のようだったのもその原因だろう。

喜世子が笑った。

いくら両脚で助力をつけた蹴りでも、上から自分が、下から地面が思い切り体重をかけ合えば左脚を完全に固定しきるのは分けない。それでも当たった箇所が脛すねであるため喜世子は若干目が潤んでいる。森羅が反応するより速く、喜世子は片手でデイベイブ・コンダク

ターを上段に構え、倒れたままの森羅の頭部に振り下ろす。

結構速く振つたのだが、森羅は頭を傾げるだけでそれを避けた。しかしそれでは終わらず、そのままディバイブ・コンダクターに手を回し、肩の部分で固定すると、身体を丸めるように脚を曲げ、それを伸ばすと同時に喜世子の顔面目掛けて蹴りを放つ。

寸でのとこで仰け反るようにそれを避け、仰け反った反動の力を使い、力任せにディバイブ・コンダクターを森羅ごと振り回した。

遠心力には逆らえず、森羅は手を離し、ありえないといった顔で飛んでいく。

脚を地面で擦りながら止まるが、止めた反動を相殺しきれず膝がガクガクと震えた。

「まったく、乙女の顔を蹴ろうとするなんて紳士じゃないわね、あんたも」

その言葉になんだとー！ と森羅は憤慨し、

「おいおいおいおい、先生！ 今は戦育だぜ、実戦形式だぜ！？ そりゃ仕方ねえって。大体、俺以上に紳士な奴がこの地球上にいるか？」

「いるわよ。アンタ以外の男全員」

「真顔で言われた！？ おいおいおいおい！ そりゃねえ、ぜー！」
いい終わりと同時に、森羅は右の腕に赤の炎を形成し、喜世子に向かつて拳を突き出し、射出する。

中空に赤の線を引きながら飛ぶ炎は、しかし振るわれたディバイブ・コンダクターよって弾かれ、空の彼方へと進路を変える。

森羅は立て続けに数発、同じように炎を飛ばすが結果は全て同じだった。

喜世子のあまりにも速すぎる振り抜きは空気を裂き、炎との間に出来た真空の層で炎が弾かれる。

「どしたの？ まさかコレが本気？」

喜世子の呼びかけが森羅に届く。その声には若干、失望の色が混じっていた。

森羅は頭をかいて、

「いやー、まあ、今んところはコレが限度かな……」

恥ずかしそうに俯きながら、

「だあー、くそっ！ やっぱダメだ。先生相手に赤炎えきえんや燈炎とうえんじゃダメだ。うん、ダメだ。これはダメだ。ダメだダメだ。っつーことで、どーだ羽撃」

森羅は振り向かないまま、後ろに向かって声を張る。そこにいた羽撃はいきなり呼ばれ、

「えっ？ なにが？」

少し狼狽したように返答してしまう。森羅は続けて、

「今の見て、俺、先生から六十パーも力引き出せるように見えたか？ はい、回答券は羽撃さんです、どうぞ」

右手を横に差し出すようにして回答を促す森羅に羽撃は、

「うっん、全然見えない。強いて言うなら身の程知らずという言葉がとても似合う」

「即答だな、おい。ちょっと心が折れかけたぜ、俺……、と言うわけ」

森羅は立ち上がり、

「先生、ちよいタンマね」

「理由は？」

「便所タイム的な位置づけで」

そう言って、森羅は羽撃の元に歩み寄っていく。

「今のままじゃ先生にや勝つどころか並ぶことも出来ねえ」

森羅は言葉を続け、

「まあ、なんだ、俺を助けると思って、あと、穢れを知らない俺の心を小学生が拾った棒っきれの如くへし折ろうとしたことについての謝罪も込めて」

羽撃の前に立ち、

「オッパイ俺に揉ませろ！」

「いやに決まってるんでしょうがあー!!」

森に羽撃の絶叫が木霊こたました。

「いやだつて、このままじゃ俺、先生失望させちまうし。俺の本気はまだまだこんなもんじゃねえ、つてところを見せるためにも」

「だからって何で私なのよ!!」

「いやだつてよ、この中じゃお前が一番デカいし」

「それだつたらルーの方が大きいじゃない!!」

羽撃は力強く後ろの方の茂みに隠れていたルーリイを指差す。

「あー、ルーちゃんはダメだよ。だつてルーちゃん、もう伸太のモンだからよ」

「ししし、森羅君っ!?!」

ルーリイは顔を真つ赤にしながら茂みから飛び出し、森羅の元に走りよつていく。

「なななななで、いい言わないってあのと時

!!」

「えっ? あー……そうだっけ? ゴメン、実はあん時ビックリしすぎてよく憶えてねえんだわ。だつて歩いていきなり路地の影でクラスメイトがキ

「キヤー……!! 言わないで!! 言わないで!!」

ルーリイは森羅の言葉を遮るが、森羅は尚も言葉を続ける。

「でも実際、男性恐怖症のルーちゃん落としたんだから伸太の野郎すげエよな。どこに惚れたの? 顔? 俺もあんだだけ色黒くしたらカッコいい?」

「そ、それは優しいところとか……、じゃなくて!!」

ルーリイは涙目になりながらポカポカと力のない拳で森羅の胸を叩く。

「そんな……! あのルーが……!?!」

「やっぱり男は胸があれば何でもいいのかしら……」

「必死で可愛い。ルー」

後ろの女性陣からそんな声が聞こえてきた。それにルーリイはさらに顔を赤くし、もう諦めたのか力なくその場に膝を折ってへたり込んでしまった。

「おいおい大丈夫かよルーちゃん。おい羽撃、とりあえず揉ませろ」
「なにスムーズに欲望丸出しの発現してんの！ 嫌に決まってるでしょ！」

「ちよつとだけ。ちよつとエロいことさせてくれるだけでいいから」
「そのワキワキとした手は何！？ 発言がどどんやばくなってるわよ！！！」

森羅はさらに手を動かす速度を増し、

「先つぽ！ 先つぽだけでいいから！！！」

「要求がどどんエスカレートしている！！ 変態のおっさんか！！！」

森羅は少し心外だと言ったような顔で、

「馬つ鹿違えよ。そこまでエロいこと要求するわけねえだろ。ただ先つちよの部分摘ませてくれって言ってるんだよ」

「尚悪いわ！！！」

「だが聞かん！！！」

言うや否や、森羅は一瞬で手を羽撃の胸目掛け一直線に伸ばす。

羽撃はそれに反応し、後ろにバックステップして回避しようとするのだが、遅すぎた。

森羅の手が、あろうことが羽撃の胸の先端部に触れ、

「ひ ……！！！」

短い悲鳴が場を支配する。その場にいた誰もが固まった。

「あんれー！ おいおいマジかよ、まさかホントに先つちよいかせてくれるとは思わなかったぜ！ ナイスだ羽撃！ 俺は今最高に興奮してる！」

森羅は指の動きを高速化しながら、純粹で穢れのない目で羽撃を見る。

瞬間、羽撃の拳が森羅の顔面を捉え、馬鹿が弧をいくつも描きな

がら吹き飛んでいった。

数回地面を転がり、森羅はやつと止まる。

あまりにダメージが強かったためかしばらくはピクリともしなかったが、それでもおぼつかない脚で立ち上がったときの顔は満面の笑みだった。顔面は鉄鋼機構スチールフレームの防御エネルギーが削られないために瞬間的に防御を解除していたため赤くなり、鼻血が出ている。

向こうでは、弓を最大出力で構えたとんでもない形相の羽撃がマキとアンナに抑えられていた。

「大丈夫？」

喜世子が心配そうな顔を向けてきた。思えばこの人なんだかんだで結構優しいんだよな、などと思いつつ、

「イエッサー、ボス!!!」

そして、と森羅は続け、

「来たぜ来たぜ来たぜー!!!」

彼の体が突如として震え始める。

拳を胸の前で合わせ、上下に擦るように何度も打ち付ける。それは速度と回数が増していき、辺りに忙しいせわ金属音を響かせ続ける。そして、その両の腕に赤の炎が灯った。

森羅は尚も打ち付け続ける。

炎は大きく揺らぎ、その色を赤から燈とうに変える。

そしてその色を黄きに変える。

そしてその色を緑みどりに変える。

そして、その色を青せいに変えた。

「来たー!!!」

叫び、歓喜するように両腕を振り上げた。瞬間、炎は森羅の意思に反応したのか、爆発したように火力を上げる。

空間に澄んだ色を焼き付けながら、振り上げきったところで炎は

火の粉を振りまく。

その済んだ青の火の粉は、さながら雪が降っているような神秘的な光景を見るものに焼き付けた。

「ひっさしぶりに清々しいぞおー！ー！ー！！」

うおおおおお！！ と原人のような叫びを上げたあと、森羅は改めて構え直す。その眼は興奮と歓喜で溢れて決壊寸前といったようだった。

「ここまででは予想してなかった！！ すごい先つちよ！！ 五段階まで解除できるなんて！！」

「その危ない眼をした変態、一つ訊くわよ」

「なんでも訊いてくれよ！！ 今の俺は何でも淫らに答えられそうだぜ！！」

「いや、別に淫らじゃなくていいけど……待て服を脱ぐな！！」

眼前の馬鹿はいきなりズボンを下ろしたが、火力の強い青の炎のおかげで大事な部分は見えずにすんだ。

興奮しすぎてあっちんだよ！！ と叫ぶ馬鹿を見て、さっさと始めようと決めた喜世子は、

「もう、六十パー、出していいのよね？」
訊く。

それに対してのズボンを上げた馬鹿の反応は、

「もちのろんに決まってるだろ！！」

構え、今まで見せたことがないようなやる気に満ちた答えを返した。

「おいおい、まさかいきなり青炎せいえんかよ。こりゃまさかどんでん返しあるかもな」

リョーヘイが期待の目を向けて試合を眺めていると、
「どうだろうね」

不意に後ろから声が聞こえ、そちらを振り向く。

そこにいたのはエル　と棗とそれに肩を貸してもらっている
アクエリアスだった。

さらに後ろからは水溜りが移動しながらこちらにやってきている。
誰もがそれが糸祢だと理解していた。

「よう、無事だったか」

皆どこかしこに小さな傷を負っていたり、アクエリアスは肩を貸
してもらい、糸祢に関しては黒焦げになっていたが、リョーヘイは
とりあえず月並みな声をかける。

エルはブスツとした表情で、

「そつちに比べたら重傷だよ」

「すいませんでした」

とりあえず分かっついていて訊いた手前、そう謝っておく。

「俺なんか防御エネルギーゼロで喰らったんだぞ。無事なわけある
か」

アクエリアスが若干怒気をはらんだ声で言う。そして憎々しげに
森羅の方を見て、

「負けてしまえばいいんだ、あんな奴」

「そうだね、最低でも頭蓋骨が粉碎骨折してくれるくらいじゃない
と僕らの気がすまないよね」

「いや待て。それはあんまりだ。あれでも級友なんだぞ、首の骨を
へし折られる程度にしておいた方がいい」

「なるほど、つまり全員満場一致で死ねと」

すると糸祢が、

「いんや。俺は先生に負けて欲しいぜ」

「……あれはお前の自業自得」「……」

「あれー!？」

黒焦げにされた経緯を知っていた誰にも賛同を得られず、糸祢は
悲しげに顔を伏せた。

「ほら、もう泣くなって」

茂みががさがさと揺れ、中から声が聞こえる。

そこから出てきたのは魔界男子四人組と、スクウェア・フォー彼らに慰められながら泣いて歩いているノリエルだった。

「どしたん？」

リョーヘイが怪訝な顔をする。訊いたのはもちろん泣いているノリエルのことについてだ。

「いやな」

代表として伸太が口を開き、

「先生の攻撃でパルス・ウエーブが吹っ飛んじまってよ。木が倒れた中に埋もれちまって、探してる間に見つからないんじゃないかって半泣きになって、見つかったはいいいけど、勢いよく吹っ飛んだせいでエッジの部分が少し欠けててよ。それで涙腺崩壊した」

言って、伸太はノリエルが両手で前に抱えているパルス・ウエーブの一部を指差す。そこには、顔をよく近づけてみなければ見えなほどの小さな傷がついていた。

「泣くなよ！　こんくらいで！！」

「簡単に言わないでよ！！」

リョーヘイの声に、ノリエルがその上を行く声量で反発した。

「エッジの部分は攻撃の要なんだよ。しかも見た目だけじゃない。調べたら機能の色々なところがじられたみたいに微妙な不具合があるし、修理費が……」

がつくりとつな垂れるノリエル。

彼は実家が機械工を営んでいるためこれらに詳しく、パルス・ウエーブも自作した。払うものさえ払えばデバイス武装の改造から修理まで何でもこなしてくれる。

だが最近収入のない彼にとって今の修理費は正直痛手だった。

「あら、勢揃いですわね」

アンナが貴族らしい優雅な足取りで男子たちのほうに歩いてきた。その後ろにはマキとルーリィ、胸を押さえて涙目の羽撃がいる。

全員が揃ったところで、

「お前らどう見る。最強の一角と“原初魔術”。どっちが勝つと思
う？」

リョーヘイが皆に質問した。それに答えたのはエルだった。

「さつきも言ったけど、どうだろうね。原初魔術。機械魔術が生ま
れる以前の、本来、大半が悟神族に奪われてしまった魔術文明の残
った力をそのみで進化させた純粋な魔術。制御は本人の精神と心
力のみ。扱いやすく強力だが、逆に暴走の危険性も秘めている力……

対して先生は純粋に現代まで研鑽されてきた機械魔術に、本来持
つ化物じみた身体能力がある。いくら六十パーセントと言っても、
それらを組み合わせたら尋常じゃない強さになる。

森羅は今かなりの戦闘力だけど、正直分らないってのが簡単な
答えかな」

しかし、と口を挟んだのは魔界男子四人組のイコルで、

「それを言うならば森羅も元々の身体能力は高い方だぞ。それに、
戦育では見せたことなどない青炎まで発動させている。俺は森羅の
方に分があると思うがな」

皆もうーん、と思案してみる。

「でも、なんでアイツ青炎出せるほどになってるんだ？」

「……とりあえず死ねばいいのに」

思い出したように糸祢が言うと、そんな呟きが聞こえた。出所は
俯いている羽撃である。

「なあ、羽撃どうしちゃったんだぞ？」

「ああ、実はな……」

ゼンオーに耳を貸し、リョーヘイが事のあらましを説明する。

「なにー！！ 羽撃のオツパイ森羅が揉んだのか！？ しかも先っ
ちよだと！？」

大声で叫ぶゼンオーに慌てて静まるようにリョーヘイは計らうが
すでに遅く、

「なんだと！？ あの鬼畜男め！！ 許さんぞー！！」

「一度殺さないとダメみたいだな……！ 叩き切る！」

「みんな武装を展開するんだ！ あのクスを殴殺する……！」
火薬に火の粉が飛んだように次々と男子が声を荒げる。

「もうやめて……！！！」

羽撃は改めて恥ずかしがり、顔を伏せて泣き出してしまった。ア
ンナとマキが男子陣を睨みながらそれを介抱するが、男子たちは聞
いていない。

しかし、オツパイという単語であることを思い出したりヨーヘイ
が、

「おい、伸太」

「うおおおおお！！ なんだよ！？」

興奮状態の伸太はリヨーヘイのほうを振り向く。

「お前、ルーちゃんと付き合ってるって本当か？」

伸太の顔が一瞬で強張り、あれだけ騒がしかった男子たちが皆一
様に静まった。

「え、ちょ、なに？ 何のこと？ 俺知らねえよ！？」

「森羅が言ってたぞ。路地裏でキ

「キヤー……！！！」

リヨーヘイの言葉を遮り、涙目でルーリイがリヨーヘイのところ
まで走っていき、

「そ、それは言わないで！ みんなにバレちゃうから……！」

これほど手遅れと言っ言葉が合う言い訳もないな、とリヨーヘイ
は思い、確認が取れたところで、

「皆かかれ……！！ 彼女持ちを抹殺しろ……！！！」

うおおおおお……！！ という言葉と共に、逃げ出そうとした伸太
を男子全員が取り押さえ、組み伏せた。

「は、離せえ！ 俺が幸せになって何が悪い！ それを妨害する権
利なんてお前らにはないだろ……！！」

「黙れ裏切り者が……！！」

「おい一番手誰だ！ 一発デカいの行け……！！」

「や、やめ　　！！」

裏切り者がなにかを言おうとしていたが、さっきまで泣いていたノリエルのギロチンドロップで、その言葉は遮られた。

「すつげえな、結構良いの入ったぜ今」

向こうで行われている私刑リンチを傍観者気取りで眺めながら、元凶はへらへらと笑う。丁度イコルが変身トランスしてのボディプレスを決めたところで、視線は眼前の喜世子に戻された。

「じゃあいくぜ先生。今度は退屈させないからよ」

喜世子はデイバイブ・コンダクターを構え直し、

「来なさいな。ところで、青ってどんな能力だっけ？」

森羅の原初魔術『心色の炎』プロト・マキカ フレイム・ハートはテンション、心の高揚によりその力を七段階に分けて上昇させる。

今の青は第五段階の炎であり、そして炎にはそれぞれ特化した能力を持っている。

森羅は口の端を吊り上げる嫌な笑みになり、

「むっふっふ。これだ、よ！！」

途端に、眼前にいる森羅が姿を消した。

目の前にいた喜世子も、私刑リンチが一通り終わって戦いを観戦していた生徒達も皆眼を見張った。

そして、生徒達の眼は捕らえる。

喜世子の後ろに森羅が現れたことに。

そして、青の炎を纏った拳が振り下ろされた。

喜世子は感じる。

自分の背後に今までなかった熱気と、不自然な気流が発生したこ

とを。

そしてすぐに森羅が自分の後ろに現れたのを理解する。

自分の身体能力には自身がある。だが、このタイミングは遅すぎる。いくら速く動いても当たってしまう。防御は出来ない。

仕方ないか……。

喜世子は今出せる本気、六十パーセントまで全開に力を出す決意をした。

まず、ミス・ティ・タイラント神秘力豪を発動する。

他の生徒達に使っていた簡易型発動ではなく、フルで力を出し切る完全発動だ。魔術陣が両手足首に出現し、彼女の身体の身体能力が向上する。

そしてさらにハード・コマンド鋭加神経を発動させて遅れた反応を取り戻す。彼女の眼に同じように魔術陣が現れ、発動を知らせる。視界が一気に澄み渡ったようになり、肌が音まで感じるほど鋭敏化される。

準備は整った。

森羅の拳が当たる瞬間、喜世子の行動は速かった。

喜世子はデイバイブ・コンダクターを持ったまま高速で回転し、後ろの森羅に振るう。

それはあまりにも速く、完全に当たるタイミングの攻撃を放った森羅よりも速く彼の顔を捉え、飛来する。

森羅は突き出していた右手を止め、振るわれたデイバイブ・コンダクターをそれで受けた。

喜世子はそれと同時に無理矢理押し切ろうと力を込めてくる。右腕が森羅の顔にへばりつくように押し込まれてきた。

瞬間、森羅の纏う炎が色を変えた。

炎は黄きに変わり、そこで踏みとどまったのだ。

さらに押し込んでくる喜世子。だが、森羅はそれでもびくともし

ない。

すると、なんと森羅は両手で押し込んでくる喜世子のデイバイブ・コンダクターを左腕一本で押さえ、フリーになった右腕で空いた腹部へ向かって拳を放つ。

それを喜世子は持ち上げた左脚で受け、その反動を使って飛び上がり、距離をとる。

しかしそれだけでは終わらず、喜世子は空中で大きく仰け反って反転し、ガン・モードに切り替えたデイバイブ・コンダクターを森羅に向けて引き金を引く。

弾ききる……！

森羅はすぐに拳を放ちやすいよう脇を閉めた構えを取る。
が、引き金が引かれてそれが無意味になる。

放たれた弾丸は予想していた通り散弾だったが、その数が尋常ではない。喜世子は高速でポンプアップを繰り返し、一瞬で数十発もの散弾が放たれる。空間をびっしりと埋め尽くしたそれは、とてもではないが弾いて防御など出来ない。

(なら……!!)

森羅の意思に呼応し、黄の炎が緑へと色を変える。

「緑炎!!」

森羅は拳を水平に振るう。すると発生していた緑の炎はシャボン膜のように薄く伸びて広がり、森羅の前面を覆うように展開した。散弾はそれに当たり、蒸発した音を立てて消えていく。

喜世子は地面に着地し、額の汗を拭う。

「すごいわね。ここまでとは思わなかったわよ」

それから思い出すように額に手を当て、

「えーっと、赤が普通の燃烧力、橙が爆発による広範囲攻撃、黄が筋力強化、緑が防御能力特化、青が速度強化、これで合ってるわよね?」

「おう！ 合ってるぜ!」

森羅は荒い息で汗も拭わず、ただ眼前の喜世子を見やる。

強い……。

ただそれしか思えなかった。

実際、森羅ははあそこまでの余裕は持てないでいた。

さつき放たれた攻撃の数々、それらを的確な判断と速度で行う喜世子に、はつきり言って付いていくことしか出来ていない。それだけでかなりの精神を使う。

まともに自分から攻撃を出せたのは最初の一発目だけだ。

「じゃあ、もう今のところ手の内は全部さらしちゃったって訳ね。

こっからが厳しいわよ」

「上等!」

森羅は呼吸を若干荒くしながら構える。

すると、

「おーい!」

緊迫した空気の中に、間の抜けたような声が割り込んできた。

そちらを見ると、

「お兄ちゃーん!」

「こら真白、今授業中よ!」

「おお、マイシスター!　そしてしっつん!」

喜世子の言葉を遮るように森羅が声を上げた。

そこに現れたのは真白と、その横に立って歩いてきている獅子緒だった。

そして、

「あん?　誰だ、そこに隠れてるの?」

森羅は真白のすぐ横の木に隠れている誰かを見つける。真白は含んだ笑いを見せながら、

「今日はなんとサプライズゲストがいるんだよ!　はい、出てきて出てきて!」

そうして、木の陰から引きずり出されるように一人の少女が出てきた。

髪は透き通るような銀髪。鼻筋などが端整に整った顔立ちと、イ

ンナーに古臭い上着とスカートを着ている。

そこにいる全員が、誰だ、と言うような顔をした。

しかし、一人だけ違う表情をするものがいた。森羅だ。

眼を開き、顔は驚愕の色に染まっている。

「ル……ナ……？」

こぼれるようなその声に、モジモジとしていた銀髪の少女は顔を上げ、少し、照れくさそうな笑顔を見せながら、

「久しぶり、森羅」

優しい声で、優しい笑顔で、そう言った。

それと同時に、少女に向かって森羅は走っていた。

喜世子が何か言っているが聞こえなかった。生徒達のざわめきも聞こえない。

ただ走って、少女を、ルナを抱き締めた。

「えっ！？ ちょ、森羅……！？」

顔を赤らめて困惑するルナに、ただ一言、

「……会いたかった……！」

消え入りそうな声で、そう言った。

泣いているんだと、分かった。

後ろにいる事情の分からない全員が何事かと顔を見合わせる。男子陣でさえ、女子に狼藉を働いた馬鹿を始末しようと言う声が上がらない。そんな空気が漂っていない。

二人の周りには、まるで神々しさとも思えるような立ち入ってはいけない空気が流れていた。

「十三年ぶりだね」

小さな子供をあやすような優しい声で、ルナが言った。

「うん……」

小さく森羅が頷いた。

「元気だった？」

「うん……」

小さく言って、森羅が頷いた。

「友達いっばい……出来たんだね。真白から聞いた」

「うん……」

儂い声で言って、森羅が頷いた。

森羅はルナの肩に手を置いて顔を上げると、涙を拭い、笑顔を見せた。

「ルナ！ 約束憶えてるか？」

訊かれて、ルナは顔を少し赤くした。

十三年前の少年の笑顔が、今自分を抱いている青年に重なる。

少し照れたように、

「うん……」

と、今度はこちらが小さく頷いた。

「よかった！」

森羅はじゃあ、と前置きして、

「これが約束成立の証あかしな！」

「え……？」

困惑したルナが顔を上げる。

その唇に、森羅の唇が重ねられた。

「！！！！？」

ルナがさらに顔を赤くして、前を白黒させた。

後ろに見える、森羅のクラスメイト達が驚愕の顔でこちらを見ていた。

ルナリア＝アルテミル。生まれて始めてのキスだった。

そしてこのキスの誓いが、後に人類全ての戦争の引き金になっていたことを知るのは、もう少し先になってからだった。

第五話 再会と誓い（後書き）

どうも！

今回から用語解説なんかを入れて少しでも分かりやすくしていきたいと思います。『これがよく分からないから教えて欲しい！』と言う方はぜひおっしゃってください。キャラクター達が真摯に答えてくれます。まあ、真摯の部分は確定できませんが。つてか、本文のエル君、説明口調過ぎでしたかね……。

それでは、また次回。

第六話 家族と仲間

ルナは頭が真っ白になっているのを感じた。

目の前、肌と肌とが触れ合う距離に、十三年ぶりに再会したかつての少年がいる。

そしてその文字通り、少年と肌を触れ合わせているのだ。唇同士を。

唇を通して少年の体温の温もりが伝わってくる。しかしそれ以上に上昇した自身の体温で何が何だか分からない。

少年の頭越しに見える向こうには、彼のクラスメイトが口をあんとぐりと開けたり、無表情のまま固まったり、怨嗟の顔を向けるなどとにかくとんでもないことになっている。

しばらくすると、唇から圧力と体温が消え、少年、森羅が顔を上げる。その顔は満面の笑みで、

「十三年前の約束とは少し違うけど、とりあえず約束成立」

そう言った。そんな彼に対してルナは、

「ああきいいえ…ああぜあわ…！！」

何を言っべきなのか分からず、しかし何か言わねばと口を開いた拳句、このような意味不明の音声しか出てこない。

「これで、もうずっと一緒にいられる、家族だ」

そう言って森羅は、さらにルナを引き寄せ、抱き締めた。それにまた体温が尋常では無いことになるのを感じる。しかし、

何だか、私以上に森羅のほうが熱いような……。

自分より恥ずかしがっているのかと思うが、その割には堂々としすぎている。それとも開き直っているのかと思ったが、

「そっだ、もう家族になるだけじゃなく家族を作ろう！」

「へっ？」

顔を上げたその顔を見てギョツとする。

眼がありえないぐらいに血走り、眼光が鋭いものへと変貌してい

る。そして、森羅の両腕には、

フレイム・ハート
(心色の炎、しかも青炎!?)

そこでようやくこの異常な状態を理解する。

フレイム・ハート
心色の炎は使用者の感情の起伏で威力が変わる術式だ。そしてそこには効率よく感情を威力に変換するために段階を追っての防壁プロテクトのようなものがかけられており、段階を上げるとそれら解放されて威力が上がる仕組みになっている。それにより発動を続けたまま発散させないと感情内部に余剰心力が逆流し、異常なまでの高揚状態に陥ってしまう。例えるならば炉心融解メルtdownを起こしかけている状態に近い。

ただでさえ五段階という高威力の炎を纏い、久しぶりの自分との再開で元々感情が昂っていたのもある上、自分と接するために炎を発散させずにずっと抑えていたせいでこうなってしまったのかと思いい、ルナはまだ少し若干混乱した頭で慌てて、

「し、森羅、落ち着いて！ たくさん出したら落ち着くから、とりあえずあっちでたくさん出そ、ね!？」

そのセリフを聞いて、森羅の眼の光がさらに増したのをルナは見た。彼の後ろのクラスメイト達、特に男子たちは地面に拳や頭を打ち付けたりして悔しがっているものでもいる。

あれ？ 私何か変なこと言った？

確かに混乱で言葉足らずな物言いだっただかもしれないが、少なくとも伝えたかったことは伝わったはずだ。

感情内部に溜まっている心力を熱として排出することで感情を落ち着けようという自分の考えは間違っていないはずだし、それを行いやすくするためにさっき向こうで見つけた川辺でやれば効率も上がるだろうと思つてのことだったが、どうやらここにいる人達はなにか盛大に勘違いしているらしい。

「言うようになっただじゃん、ルナ!」

ビツと右の親指を立ててくる真白に意味が分からず首をかしげると、次の瞬間、視線がすごい勢いで九十度傾いた。

何が起きたかはすぐに分かった。自分の体が軽く森羅の小脇に抱えられたからだ。

「さあ行くぞあー!!」

「え？ え！？ きゃあああ!!」

反論する前に、青炎の加速力によって森羅がその場から猛スタートを切つて発進した。

「真白!! 今から六時間は俺の部屋
いや、家には入るなよ!!」

遠ざかっていく妹に向け大声でそう叫ぶ馬鹿に対し真白も大声で、「なんでー!? 部屋じゃダメなのー!?」

「台所で裸エプロンもしたいからだ!!」
「ちよつと待つて!? 私何されようとしてるの!?!」

裸エプロンという単語にギョツとしてルナは反応する。

その単語は、前に生活に使えるものがないか粗大廃棄物の処理場を漁っていたときの雑誌で見たことがある。再世暦以前の昔から存在する女性が全裸にエプロンをつけるという実用性皆無の姿のことだ。一説では、時を越えて尚男性に愛される装束の一つということだが、自分になる分にはたまったものではない。

「はーなーしーてー!!」

「ハハハツ!! 愛い奴愛い奴!!」

抱えているどさくさにまぎれて尻などもみくちやにされているのにも気付かずルナが叫ぶ。

するとそこに助け舟がやってきた。

「やめろド変態」

高速で動いていた森羅の体が突然前方に傾いた。

何事かと思つて後ろを向くと、そこには拳を振り下ろした姿の何を考えているか分からない仏頂面の少年がいた。

拳の打撃点をそのフォームから計算すると、どうやら森羅の後頭部に躊躇わずに振り下ろされたらしい。

その反動で森羅のホールドが解け、ルナは空中に放り出される。

「きゃ！」

短い悲鳴の後、彼女はくると空中で一回転し、難なく地面に着地した。森羅のほうは顔面を地面に擦って前方に盛大にこけている。そしてそれを見下ろしながら、仏頂面の少年は顔に怒気を孕ませ、拳をコキコキとならしながら、

「この大馬鹿が。お前は公衆の面前で女子に恥をかかせた後に家に連れ帰って拉致監禁羞恥陵辱プレイの予告とは、地に落ちていた人間性がマントルまで沈み込んだなグズ」

「いや、そこまで言っただけだと思っただけ……」

一応、最低限のフォローを入れながら、ルナは少年を見る。

いくら自分を抱えていたからとはいえ、青炎を発動していた森羅に追いつき攻撃を加えたというこの少年は、果たしてどれほど速いのか、と。

すると、その後ろから残りの皆が走ってきた。

「おい、グズは捕まえたか!？」

「ああ、ゴミは捕まえておいた」

「じゃあ汚物は消毒しようぜ」

なぜかどどん人という最低限の扱いすらされなくなっている森羅を見て、本当に友達出来たのかな、とルナは心配してしまう。

すると、その心配をよそに、森羅はゆっくりと立ち上がり、

「ふ、ふふふ、やってくれたな、棗、そして皆の衆。お前ら、俺の幸せ家族計画を邪魔しに来た悪の慈善団体からの刺客だな」

「落ち着け、お前とりあえず特撮モノの見すぎだ。その団体結局何がしたいんだ」

棗と呼ばれた仏頂面は起き上がった森羅に対し、拳を胸前に持つてきて構えを取る。

森羅はそんな棗を見て、

「やるってんなら相手になんぞー！ー！ー！ー！」

その両の腕から爆発に青の炎を噴出させた。

そのあまりの火力に向き合っていた棗はもちろん、後ろのクラス

メイト全員が顔を覆うようにして怯んだ。

その光景を見ながらルナは、

（あれだけ炎を出せば大丈夫だけど、それまでに時間をかけすぎた……！）

これで恐らく感情の高揚はここで一旦止まる。だが、それまでに昂ってしまった感情は時間をかけて冷ますしかない。完全に冷め切るまでの時間、恐らく森羅は暴れまわる。それまでに彼を大人しくさせておかなければ、恐らくとんでもないことになる。

ここは私が出るしか……！

ルナは胸の前で拳を合わせる。すると、

「あー、お嬢さん。ちょっとそこどいててもらえる？」

不意に脇から聞こえてきた声に振り向くと、そこにはいつの間にかジャージ姿の女性が立っていた。

いつの間にそこに、と思ったが、とにかく彼女が急かすのでそこをどくことにする。

自分がどくのを確認して、ありがとうと一言述べると、後ろの気配にまったく気付いていない森羅に向かって歩き出していった。

そしてそのまま森羅の腰に手を回し、

「ん？ おお、喜世子先生！ どしたんだよ、もしかしてやつとその気になってくれたのか？ 悪いけど今はルナがいるからな。先生はその後でってことで！」

「ねえ森羅。あんたに見せてやりたいものがあるんだ」

そう言って、喜世子は体を密着させると共に腰に回した手をしっかりとホルドした。そのことに密着にしか意識のいつていない森羅は気付かない。

「なになに？ 先生の痴態？ 先生のエロい姿？ 先生の淫らな姿？」

「それはね 　　これだあ……！」

次の瞬間、滑らか且つ高速で上半身を後ろに倒した喜世子に引かれ、森羅の体が傾き、その後頭部を地面に叩き付けられた。

鐘を打ち鳴らしたような轟音が辺りに響き、土煙が舞い上がる。土煙が晴れてそこにいたのは、華麗なブリッジを決める喜世子と、それにホールドされて白目を剥き泡を吹いている森羅だった。

喜世子はホールドを解いて立ち上がり、目の前にいた生徒達に手を挙げて見せ、

「ゴツチの偉業よ。最高でしょ？」

生徒達から歓声が上がった。皆が喜世子の下に駆け寄り、その手にハイタッチを決める。

森羅はすごい勢いで痙攣を起こしているが、誰も気にも留めていない。妹すら無視し、喜世子に抱きついて歓声を上げている。

ルナはそんな彼らを見てどうしていいか分からず、ただただ痙攣する森羅と生徒達を見ていた。

とりあえず森羅をどうにかしようと思ったルナは、彼の元までにじり寄る。

相変わらず生徒達は喜世子と喜び合っていて気付かない。本当に友達なのかな、と失礼ながら疑問に思っていると、上から影が刺した。

顔を上げると、そこにあったのは、胸。大ボリユームの胸が自分の前にぶら下がっている。

これは……！

何をどうすればいいのか分からずアタフタして、とりあえず自分の胸と比べて見る。うん、負けた。

「あの……」

すると、いきなり巨乳が喋った。ダイモニウス魔族にそんな種族がいたかと思議に思っていると、巨乳が自分の目線より下に下りてきた。そしてその上にある緑の髪を持った頭部が喋る。

「森羅君の、治療、いいですか……？」

こちらの様子を伺うように言ってきた巨乳少女に、ルナはこくりと頷いて見せた。

巨乳は森羅に向けて手をかざす。するとそこから青白い光が生まれ、彼の頭から首までを包み込んだ。

「あなた、治療系魔術の使い手？」

言葉に、巨乳はビックリしたように一瞬飛び上がり、

「は、はい！ 私、一応保険委員で、こういうの、慣れっこだから、ウチのクラス……」

こういった生死の境をさまようような事態に慣れっこなクラスってなんだろう、とルナは自分の知識をめぐってみるが、そんな例は出てこない。

そんな中、巨乳少女は言葉を続け、

「わ、私、治療とか、補助系が得意で、それで、その、保険委員に……」

森羅の痙攣が治まっていき、やがて剥いていた白目もゆっくりと閉じていく。そんな彼を見て、彼女はただ一言、

「……ありがとう」

それに巨乳は驚き、

「い、いえ！ 当然のことですから……。あ、私、ルーリィ＝ネリオットって、言います。皆は、ルー、って、読んで……」

ルーリィと名乗った巨乳に対し、ルナも礼儀として返す。

「ルナリア＝アルテミルです。ルナって呼んで、ルーちゃん」

ルーリィはまたビクリと飛び跳ね、しばらく顔を俯けてモジモジしていたが、やがて顔を上げ、

「はい……こちらこそ、よろしく……」

二人は峠を越えた森羅を挟んで微笑みあった。

『喜吉先生』

そこへ、突如として通信が入った。

喜世子の前方に通信用の電子画面が映った。

そこには茶髪の短く切りそろえた理知的な男子生徒が映っている。

「あら、どうしたのトラ。生徒会長が何の用？」

『その呼び方はやめてください』

と、生徒会長、虎丸とらまるは嘆息する。すると喜世子の横で電子画面を

除いていた獅子緒が割り込んで、

「兄者、十百千神社への術式奉納、済んでおいたから」

と、勝手に人の通信を私的利用してきた。

それに対し、兄、虎丸は、

『獅子緒。連絡は終わったらすぐ入れておけと云ったろう。で、どうだった。いくらになった？』

「今回は結構デキがよかつたからね。五万ほどにはなつたよ」

『そうだろう。漫画みたいに爆発しても絶対に死なない術式なんてそうそうできるもんじゃないからな。それくらいでないと困る』

「あー、いい加減話戻してくれる？」

喜世子が頭をかきながら言ったので、虎丸はハツとして気を引き締めた顔つきになり、

『実は、予定していた発進時刻を当初より一時間ほど早くする方向に決まりました。表に出ているのは三年越組えつぐみだけですので、早く戻ってきてください』

「確か、発進時刻って午後二時よね」

言つて、喜世子はもう一枚電子画面を展開した。そこに映っているアナログタイプの時計が示す時刻は十二時四十九分。短縮された予定時刻から計算すればもうギリギリだ。

「ずいぶんと急ね。サミットへの長旅になるから補給は万全にしときたかつたんじゃないの？」

『それなんです……』

虎丸の顔が神妙なものになる。

『さつき守護兵団から連絡が入ったんですが、この近辺で探知され

た神力反応の調査に出ていた隊員七名からの連絡が途絶えたらしいです』

それを聞き、喜世子も眉根を下げた。

「全員から連絡取れないって言うのはやばいわね。集落の人たちの乗船許可は？」

『もう配布され、緊急居住施設の使用許可も出ています。後は皆さんだけです』

「分かったわ、すぐ戻る。そっちも」

言いかけて、それに割り込むように、

『分かってますよ。というより、こちらはもう仕事は終わってます。後は発進するだけです』

「オッケー。そんじゃ」

そう言って、喜世子は通信を切った。そして、生徒達に振り返ると、

「聞いたわね、みんな。それじゃ、学園に戻るわよ」

全員が返事をし、街に向かって歩き出す。

「あの……」

それを、ルーリイの声が留めた。

「森羅君は……？」

そう言って、目の前で幸せそうな顔で気絶している森羅を指差す。

喜世子はそっか、と思い出したように。

「じゃあ、アンナ。運んで」

「嫌ですー!!」

この上ないしつかりした声できっぱりと断られた。

「じゃあ……、男子、誰か運んできて」

「ええー……!!」

この上ない嫌そうな声で男子全員が言った。

そんな男子を見て、喜世子はなぜか一度ダイバイブ・コンダクターの柄を握り締めたが、ふと思いついたように、

「そういえば、この授業、私の勝ちだったわよね。ということだ、

交換条件よ。授業やめて欲しかったら森羅を誰か運びなさい」
「嫌です。こいつ運ぶくらいなら授業受けた方がマシです」
ハモった。しかも一言一句間違わずに全員が同じセリフを言った。
喜世子はもう一度時間を確認し、しようがないなという顔で、
デイバيب・コンダクターの柄を握り締めた。

結局、男子たちはジャンケンで誰が運ぶかを決め、アクエリアスが運ぶことになった。

男子全員は顔に所々殴打された傷を作って森を歩き、街の門ゲイトをくぐって中に入っていく。

ルナも真白に手を引かれて門ゲイトまで歩いてきたが、その脚がふと止まった。

「ん？ どしたのルナ？」

その問いに、ルナは顔を俯けて、

「いや、私は通れないよ。ここの住人じゃないし、何か問題になったら……」

真白は一瞬ポカンとした顔になり、次の瞬間、

「あはははははははははは！」

盛大に笑い出した。

「な、何がおかしいの!？」

「大丈夫だよ。一人や二人増えたって分かんないって。今は集落の人たちも収容してるから、緊急時の住人表発行してもらえばいいし。それに」

真白は一呼吸間をおき、

「ルナともつとお話したいし。でしょ、みんな」

その声に、皆は振り返って、

「そうですね。二人との関係も教えてもらいたいですし」

「そうですね。知り合いである馬鹿にあんなことされて抵抗しないって

言うのも少し気になるし」

「そうだな。俺はスリーサイズが気になる」

「お姉さんキャラだと俺はいいなあ」

後半はなんなんだろう、と思っていたが、女子陣から制裁を喰らっているところをいるとどうやらまともな質問ではなかったらしいとルナは悟る。

しかし、

「でも、私は……」

何かを言いかけたところで、一つの声が立った。

「駄目だ！」

全員の視線がそつちへ向く。そこには、アクエリアスの背から降りて自分で立っている森羅の姿があった。

「し、森羅君……、もう、いいの……？」

「おうよ、ありがとな、ルーちゃん。おかげで首動かすときに鈍い音がする以外全然大丈夫だ！」

それ大丈夫なのか……、と誰もが疑問に思うが、森羅は気にもせずルナの元まで歩いていき、

「さつき約束したる。俺たちはもう家族だ。もうどこにも行かないでくれ、ルナ」

そう言つて、彼女の手を優しく握る。

「十三年間、ずっとこうなりたいつて思ってた夢が、やっと叶ったんだから」

ルナがまだ何かを言おうと口を動かす。すると、先頭に立っていた喜世子に通信が入る。電子画面に映った虎丸は、

『喜吉先生。もうあと二十四秒しかありません。急いでください』

淡々とそれだけいい、通信は切られてしまった。

「あんた達……！ もう時間ないから早くしなさい」

その声を聞き、遅れていたものは急いで門の中へと入っていく。あとに残されていたのは、森羅と真白、ルナだけだった。

「行こうぜ。なっ？」

「そつだよ、ルナ」

「……………」

ルナは何も言わない。向こうから皆の早く入れという声と、森羅の『黙ってるバーカバーカ!』という罵声が聞こえてくる。

やがてルナは決心したように、言った。

「……………行かない」

少し震えた声だった。

本当は自分も行きたいと思う。だがきつと、自分がいたら迷惑をかけることも同時に分かる。自分がどんな存在かを考えたら、ここにはいないほうがいいのだ。

「ごめんね。あの時の約束、守れそうにない」

「じゃあ、俺も行かない」

森羅の放ったその一言に、ルナは慌てて顔を上げ、

「それは駄目！ 森羅が私のためにそんなことする必要なんてない！ あなたにはあんなに友達がいるんだよ」

もう自分が手に入れることが出来ない、友達というものを。だから、

「それを手放しちやいけない。絶対に」

強く言い聞かせるようなその声に森羅は、

「うん。手放す気なんかないぜ」

軽く言つてのけた。

「それくらいルナと離れたくないってことだよ。俺だってあいつ等と離れんのはやだ。確かに俺のこと変態だのカスだのゴミだのクズだの人間扱いしてくれないときもあるけどさ」

一息つき、

「それでも、あいつ等は誰よりも俺が信頼してる。そしてあいつ等も、俺を信頼してくれてるから。だから、ゴメンな」

森羅は言つて、

「俺、ルナの言うこと聞きたくねえ。真白」

「アイサー！」

真白がいきなりルナの腰に手を回し、その体を抱え上げる。

「え！ え？ ちょっと!？」

「行くぞ真白！」

「分かつてるって」

森羅は胸の前で拳を合わせ、そこにもう一度青炎を発動させた。

「あと五秒————！」

^{ゲート}門の向こうから、皆の声が聞こえてきた。

森羅はルナの腰の前で組まれている真白の手を掴むと、

「行くぞ————！」

爆発的な加速で門に向かつて突っ込んだ。

風が向こうに行かせないと圧をかけて来る中で森羅は言う。

「俺、ルナを誘拐するわ！」

「ええ————!？」

皆のカウントダウンが聞こえる。残りが一秒になった瞬間、

「——————！」

三人が、^{ゲート}門を抜け、街の中へ転がり込んだ。

それと同時に^{ゲート}門も閉まり、

『ただ今より、^{かんじょう}艦状居住機関・関東。発進します』

アナウンスが、街中へと響き渡った。

森の中に低く鈍い振動が響き渡る。

それと共に、関東外周と接触している地面が境界線を境に青白く発光を始める。

そして、振動に揺られるように、ゆっくりとその境目から金属の外壁が姿を現した。

地面から伸びるように現れたそれとともに、関東の居住区がどん

どん上に上がっていく。地面は水面のように波打ち、吐き出すように外壁を生み出し続ける。

やがて一分としないうちに、それらは地面から完全に出て、空に浮き上がった。地面は何事もなかったようにただの平地になり、その上には、巨大な居住艦が姿を現していた。

全長七千六百メートル、全幅二千百メートルの大型艦、『関東』が、空へと浮き上がった。

大きく開いた街の上方には初期航行時のスピードを得る際の風圧などの干渉を住人に与えないための障壁が張られ、アナウンスが鳴り響く。

『諸事情により当初の予定を変更して、約一時間速く、大和首都艦・関東は、国際サミットの会場である南極圏へと出発を開始します。尚、予定では、これより約三十五分後に機関・東北とドッキング。四十分後に機関・中部とのドッキングを予定。後の予定は追って連絡いたします』

そう言っつて、アナウンスは終了する。そして同時に、関東全体が微弱な振動に包まれる。充分な上昇を終えた関東の後部大型ブースターから青い発光が起き、光が噴出したさいに起こったものだ。

地面を遥か下に見ながら、関東は進路を南に向ける。そしてゆっくりと、関東は発進した。

「おおー！ いつ見ても男の子心こころくすぐるよな、この発進」

「男の子は皆メカが大好きなんだよ」

「それには俺も同意だ。“猛進戦隊トツカンジャー”のチョトツロボは最高の一言に尽きるな」

「ええー！？ 俺は“判決戦隊ジキソージャー”のバイシンインロボのが好きだわ」

「責様分かっておらんな。チョトツロボは合体シーンも最高だがそ

れだけではなく、武器がドリルという時点で最強なのだよ」

「でもあれ怪人死ぬときめちゃグロイじゃん。ドリルブツ刺した時の怪人の腹から噴出す内臓が妙にリアルでさ。臓物はらわたミキサーって子供番組の技名で出したら駄目だろ」

男子勢は障壁越しに遠くなっっていく地面を見下ろして、口々に自分の好きなロボット話を繰り返している。

そんな男子を遠めに見る女子の中で、ルナは体育座りでへこんでいた。

「昔からどこか頑固なところはあったけど、まさかここまでになっただんなんて……」

ブツブツと怨嗟に近いような声を漏らすルナに、まだ知り合っていない間もない女子勢は、誰も近づけずにいた。頼みの綱の真白も男子たちの話に加わって『えー!? あのブルーの俳優ってゲイだったんだ!』などと盛り上がっている。

すると、『いや、あの戦隊はピンクが変身前にスカートで殺陣たてやってるから』などと言っていた森羅が気づき、ルナの下までやってきた。

「なーにへこみまくってたんだよルナ。もう諦めろって。発進したらもう降りるのは無理だぜ」

ルナはキツと顔を上げ、

「そういうことを言ってるんじゃないの! 強引にも程があるわよ。私は一人でいいの。そうした方がいいの」

「そんなん知らねえよ」

ルナの言葉に割り込むように、森羅の声が告げる。

「俺はルナが一人でいたほうがいい理由なんて分からねえ。だってルナは、優しく、強くて、何が大切なのかを知っている人だから。そんな人が、どうして一人ぼっちでいなきゃいけないんだよ」

「でも……」

「分かってる」

森羅は続ける。

「どうして皆といられないのかって理由も知ってる。だけどな」

森羅は一息つき、

「家族を一人ぼっちにだけはさせない。それは俺が、あの時から決めている自分のルールなんだ。家族は、皆一緒に居なきゃ駄目なんだ」

森羅のその言葉に、ルナは胸が熱くなった。

そして、彼がどれほど強く成長したのかを理解した。

不意に、あの十二年前の言葉が脳裏をよぎる。

いつか絶対、会いに行く。そして家族になる。

今思えばこの約束は、子供ながらに自分のことを理解していた森羅が、今度は自分を救おうとして言ったことだったのかもしれない。彼らに会う前も、ずっと一人だった。ただ漠然と今を生き、空っぽの過去を携えて、何も無い明日へと向かう。そんななんでも無い希望も何もない生活。

そんな中、彼ら兄妹と出会い、その生活に意味を持たせた。

その一年後、彼らと別れたとき、どれほど辛かったかのか憶えている。彼らの前で我慢した反動か、一日中涙が止まらなかったことも憶えている。

自分が意地を張っているのだと理解していた。だからこそ、森羅はそんな彼女を救いたいと思ったのだろう。

馬鹿だな、と思う。自分のためなんかのために。

「あ、もちろんルナのためだけじゃないから安心してくれ」

え？ と疑問符が浮かんだ。

「俺はさ、みんなのために強くなったんだ。こいつらは俺の仲間だから。家族とおんなじくらい大切なもんだから」

「なにくさいセリフ言ってるんだよ」

森羅の頭部をリョーヘイがメントモリで殴打した。キレた森羅が拳を振り回すが、リョーヘイは華麗に避けて他のメンバーの輪に加わり、そこで全員と笑い合う。森羅もつられたように笑った。

それは、あの時最後に見せてくれた笑顔と同じだった。

それは、森羅が十三年間の間に築き上げてきた大切なもの全てだった。

そんな彼らを見て、ルナは小さくため息を吐くと、

「ねえ、森羅」

「なんだよ」

頭をさすりながら聞き返す森羅に、ルナは顔を近づけ、

「ありがとう」

その体を、優しく抱き締めた。

その行動に、森羅は眼を見開く。

「あなたの大切なものを見せてくれて。そして、その中に私を入れてくれて」

ルナは森羅から離れ、顔を見える位置まで引くと、

「これから、よろしくね」

笑顔を作った。

かつての少年に負けないほどの、輝かしい笑顔を。

森羅は皆に向かって笑顔を作ると、

「ルナが仲間になったーーーーー!!!」

後ろから歓声上がる。それは友人が増えるというだけではなく、森羅の喜びを分かち合っているように見えた。

そのさらに後ろから、喜世子が声を張り上げる。

「こらー！ 午後の授業あるんだから、見んな早く来なさい！」

その声に、全員が慌てて校舎の方に走っていく。森羅もルナの手を取って、

「ほら、行こうぜ」

「あ、でも……」

俯くルナに、森羅は首をかしげ、

「なんだよ、ここにいてくれるんじゃないのか？」

「そ、そうだけど……。学校って、あたし学生じゃないし、入って

もいいのかなくて……」

森羅はフム……と顎に手を当て、

「俺の持つてるコスプレ衣装着てみる？」

「遠慮する」

どうしてそんなものを持っているのかを問いただす前に、ふと声
が来た。

「そんなら、こここの生徒にでもなるかい？」

その声のほうに振り向くと、壮年の白髪頭の男が立っていた。

「裁牙のおっちゃん！」

「理事長って呼べつつてんだろ」

裁牙は呆れた顔をして二人に近づいていく。ルナはでも、と前置
きして、

「そんなことして、いいんですか？」

「いいんじゃないかね？ あんたには大事な甥おいと姪めいを助けてもらっ
た借りがある。それに」

裁牙は自分の胸を叩き、

「この関東機関艦長兼大和統括長の俺かんちゅうが言ってんだ。大丈夫だよ」

その言葉に、ルナは顔を輝かせ、

「ありがとうございます！」

その場で頭を下げた。座っていた体勢だったため、それは必然的
に土下座になる。

「おいおい、そこまでしてもらっちゃこつちが困るよ。ま、大体の
事情は聞いているからさ。色々大変だったんだろ。だったら、ここで
手に入れられなかった何かを、掴んでみてもいいんじゃないかと思
っただけさ。ま、頑張りなよ」

そう言つて、裁牙は校舎に向かって歩き出す。

「ありがとな、おっちゃん！」

理事長だつつの、と言つて、裁牙は手をヒラヒラと振った。

森羅はルナの手を取って立たせると、

「やったな！ これで家族兼クラスメイトだ！ とんでもないコン

ボだぜこれ！」

ピョンピョンと自分のことのように飛び跳ねる森羅を見て、ルナも口元が緩む。

森羅はルナから数歩離れ、お辞儀をすると、校舎へと手を伸ばし言った。

「よっこそ、関東仁悠学園へ！」

第六話 家族と仲間（後書き）

どうも！

もう十二月ですね。いよいよ今年の終わりが近づいてきました。これからまた気を引き締めていこうと思います。

今回のルナの心理描写のシーン、かなりうんづん唸って書きました。難しかったです。

それでは、また次回。

第七話 お茶会は窓辺の日差しの下で

空を巨大な航空艦が移動している。

左右に三艦が直列して合わさり、その中央に他六艦よりも大き目の作りの一艦で構成された全七艦構成の巨大航空都市艦は、EU連合所属艦、『イギリス』だ。

国旗と同じ青を主体とした塗装をなされた全長約二万四千メートルの艦は、空の大気を裂き、ゆっくりと進路を南に向ける。

その甲板上の居住区には、今日も人々が賑わっているが、その様子はいつもよりも活気に満ちている。

この艦が向かう先、国際サミットでの祭の準備だ。

年に二回行われる国際サミットは、各十国家が南極圏に集合し、そこで会議を行うことを定例としている。その際に自国の領土である機関ごと集合がかかるため、毎年各国は観光客などで賑わうため祭が設けられるのだ。

サミットでの移動のついで行われた中国での貿易を終えて、物資補給も完璧になったイギリスは、その支度したくも佳境に入っている。

国際性を出すためか、街の店舗街などには万国国旗が張り巡らされ、あちこちに幌ほろを被せられた待機状態の屋台などが準備されている。

そんなイギリスの中央艦、『ロンドン』の中心には、中世の古城を模した石造りの建造物が建っている。

名を倫敦塔ロンドン。イギリスの中枢であり、監獄の役割も果たすここは、統括長エリザベスの居城でもある。

その倫敦塔の内部を、一人の青年が歩いていた。

年齢は二十代半ばほどで、右側の前髪が長いアシンメトリーなヘアスタイルをした青年は、イギリスの軍隊所属を表す青の制服を着たその背中、そこに巨大な戦斧せんぶを携えていた。

大きさは彼の身長と同じ程度の約一・六メートル、柄の部分を保

護するように斧の刃が伸びている。そして刃と柄の接合部辺りには、巨大な青い宝珠ほうしゆが埋め込まれている。

赤い絨毯が敷き詰められた廊下を歩き、彼は若干緊張した面持ちである場所を目指して歩く。

彼が今歩いている場所は、倫敦塔の闇とも言われる場所、監獄塔の内部だ。

監獄内部といっても、ここは看守などが住む宿舎のエリアであるため、多少黒ずんだような壁のシミ以外は別に目立った汚れもなく、城の内部となら変わらない綺麗さを保つ。

問題は監獄エリアだ。あそこはコケやカビで廊下、床、天井と構わずに生え揃っており、そして、囚人達の絶叫が決して止むことはない地獄だ。普段は重厚な金属の扉と、防音のための魔術式が組み立てられているために決してその声は誰にも届くことはない。

彼が一度だけ、その監獄エリアに入ったときのことを思い出して顔を少し青くしたところで、目的の場所へとついた。

綺麗に磨き上げられた木製のドアの前に立ち、彼は一度制服の乱れを直した後、ゆっくりと三回、ドアをノックする。すぐに返事は返ってきて、

『どうぞ』

柔らかなその声に導かれるまま、

「失礼します！」

彼はドアを開けた。

まず入って青年が思うのは、

質素な部屋だな……。

という、少し失礼なことだった。

床には部屋の主の趣味なのか、廊下とは違う青の絨毯が敷き詰められ、左脇の奥の隅のほうに何の変哲もないただのベッドがあり、

手前側に小さな衣装ダンス。右側にはバスルームに繋がるドアと、ティーセットが置かれた簡単なキッチン、そして鏡台と本棚があるだけだ。

そして、その部屋の中央。一枚だけの窓の前には、小さな丸テーブルと椅子が一組並んでおり、その片方の椅子に目的の人物が座っていた。

青年と同じイギリス軍の制服を着て、肩までの煌く金髪のショートヘアに、眼鏡をかけたその女性は、窓から差し込む陽光を受けながら、一人静かに本を読んでいた。

彼女はこちらに振り向くと、

「何か用かしら？」

と、本から顔を上げ尋ねてくる。

青年は姿勢をただし、少し声を張りながら、

「初めまして！ ほ、本日付で英国特殊戦闘部隊、クイーンズ・ガード“女王の防盾”所属になりました、アーサー・デイトです！ よろしくお願いします！」

緊張していたために予想以上に大きな声を出してしまったアーサー

は、少し顔を赤らながら、声をかけた女性を見る。

彼女のことは知っている。恐らくイギリスにいるものでその名を

知らないものはいないだろう。

メアリ・フロレン。英国が誇るプロト・マギカ“原初魔術”使い。

別名“コキユトス奈落の冷姫”。

そして、この倫敦塔監獄の主でもある。

アーサーもデータや“週間三次元の魅力”に載っていた写真でしか知らなかったが、初めて生で見ると、その異名の意味を知った。

どこか冷たい、氷のような無機質さを覚えるような視線を彼女は持っていた。

しかしその視線も最初の内だけで、こちらのあがっているのが丸分かりな自己紹介を見て、彼女は手を口元に持ってしまって小さく噴出した。

それを見て、アーサーはさらに顔を赤くする。
それを見たメアリは、

「ごめんなさい、あまりにも可笑しかったから。フフ……、そう。
なら私も自己紹介をしないとね」

彼女は本をテーブルに置いて立ち上がり、

「英国特殊戦闘部隊“女王の防盾”クイーンズ・ガード 兼倫敦塔監獄統括、メアリ＝フ
ローレンよ」

彼女は深く頭を下げる。彼女のほうが所属期間は長いが、女王のクイーンズ・ガード防盾には階級が存在しないため、基本そういうものを気にしない人間はこのように真摯に接してくれる。

しかしアーサーは慌てて、

「い、いえそんな！ 頭を上げてくださいよ！ 僕はまだ新米のペー
ーペーですから、そんなイギリス一の有名人に……！」

彼女はあら、と顔を上げ、

「気にしなくていいのよそんなこと。礼儀に上下関係や知名度なんかは関係ないわ。全ての者が等しく行わなければならない常識よ。
いえ、義務といってもいいわね」

そう言つて、また柔らかな笑顔を見せた。金髪が陽光を受けて煌
き、アーサーにはそれが神秘的な光景に見える。

その笑顔には、奈落コキョウトスの冷姫などという異名が付けられた意味が分
からないほど、それらとかけ離れたものがあつた。

すると、ふと、彼女は自分の背中にあるものに気付いたように、
「あら、あなたそれ……」

アーサーは、はい、と巨大な戦斧を背中から取り外して前に掲げ
る。

「英国が保有する神罰武装、『欠片かけらむす？び』。長年、使用者がいなか
つたこれの保有者ホルダーに、今回僕が選ばれました」

掲げられた戦斧、欠片？びは陽光を反射し、その巨大な刃をギラ
リと光らせる。

メアリはどこか納得したような顔を見せ、

「なるほどね。あなたが女王クイーンズ・ガードの防盾に選ばれた理由が分かったわ」
「ど、どういう意味ですか……」

メアリはクスクスと笑い、

「だって、あなたどこか頼りなさそうなんだもの。神罰武装の保有者エグゼ・ホルダー、執行武人になったんだから、もう少し自身ありげにしたら？」

そう言われ、苦笑しか出てこない自分を情けないと思いつつ、アーサーは何か会話を続けようと思ったが言葉が出てこない

十秒ほどたつてもいい言葉が浮かばなかったため、彼は一礼し、

「そ、それじゃあ、僕はこれで……」

そう言つて部屋を出ようとすると、メアリに引き止められる。

「待ちなさい。もうすぐ三時よ。英国人ならティータイムの時間は守りなさい。特に、女王クイーンの側近たる女王クイーンズ・ガードの防盾の一員になったのならね」

メアリはそのままキッチンまで歩いていき、ティーカップを二つ取り出す。

「飲んでいきなさい。ご馳走するわ」

アーサーはどうしようかと迷つたが、せっかく先輩であり、有名な美人が自分をお茶に誘ってくれているということを考えて、

「分かりました。いただきます」

顔は申し訳なさそうに、しかし内心では飛び跳ねながら、彼は部屋の奥へと歩を進める。

彼がメアリの今までいた丸テーブルのもう一つの椅子に座ろうと、欠片？びを降ろそうとしたところで、閉じられていた部屋のドアがノックの後、部屋の主人の許可もなしに開け放たれる。

「どうもー！ あなたのミディアハールレンがやってきましたよー！」

現れたのは、前に紅茶の入ったティーカップを載せた盆を携え、袖を取つ払つた改造制服を着たテンションが高いを超えてウザい天使族エンジェリウスだった。

緑の髪を後ろで縛つてまとめたその天使族は、右の下腕が義腕で

あり、左側にある翼は根元辺りから存在していなかった。

彼女を見て、アーサーはすぐに誰だか分かった。

クイーンズ・ガード
(女王の防盾所属。 “傷翼” ベナルティ・フェザーのミディアハールレン……！)

彼女もまた、イギリス軍の中では有名人だ。数々の戦いで戦果を挙げ続けてきた、イギリスのエースの一人。身体についた傷もその時のものだと聞く。

改めて見ると、酷いものだトアーサーは思う。

無くなっている右腕もそうだが、エンジェリウス天使族の誇りともいえる翼が、彼女にはないのだ。

彼女は自分より若いことも知っている。確か今年でやっと二十歳だったはずだ。そんな若さでそんな傷を負っている彼女を見て、軍人として失礼だと思うが、アーサーは同情してしまう。

しかし、そんなアーサーの心も露知らず、ミディアは部屋の中に入って足でドアを蹴って閉める。

(行儀悪……)

そんな彼女を見て、メアリはハア、と一息をつく。

「ミディア。いつも言ってるでしょ。私は自分のお茶は自分で用意するって」

ああ、なんて出来た人なんだろう、とアーサーはメアリに対する羨望を深める。

「えー、私の愛のこもった紅茶が何で駄目なんですか!？」

口を尖らせて言うミディアに対し、メアリは最初に見せた氷のような白い目を向け、

「あなたの場合、愛情以外にも自分の身体の一部を入れてくるからよ。最初は髪の毛。その次は爪。その次はむしった自分の羽まで入れてたじゃない」

その話を聞いて、アーサーは背筋が寒くなるのを感じた。

エンジェリウス天使族には性別はあるものの、それらが恋愛感情の妨げになることはないらしい。曰く、『一つの存在として愛するのにそんなことは些末ちまたなこと』らしく、彼らにとっては男同士だろうが女同士であ

ろつが異種族同士であるろつが関係なく、好きになつたら愛し合つのが常らしく、それらをおかしいと思う概念が存在しない。

噂では確かにミディアがメアリにぞつこんだというのは聞いていたが、

これはさすがにやりすぎだろつ……！！

まさか無くした方の羽つて、それで無くなつたわけじゃないよね、とアーサーはミディアを見て怖くなる。

メアリはそんなアーサーに気付いたのか、やれやれと言つたように、

「今日はお客人も来てるのよ。ミディア。大人しくしなさい」

言われ、ミディアはそこで初めて気付いたようにアーサーを見た。瞬間、彼女の目が大きく見開かれ、

「誰じゃ己は……！！」

いきなり高速で突つ込んできたミディアに首をつかまれ、アーサーは脳をシェイクされるほど首をゆすぶられる。

「おどれボケ私のメアリ様に近づくとあいい度胸ね今すぐ倫敦カラスの餌にしてやろつかああん！！」

早口でつむがれる言葉はまったく耳に入らず、アーサーの耳には風を切る音と高速で上下にぶれる肌色と緑色の何かが見えるだけだ。

「やめなさい！」

カンツ！ と乾いた音が聞こえ、首のゆすぶりは解除される。

見ると、メアリがミディアの手から盆を奪い取り、それで彼女の頭を殴打していた。

声にならない呻きを上げ、ミディアは頭頂部を抑えてうずくまる。「まったく……。今度は何を……」

言つて、メアリは手に非難させておいた盆の上に乗っていたティークップをスプーンでかき混ぜる。

「……今回は何も入っていないようね。……でも、やっぱりいらない」

メアリは顔を上げたミディアにカップを返却した。

ミディアは眉根を下げて、

「えー！？　せつかく今回はばれないように液体である私の愛

」

そこまで言つて、彼女の言葉は、メアリにカップごと顔面を下から強打されて遮られた。

後ろ向きに転がっていつて、ミディアはドアに後頭部をぶつけ、開脚全開でだらしなくのびていた。

手からばたばたと紅茶を垂らしながら、メアリは冷めた目で変態を見下している。

「……愛、がいつぱい詰まってるって言いたかつたんじゃ……」

場の空気にいたたまれなくなつたアーサーが何とかフォローを入れようと頑張つてみた。

その空気を汲んでくれたのか、メアリも、

「……そうね。いくらあの子でも、まあ……、そこまではしないわよね」

信用しているようでどこか自分を言い聞かせる物言いをしながら、そう言つと、ミディアが起き上がつて、

「何言つてんですか！　入れたのは私の愛の証である愛」

」

瞬間、彼女の声が急に聞こえなくなつた。ミディアは口を動かしてはいるものの、声はまったく聞こえてこない。

そんな彼女を尻目に、メアリはキッチンの水道で五回ほど石鹸で入念に手を洗い、たてていた紅茶をカップにそそぎ、茶菓子のクッキーと共に盆に載せ、アーサーの元まで持つてくる。

「さつ、飲みましょ」

笑顔で言つて、何事もなかったかのようにお茶会が始まつた。

窓からは忙しく動き回っている城下の人々と、その向こうにユーラシア大陸の前景が見える。

そんな景色を眺めながら、二人のお茶会は続いていた。

「サミット。僕は楽しみですね」

「あら、意外と子供っぽいのね。いえ、見た目どおりと言ったほうがいいかしら」

「いや、本当にいくつになっても楽しめますよ、サミット。僕はフランスのギロチンで切っても同じ顔のアントワネット飴が好きなんです」

「……それ、フランス全体が崇^たられそうな商品ね」

「あ、売り上げの五パーセント奉納でなんとかなっただけですよ」「安っ!?!」

どんな会話にも応答し、話題がなくなれば自分からも話してくれるメアリのおかげで、アーサーはいつの間にか気兼ねなく話すことが出来ていた。羨望の目で見られる人間というのは、こういう他人に安心感を与えてくれる人間なのだと思ふ。

そんな彼が、チラリと、視線を廊下側に向けた。

そこには、視線で人でも殺せそうなメディアの顔がある。彼女はさっきまで大声で何かをがなりたてていたようだが、こちらには聞かれないため二人ともいつの間にか忘れていた。しかし大声を出すのをやめてもなぜか部屋の中央辺りからこちらに近づいてこようとしていない。

すると、そんなアーサーの疑問に答えるようにメアリが言う。

「入ってこないんじゃないよ、入ってこれないのよ」

「えっ?」

言って視線をメアリの方向に戻すと、彼女は身を乗り出してアーサーの眼前まで近づき、そつと手を伸ばす。

そして、彼の口元についていたクッキーのカスを指ですくうと、それを自分の口に運んだ。

「っ!!!?」

アーサーは顔を赤くして、椅子から転げ落ちそうになる。が、隣を見てみると、

「
もはや人間を超えた形相をしたメディアを見て、ついに椅子から転げ落ちた。」

「ね? 見てると面白いでしょ」

メアリは笑いながら、それでもこちら側に入ってこないメディアを見てカラカラと笑う。

アーサーは起き上がって言葉を作った。

「いつたいなんで……」

するとメアリは紅茶を一口飲んだ後に口を開いた。

「こちらからはよく見えないけど、今、あの子の目の前には壁があるわ」

メアリは淡々と続けて、

「私の術式で作ったあの壁は、そこを境さかいにあらゆるものを停止させてる。空気振動が停止するから声はこちらに来なかったでしょ?」

彼女はさらに紅茶で口を潤し、続ける。

「しかも壁に触れれば、あの子は触れた部分から分子レベルで氷結して、崩れ去るわ。だから入ってこないのよ」

ニッコリと微笑みながらそう言われたアーサーは、それにどう返答しようか迷った。

なぜそんなことを平然と言えるのか。下手をすれば死人が出るかもしれないはずなのに。

少し迷った末に出た言葉は、

「す、すごいですね……」

そんな月並みでオリジナリテイのない、つまらない言葉だった。

しかしメアリは気にした様子も見せず、

「ちなみに、その術式を簡略化したものは、下の監獄の防音壁にも使われているわ」

自慢するともなくそういう彼女の言葉に、空気を変えるチャンスだと思ったアーサーはそれに乗っかることにした。

「へえー、すごいですね。あの地獄に放り込まれた囚人達の声が聞こえないわけだ」

「ハハハ……、と、力なく笑いながら、アーサーはメアリの表所を伺った。

彼女は口元に薄く笑みを作り、

「地獄、ね……」

アーサーは彼女の目を見た。

その目にはまた、冷たい何かが宿っている。

「あなた、あそこに入ったことは？」

あそこ、とは、今の会話の流れからして監獄エリアのことだろう。アーサーはええ、と肯定して、

「前に一度だけ。囚人を収容する任を受けまして。びっくりしましたよ。扉を開けた瞬間、いきなり絶叫が聞こえてくるから」

今でこそ笑っているが、あの時の恐怖は今でも覚えている。人の恐怖が骨身に沁みたのはあれが初めてだろう。

あの声には絶望しかなかった。叫べば見逃してくれる、助けられるなどという意思は初めから無い。ただただ己の罪を悔やみ、呪い、誰へとも無く自分への贖罪と怨嗟の色にまみれた声。

そんな彼に向かって、メアリはもう一度薄く笑った。

「人つて、恐ろしい生き物よね」

唐突に言った彼女は、しかしアーサーの返答を待たずに言葉を続ける。

「なにせ、地獄以上のものを作ってしまったらんだから」

それを聞き、アーサーはカップの取っ手に伸ばしかけていた手を止めた。メアリは続け、

「あなたはあそこを地獄だといった。囚人達が収監されているだけのあの場所を……」

言いながら、メアリは笑った。

「なら。その奥にあるあの場所は、地獄以上の何か、と表現するしかないわね」

アーサーは、手が震えているのを自覚しながらカップを取り、口元に運ぶ。カップを深く傾け、紅茶をあおる。顔が見えてしまわぬように。恐怖の色が滲み始めた顔を見られてしまわぬように。

そこで、彼は改めて、彼女の異名を理解した。

“コキョウトス 奈落の冷姫”。

それは彼女の強さの象徴するものであり、彼女を畏怖するための侮蔑の意味を込めた異名なのだと知る。

しかしそれと同時に、アーサーはふと、彼女の表情から何かを感じ取った。

笑っているその顔は、楽しげでありながら、どこか、

……寂しそうな……？

そう思っていると、カップが空になっているのに気付く。彼は力ップを受け皿に戻した。

「あの……そろそろ入れてあげたほうが……」

アーサーは空気にいたたまれなくなり、“壁”の向こうにいるミディアを見た。彼女は相変わらず人からかけ離れた形相をしてアーサーを見る。

「そうね。そろそろ可哀そうになってきたわ」

言って、メアリは指を鳴らす。すると、

「こしゆるああああ……」

ミディアの口から漏れる、人以外の何かのうめき声が聞こえてきた。

「ミディア。もういい加減落ち着きなさい。あなたもここで一緒にお茶しましょ」

言われ、ミディアは数秒の沈黙の後、

「はい！」

甘ったるい声音でこちらに歩いてきた。テーブルに近づいて、アーサーに露骨な舌打ち付きの視線を送ったが、アーサーは見ないふ

りをした。

「で、私はどこに座れば？」

「空気で我慢なさい」

「おおう！？ 私まだ心の底から許されてませんね！ そうなんです
すね！？ でもそういうのもいける口か試したいんで頑張ります！
！」

そういふのとはなんだろうとアーサーが思う中、ミディアは空気
椅子でテーブルの彼の右隣、メアリの左隣の位置に陣取る。

メアリはそんな彼女を見て、笑いながらカップを取りに立つ。

「ねえ……」

メアリがキッチンからカップを取りに立つてすぐ、ミディアがア
ーサーに話しかける。

その顔は今まで見せていた高いテンションのものではなく、どこ
か冷めたものだった。

「あんだ、メアリ様から何聞いたの」

「何って……？」

「とぼけなくてもいいわ。あんだがあの人にどんな感情を持ったか、
向こうから見ても分かったし。顔に出やすいわね、あんだ」

軍人としては致命的な自らの欠点を指摘され、アーサーは申し訳
なさそうに頭をかいた。キッチンではメアリが紅茶をたてている。

ミディアは続けて、

「いい？ 一つだけ言っておくわ」

一息吐き、

「あの人をそんな風に思うな」

言った。そんな風にという意味は、大体分かる。

だからアーサーも問う。

「どうして……？」

「それは……」

ミディアは一瞬口籠り、そして、

「あの人は、不器用な人だから……」

ただ一言、そう言った。

アーサーは言葉を続けようとしたが、しかしミディアはまた先ほどのテンション高めの表情に戻る。それは暗に、この話題は終わりでということ告げていた。

それと同時に、メアリが湯気の立つカップを持って戻ってきた。

「ミディア。アーサーにまだ自己紹介してないでしょ。きちんと挨拶が出来ないと英国人として失格よ」

「はい」

言ってミディアは空気椅子を解いて立ち上がり、頭を大きさに深く下げた後に持ち上げて、

「女王クイーンズ・ガードの防盾所属、倫敦塔飼育委員兼任のミディア「ハーレン」です。よろしくお願いします」

倫敦塔では、再世さいせいれき暦以前の中世より、魔除けとしてカラスが飼育されている。今では魔除けの効果を高めるために霊的效果を強めて品種改良されたカラスは、戦闘時では強力な戦力になると共に、並みの人間では手懐けることが出来ないほど強力なものになっている。

倫敦塔飼育委員とは、その称号の名からは想像し難いが、つまりは最強の一角であることを表している。

自己紹介をするミディアの、テンションの高さと先ほどの態度の差に少し違和感を覚えながら、アーサーは立ち上がって、

「新しく女王クイーンズ・ガードの防盾所属になりました。神罰武装、欠片エグゼ・ホルダー?びの執行エグゼ武人、アーサー「ディート」です」

その言葉に、んん!? とミディアは彼に顔を向け、数泊後、「うっそだー！ー！！ あんたみたいのが世界最強の武器を使う人間の一人だなんてアハハハハ！！」

などとテーブルを叩いて爆笑していたが、アーサーが半目でおもむろに背を向ける。その背にある長大な戦斧を見て、ミディアは目を丸くして笑いを止め、

「……今ならまだ、許してくれると思うよ」

「盗んでない！ 肩に手を置くのはやめてくれ！」

手を払いながら、アーサーは不機嫌そうにミディアに向き直る。

「ええ！？ 国の人選間違ってるんじゃないの！？ こんなのに貴重な神罰武装を渡すなんて！」

「こ、こんなのか言うなよ！」

そんな二人のやりとりを見て、メアリはクスクスと笑った。その声に気付いて、二人とも口論をやめる。

そして、アーサーは彼女の、メアリの表情を見る。

それはとても綺麗で、輝いているようにも見える笑顔。

その笑顔を見ていると、彼女は今自分が思っているような人間ではないのかもしれないと思えてくる。いや、実際そうなのかもしれない。

何故かは分からないが、昔から、自分は人の本性を見抜くのがうまいと言われた。褒められているのかは正直微妙だった。なにせ、良くも悪くも人の裏を暴いてしまうのだから。

そんな感覚が告げていた。この人は、悪い人ではないのだと。

そして、そんなことを思っていると、眼前に現れた二本の指がこちらに近づいてきて

「ぎゃあああああああ！」

「なにジロジロメアリ様のこと見てんのよ！」

痛みで熱くなった眼球を押さえ、アーサーの絶叫を聞きながら、メアリはさらに笑う。

本当にいい人なのかな……。

自分の感覚を疑いながら、アーサーは赤くなった目を擦りながら、視力が戻った目でメアリを見た。そこにいた彼女の笑顔は、やはり、悪い人間のものには見えなかった。

「そろそろ海に出るころね」

メアリは窓の外の景色を見ながらそう呟いた。それにならってアーサーとミディアも窓の外を見た。

街の風景を越えた向こうに見えるのは、緑生い茂る大地が続くユ

ーロシアの全景と、その向こう。青い海が広がっていた。

「中国とロシアはまだ多国間の貿易のために出れないんだったわね。大きな国土を持つ国も大変ね」

「でもあいつら、昔のタレントみたいに遅れてくるのがカッコイイみたいな感じの奴らも多いつて聞きますよ」

イギリスはさらに南に向かって進んでいく。アーサーは大体の予測を込めて、

「この分だと、あと二時間程度で太平洋に出ますね。確か、予定では」

そうね、と一度言葉を挟んで、メアリが続けた。

「この後に、大和と合流するはずよ」

言って、彼女は二人に席につくように促すと、

「さ、まだ時間はあるわ。ゆっくりお茶会を楽しみましょう」

紅茶を一口、飲んだ。

第七話 お茶会は窓辺の日差しの下で（後書き）

どうも！

今回は新登場のキャラで固めて主人公まったく出てきませんでした。はたして今回出てきた三人は物語にどう絡んでいくのでしょうか。

それでは、また次回！

第八話 墮落の教育者

空にはいくつかの影があった。

それは巨大な航空艦の群れである。

今、機関“関東”を中心に、右三艦、左二艦の五つの艦が連結している。

右の一番前から“北海道”、“東北”、“中部”。左は前から“近畿”、“九州”が連結して連なっている。

そして、その左の最後部に、機関“沖縄”が連結を始めた。

まず、九州と沖縄がスラスターの噴射を停止し、慣性制動によって速度を落としていく。この際連結している艦群も結合部から損壊しないように同じく速度を落としていく。そして十分に速度を落とすと、今度は沖縄がゆっくりと、スラスターの微調整によって九州の後部に近づいていく。両艦の距離が百メートルをきったところで、沖縄は動きを止め、艦首部の甲板が展開する。

そこから幅五メートルほどの板状の展開橋きょうがいくつも伸び、九州の艦尾甲板部と繋がり、住民達の道となる。さらに沖縄の艦前面と九州の艦後部の一部が展開し、そこから光で出来た連結用の術式帯たいが伸び、互いに中央で合わさり、結合すると、お互いの艦が張力でそれを引っ張り、調節を行う。それで全ての工程が終了する。

それと同時に、全七艦全てのスピーカーからアナウンスが入った。『ただ今をもって、連結肯定を全て終了しました。これより、移動国家艦“大和”やまとは、南極へと向けて発進いたします。』

関東後部に位置する仁悠学園は、大和が誇る最高の武闘派学園である。

在学中の学生は約三百名。それぞれ序、達たつ、甲、乙、越えつの五クラ

スが存在し、そこに割り振られることになる。簡単に言えばこれは学園内の番付であり、序が一番下に構えられ、越が最高であるということだ。

よく武闘派学園にはこの番付によるイジメなどがあるのだが、この学園にはそれが無い。

この学園は武闘派で通っているものの、総合的なあらゆる面による生徒の能力の育成を主としている。だから序組の生徒であっても戦闘以外のこと素晴らしく秀でている生徒なども多く、また、他の生徒もそれらをきちんと評価し、互いの長所などを認め合っているため、そのようなことが起きないのだ。もつとも、そのようなことを気にしている生徒がほとんどいないのがもつぱらだが。

というより、この学園の越組は戦闘系最強の生徒の称号でもあるが、この学園ではそれは『常軌を逸した能力の持ち主』ということの現れであり、いふなれば、変人の称号を同時に与えられているようなものなのだ。

以前、入学式の際にそのことに抗議をしに出た巫女と貴族出身の女生徒二人がいたらしい。あときは二人とも『手を滑らせ』まくって校長室を半壊するほどの惨事になったが、裁牙理事長の説得でどうにかなった。

そんな学園の廊下も、現在は静まり返っている。

今は六限目の授業の最中であり、たまに聞こえてくる音も授業を行う教師の声か、板書を行っている音だけだ。

その三年生のエリア。三年乙組は、今は戦闘系講習の授業である。ボサボサの短髪をしたジャージの男性教師が左手で板書を終え、生徒に振り返る。

「はい。じゃあ今から神罰武装についての講習を行う」

乙組の担任兼戦闘系担当教員、天月雄はチヨークを黒板の縁に置

いて前に向き直り、生徒達を見渡す。

「いいか、次行く前にもうどどん黒板書け。先生こう見えてマイペースに授業進める方だからお前らのペースには合わせねえからな。だれも俺を止めることはできないんだからな」

すると前の席の生徒の一人が手を挙げる。

「なんだ村田。今の話聞いてなかったのか。黒板書け。大丈夫だ、先生優しいからあとで質問コーナーとか設けてっから。だから質問はその時にしろ」

「いや、っつ言うか先生……」

村田は少々申し訳なさそうに口ごもった後、

「黒板の字ぐつちやくちやで何書いてっか分かんないんすけど……」
言われ、天月は後ろの黒板を見た。そこにはミミズと糸ミミズが黒板の上を見事に舞っている様が白のチョークで描かれていた。

「馬つ鹿かオメエはよお」

しかし天月は振り返り、

「だって俺利き手じゃねえし。左手だし。しょうがねえし。お前ら努力して何かをなそうとする先生の身にもなってるか？」

「いや、四月の頭から言っても行動を改善してくれない僕らの身になったことあります？」

「知らん」

言い切ったよコイツ……、と、クラス中から非難に満ちた目を浴びる天月だが、彼は気にした様子を見せない。

しかし村田は食い下がる。

「もつといろいろ手があるでしょ。使しく僕ぐを使って板書代理してもらうとか、それか電子画面展開してそれに文字入力するとか」

「馬鹿かオメエ。画面のキー入力なんざ片手しか使えないんだからめちやくちや遅いに決まっつんだろ。それに使シゲ僕ク使シつたら、なんていうか、人文字の温かさが失われるだろ？ だから俺が書いてんだよ」

「そんな温かみいらねえよ！」

生徒全員からツッコまれた天月は、一度天を仰ぎ見るように顔を上げ、次に落胆したように下に向ける。そして顔を前に向けて、「お前ら……人の気持ちも理解できない大人になんじゃねえぞ……」
「大丈夫です。俺たち先生みたいには間違ってもなりません」
「うんうんとうなずく生徒達を見て、天月は一度半目になってから、「じゃ、授業再開するぞ」。でもその前に言っておくことがある」
「天月の言葉に、生徒達が何事かと顔を上げた。それを確認した上で、天月は言った。
「俺はこの講習、大っ嫌いだ」

は？ という生徒達の視線を無視し、天月は左手で教壇に置いた教科書のページをめくる。

「えー、じゃあまず、初歩の初歩からいくべ。」

神罰武装。 今から一千年前に起きた地上の民と悟神族との大規模な戦闘、『神滅大戦』の開始の際、悟神族が自分達の意見に賛同しなかった他の神々を殺し、その時に地上に降り注いだ死亡した神々の力を生成して核とし、それを原動力に作成された世界に八個しかない、まあ、最強の武器だな。

言っておくが神罰武装の『神罰』は、神による罰という意味ではなく、神を罰するという意味だ。忘れんなよ」

言って前を向くと、さっきまでは戸惑いを見せていた生徒達は、今自分が言ったことをせつせとノートに書きとめている。

あれ……？ もしかして板書よりこっちのが効率いい？

などと若干シヨックを受けながら、次のページへと目を向けた。
「この世界に存在する神罰武装は、『嘲笑の美鏡』、『欠片？び』、『見下しの友』、『焦がれ鎚』、『我侂な束縛』、『梓弓』、『怠情の厳罰』。

そして

「

天月は今まで教卓の影に隠れていた右腕を自分の目線ほどの高さ
にまで上げて、言った。

「俺の持つ“十拳”^{とっか}。これが世界にある神罰武装の全てだな」

掲げられた右腕は、手首に金色の輪が手錠のようについており、
手の甲には太陽と月が合わさったようなものの周りに波のような波
形のある模様が入っている。

それを見せた後、室内に沈黙が走る。そして、

「ほらなー！ だから嫌いなんだよ！ 『お前それ自慢したいだけ
なんじゃね？』的な目で皆俺のこと見んだもん！！」

「いや、酷い言いがかりだよそれ！？」

「まあ手に入れた当初はものすごい自慢してたよ！？ でもさあ、
もう何年もこれのせいで不便な生活してるからもう別にどうでもい
いんだわ！ でも皆そんな俺の気持ち分かってくれねえんだわ！」
「いや、大丈夫ですって。皆そんなこと思ってないですって。なっ
？」

村田が後ろを向いて皆に合意を求めた。皆は一度困ったように顔
を見合わせてから、首を縦に振る。

「同情はやめろお！！」

「人の話聞けよ！！！」

言って、天月は教壇を思い切り両手で叩いた。バンツ！ という
破裂音と共に、

ピツ！

と、何かが高速で走る音がした。

そしてそれと共に、教壇にいくつもの線が走り、次の瞬間にはバ
ラバラになって、破片が地面に零れ落ちた。

生徒達が軽く身をすくめ、それを見た天月は、

「あちゃー、ちよつと熱くなりすぎた」

左手で頭をかきながら、足で破片を避け、左手で教科書を拾い直
す。

「じゃあ、次は

」

「無視っ!?!」

「じゃあ次。木野。神罰武装についてのことを何でもいいから言え。言ったらちゃんと評価すつから」

生徒達の総ツツコミにも動じず、天月は真ん中の列の女生徒を指さしている。女生徒は戸惑いながらも立ち上がり、教科書を広げ、「ええ、と。全部で八個存在する神罰武装は、それぞれの核となる神の力が発見された国々が合同で情報を持ち寄り、それらの開発を行いました。以降は、それぞれ開発した国がそれらを所持しています。」

アメリカ、イギリス、イタリア、ドイツ、アジア連合、オーストラリア、そして大和の七国家です。基本一国につき一つの割合ですが、大和だけは二つの神罰武装を保有しています」

「はい、オツケー。座つていいぞ」

木野はホッと息をついて、座席に座る。天月はそれを見ながら授業を進める。

「これは大和に二つの神の力降つたためのことだが、当然最初は反発をされた。なにせ一つだけでも一国を制圧できる戦力を持つと言われるものを二つ持つなんてずりいなんて思うのは、持っているこちらから見てもそう思える。」

特に当時はロシアや中国が猛反発したんだよな。外交カードとしての力の欲しさもあったんだろが、大国の意地ってやつが大きかったんだろ。だからどちらか一つを譲渡するように、残り四国家が交渉に来たんだが、結局それはおじゃんになる。

それは大和がなぜ昔の呼称の『日本』から改名したのかということと、俺たちのような小国の島国が、なぜ独立した国家として認められているのかというのが重要になってくる。

ま、そこはおいおい歴史の授業でやれや」

「やんねえのかよ!?!」

「うるせえなあ。今は戦闘系の講習中だろうが。黙ってそれ系の授業受ける」

何でコイツ教師になれたんだろ……、というような生徒全員の視線を一身に浴び、天月は教科書に視線を戻し、面倒くさそうに教科書を読み始めた。

第八話 墮落の教育者（後書き）

どうも！

今回は少し短めになりましたが、続けて区切りのいい場所まで行くと多分すごいことになるためここまでにしました。

次回は、歴史の授業です。

それでは、また次回。

第九話 歴史の授業は十二年間内容ほとんど一緒

仁悠学園三年越組。

そのプレートが下がった教室を目指し、一つの影が小走りに廊下
を行く。

首からカメラを、肩からは機材鞆かばんを下げ、『広報委員』と書かれ
た腕章を左腕につけているのは、腰ほどの黒の髪と緑の翼を持つ天
使族だ。
エンジェリウス

名を、エレア・アンダーゴットという天使族は、先程まで関東の
中心であるメインブリッジから、大和の機関が連結する様を写真に
収めてきたところだった。今度の学校新聞での記事にするためだ。

広報委員は学校行事など大掛かりな宣伝などが必要なときに用い
られる委員会で、その他にも記者やカメラマンなどのジャーナリス
トを目指す学生の育成のため、週一での学校新聞の作成も行動の一
環になっている。そして彼女はそこの委員長だ。

将来的にカメラマンとなり、各国を回りながら写真を撮り歩くの
が夢の彼女は、

どれがいいかなあ……。

目の前に電子画面を展開しながら、カメラに収められたデータを
見比べ、どれが一番見栄えがよかったかを見る。それで選んだもの
は二枚焼き増しして、自分用と記事用にするつもりだ。仕事の履歴
は残しておく、などと同じ委員会には言っているが、実際はた
だの彼女の趣味だ。綺麗なもの。美しいもの。珍しいもの。そのよ
うな感情を抱いたものを写真に撮らずにはいられない。以前ナルシ
ストな生徒会書記が写真を撮れとせがんできたときは軽くあしらっ
てやった。あんな感じのものは美しいとは自分は思わない。

『じゃあ綺麗なものとして撮りなさい！』と、言ってきたときは、
もうなんか無視した。面倒くさいときはこの手に限る。

(この連結帯を打ち込むときがカッコいいんだよなあ……)

写真を一枚見て、少し顔を緩めながら歩く彼女は、しばらくして越組の後ろのドアに辿り着く。

本来午後から行われる連結作業だが、無理を言って午前の授業丸々サボって撮りに行っていたため、彼女はゆっくりとドアを開けながら、

「おはようございま〜す……」

言って一步を踏み出し、彼女の足がそこで止まった。

そこには、正座をして座っている上半身裸の、

「森羅っ!?!」

馬鹿がいた。

「なんで縛られてるのっ!?!」

「あら、エレア。ちょうどいいところで来たわね」

教壇に立つ喜世子は遅れてきた天使族エンジェリウスを見て笑いながら言う。

その声を背に、クラス内の数人がそれぞれが武器を構えてこちらから見て半円になるように馬鹿を取り囲んでいる。本来武装デバイスを持って戦わないものも椅子や辞書などを装備していた。

それを見たエレアは半目で、

「……いったいこれは何の祭りですか」

それに、縛られている馬鹿が答える。

「いやさ。こいつら俺が授業をエスケイプしようとするからってこんな仕打ちするんだよ。酷くね酷くね?」

確かに一般人、というより常識ある人間が見たらひどいと思うだろうが、とエレアは思う。それを感じない自分はずいぶん汚れるなあ、とも思う。

「まあ、何も上を脱がすことは無いと思うが……」

「いや、これは俺が脱いだんだよ。こっちのほうは何か『あはん!折檻ー!』って感じすんだろ?」

「この変態が！！」

言つて、この馬鹿は上が裸だからと外を出歩くのを躊躇う人間でなかったことを思い出す。小学校の歴史の時間に『原始人つて全裸だったんだ！　なんて素敵な世界だよ！』と言つて、学校中を全裸で走り回つたことは今でも自分の軽いトラウマだ。何せ教室を出たら眼前ドアップで下半身が飛び込んできたのだ。感受性の高い年頃に見ればそうもなる。

思わずその光景を思い出そうとしてしまつて、エレアは首を左右に振つた。変わりに、高速で移動する馬鹿を捕まえることが出来ず、アクエリアスとリョーヘイ、羽撃の遠距離攻撃専門家によつて狙撃されて地面に落ちた光景を思い出し、平常を保つ。

そして視線を下に移すと、尺取虫しゃくじちゅうのように地面を高速で這つてきた馬鹿が、

「あん！？　なんで下にスパッツなんて穿いてんだよ！？　これじや下からのチラリズムが痒めねえじゃねえか！！」

ハア、と嘆息し、エレアは馬鹿の顔面を踏みつけながら、「有翼種ゆうよくしゅの女にとつてスカート下のスパッツは基本だ」

なにせ撮影などでは高所まで上がることもある。強風や下からの視線に対しての防御は万全にしておかなければならない。それだけでなくも普段から移動の際に飛ぶこともあるのだから、むしろつけていないほうがおかしいとも言える。

「はいちよつと御免なさいねー」

そうこう思つうちに、下にいた馬鹿は彼を囲んでいたうちの一人、羽撃に引きずられ、数発尻に蹴りを叩き込まれて、あひん！　や、ほひん！　などと嬌声を上げている。

エレアは死に掛けのゴキブリを見るような目で森羅を一瞥し、ふと思つていた疑問をぶつめた。

「それにしても、なんでこいつの授業エスケープくらいでこんな嚴重警備体制が敷かれてるんです？」

それに答えたのは近くにいた教室の後ろの席の神楽リョーヘイだ

った。

彼は椅子の後ろに体重をかけて二本足で立ちながら、

「聞いて驚けよエレア。なんとよ、森羅の奴、可愛い女の子と運命の再開で、その場でキスマでしたんだぜ」

「しかもその女子、この学園に編入してくるらしいのだ。それでの馬鹿、様子が気になるとぬかして服を脱ぎながら教室を出て行くうとしてな。それで人道的判断から縛つての折檻となった」

「まあ、それ以外にも、羽撃が胸の先つちよつままれ

言いかけた教室の後ろの席の糸衿いとねが、羽撃のフタツトモエみねの峰で顔を殴られて教室の窓から外に吹き飛んでいった。窓に当たるギリギリで窓を開いたアクエリアスはファインプレーとしか言いようが無い。実際教室中の皆が自分を含めてそう言っって親指を立てて見せた。

今の話の人道的部分というのに引つかかる部分があるが、その話題の中に興味を惹かれる話題があった。エレアは自分の心の奥から記者魂だましとも呼べるものが湧き上がって来たのを感じ、すぐに地面に転がっている馬鹿に質問した。

「羽撃の胸の感触はどうだった？」

「そつちかよ!!」

教室中の全員からツツコミがきた。

「最高だった!!」

「言つのかよ!!」

羽撃が蹴りを入れた。ひあはん！ と馬鹿が言った。

エレアはハツと我に返り、

いかんいかん！ こんな下衆い質問をするゴシップ記者魂など駄目だ。

と、改めて、森羅に対して質問をしようとした。しかし、そこで喜世子の、

「はい、制裁タイムはこれで終了。そろそろ授業に入るわよ」という声で、全員がはい、と応答して席に着いた。液体化して

校舎の壁面を登ってきた糸祢も席に着き、馬鹿も縛られた状態です席につかされる。

もう一方、森羅のキス相手というのも気になるエレアも、とりあえず席に着いた。とりあえず記事は一面に決定でタイトルは『衝撃！』 仁悠学園の最強外道 ついに求刑決定か！？』に決まりだ。

鞆を漁りながら、今の時間はなんだったかと確認する。

六時間目は、

「はい、じゃあ、歴史の教科書の三十七ページ開きなさい」

喜世子の声が教室に響いた。

喜世子は皆が着席したことを確認し、教室の前面、自分の後ろにある教室用の時計を見る。授業開始からすでに十五分経過しているが、今日やるところはさほど時間をかけるところではないので、この程度は誤差の範囲内だ。むしろこれでも余るかもしれない。

じゃあ、余った時間はまた森羅の折檻に使うか、と考えて、

「えーっと、じゃあ誰かに読んでもらおうかな」

教科書を開き、教室を見回すと、案の定、皆一様に不動を通す。

まるで獣に睨まれているかのように、皆ピクリとも動かない。

おいおい、少しは自主的に挙手しようよ、と思うが、やはり率先して教科書を朗読するというのは恥ずかしいものだ。自分も学生時代があつたのだからそれは分かる。

しかし、ここで教師である自分が名指しで呼んでもそれは指された本人に余計に注目が行って返って逆効果だ。

そこで、喜世子は生徒達の自主性にかけてみよう、ジャージの上着の懐からペンを取り出し、指で押さえて教壇の上に立て、

「もし誰も手エ挙げなかつたら、これが倒れた先にいる奴に先生直々のプロレス講習ね」

「じゃーんけーん！ー！ー」

皆が一斉に立ち上がり、生贄いけにえ決めのじゃんけんを開始した。うんうん、何としても自分が生き残るといふ姿勢を忘れちゃ駄目よ、と思いつながら、喜世子は目を細めて生徒達を見た。

そして、

「だああああ！ 俺だぞー！！」

決まったのは、腰ほどの銀の長髪をもつ小柄な男子生徒だ。彼はホツとした顔で着席する他の生徒達をうらめしそうに眺め、自分も着席の後、ゆつくりと手を挙げた。

「はい、じゃあゼン。三十七ページ読んでね」

言われ、ゼンオーは教科書を抱えて再び立ち上がる。一々座る必要は無いと思うのだが、一応は今のジャンケンが教師の許可無く行ったもので、基本は拳手の後に起立が通例だ。

もしその動作を行わなかったら、自分に尻が無くなるほどのケツデイバイブ・コンダクターを放たれているのが容易に想像できるのだろう。想像力たくましいのもいいことだ、と喜世子はうなずく。

「はい、じゃあ、三十七ページね」

「はい……」

言つてゼンオーは教科書を前に掲げ、まずはページの題名から読み始めた。

「この世界の歴史

神滅大戦から各国の誕生まで」

皆が静まりかえった教室に、ゼンオーの、本人が少し気にしている幼げな声が響く。

「再世さいせい暦前三年。ある事件が起こった。

人々と共に共存の道を行っていた神が、突如として地上の民を滅ぼすことを宣言する。この際に名乗りを上げた神は七柱ななちゅうおり、彼らは圧倒的な力により、まずは同属である、地上の民を擁護する他の神々を殺害。実質的に彼らが世界最後の神となった。

その際の、彼ら神の宣言によれば『地上の者の愚かさを見るのが飽きた』というらしく、彼らはその際に自らを『悟った神』と言う意味で名を変える。これが今の“悟神族”^{しんそく}となりました。

地上側は、その行いを許さず、自分たちが持つ戦力の全てを投入し悟神族撃退に入ります。しかし、悟神族はその際、人類側からは科学文明、^{ダイモニアス}魔族からは魔術文明を奪い取りました。地上側の抵抗で何とか全てを奪われずにはすみましたが、それらはほぼ、当時では原始レベルまでしか残されておらず、抵抗できるほどのものを生み出すことが出来ない状態でした。

また、文明を奪われたこと痛っ！ 森羅、消しゴム丸のまま投げるな！！ 痛いんだぞ！！ でもあれ、縛られたまま……、うわっ！？ 唾液付いてる！？ お前口に入れて吐き出したんだぞ！？」「いや、だつてよ。オメエ、ゼンオー、お前このお通夜も真っ青な沈んだ空気の中な普通に読んでんだよ。ここはお前が身体張って教科書の中のエロい感じのする単語の部分強調して言ったり、ラップ調に読んだりして場を

喜世子が馬鹿に近づいて、その顎を左から^{あご}ダイバイブ・コンダクターで高速で弾いた。

馬鹿は頭を風車のように九十度回転させ、バネ仕掛けのように頭が元の位置に戻ると同時に机に突っ伏して鈍い音を立てる。

それを唾然と見ていた皆の空気に気付いたのか、喜世子は慌てて「いや、大丈夫よ。脳震盪^{のうしんとう}にただけだから。先生本気でやったら多分頭部ねじ切れるどころじゃなくて消滅してるから。だから心配しないで」

何をどう心配しなければいいか分からなかったので、とりあえず皆は教科書に視線を戻す。馬鹿は放置だ。それが平和のためにもなる。

髪に付いた唾液を必死に拭ったゼンオーは、えーっと、と前置きして改めて教科書を読み直す。

「また、文明を奪われたことで^{そまじゅせい}遡及性が働き、世界の全てが森林が

生い茂る原始の姿へと変貌した。

しかし、そのことから当初は悟神族側に付いていた天使族エンジェリウスがその行いを皮切りに、悟神族側を離反。それにより彼らは悟神族の住む天上から墮とされ、地上の民の味方となった。

それによつて、人間族ヒュマニウス、魔族ダイモニウス、天使族エンジェリウスの三種族と、悟神族による大戦、神滅大戦が始まった。

そしてその際、天使族エンジェリウスは自らの神力の全てを使い、人類に残された文明全てを集結させて生まれたのが、我々が今使っている機械魔術ギガです。

地上側はそれを使い、多くの犠牲を出しながらも、悟神族と三年間に及ぶ激闘を繰り広げました。」

「はいオツケー。いいわよ」

ゼンオーはホツと息をついて席に座る。恐らく間違えたときに容赦なく自分が点数を引くのを恐れていたのだろう。大丈夫、よつほどおかしな間違いしない限りはそんなに引かないから、と心で言い、「そう。今からちょうど千と三年前、神滅大戦は行われた。そして三年の戦いの末、ついに悟神族の力のほとんどを奪うことに成功したわ。

そのせいで、悟神族は地上で活動できる時間の制限を受け、さらに天上以外では自分達の力を振るうことがかなわなくなってしまうた。

そのせいで今はあいつらも自分達では攻めてこないわけだけだね。なにせ時間制限付で活動しか出来ないし、来たとしても恐らく普通の人間以下の力しか持たないんじゃないし、来たとしても恐らくじゃ、こつからは国の成り立ちについて読んでもらおうかな。イ

コル」

その言葉に、金髪の巨体が立ち上がって言った。

「な、何で俺が！ 横暴だぞ喜世子先生！」

「つさいボケ！ あんた歴史だけは得意でしょうが。他の教科体育以外は全部平均2しか取れてないんだからここで得点稼ぎなさい」

「きよ、教師が教え子の成績公言するな！！」

その言葉に反応するものがあつた。伸太と切丸、そして今座席に座つたゼンオーの魔界男子四人組スクウェア・フォーの面々が、

「大丈夫だ。俺らお前の成績なんかとつくの昔に知つてんよ」

「そうだぞイコル。お前が通知表渡しのとくに絶対に俺らに見せないようにしてたけど、実は俺らお前がトイレとか行つてる間に見てたんだ」

「体育と歴史以外オール1だったあのころよりはよくなつたんだぞ」
「な、仲間だと思つてた三人に全て暴露された！？ 貴様等それでも小学校時代からの幼馴染か！！」

「はい。ぎゃーぎゃー言わずに早く読む」

パンパンと手を叩きながら言う喜世子に不満な顔を向けて、長剣の柄に手を回されたので慌てて教科書で顔を隠しながら、イコルはとりあえず口を開いた順に殺していこうと、伸太の殺害方法を模索しながら、教科書を読み始める。

幸い、歴史の初歩の初歩はもう完璧に覚えてしまつている。なので歴史を口にすることと三人の殺害方法を考えるのに2：8の割合で頭を使えば何とかなるだろうと思ひ、口を開いた。

「神滅大戦が終わつた後、人類にとって一番の問題は、人口数の激減と、国土の原初化。悟神族が自らの力を回復するために送り込んでくるヒトガタの襲撃。そして、神がいなくなつたことよって加護を失つたことだつた。

特に終戦初期では人口の低下が一番問題視された。三種族全てを合わせても世界人口約二十七億人。かつての四分の一程度の人口で、森林と化してしまつた大地を切り開き、集落を作ることは、機械魔術マジックを手に入れた人類でも容易には行かず、さらに悟神族の戦闘兵、ヒトガタの襲撃により、事態はさらに難航することになる。

そのために人類が取つたのは、人口の少なさを利用し、航空都市エアシティの製造し、そこへの大多数の人員の移住だつた。

それにより、年周期で大量発生などを行うヒトガタの発生が少な

い地域へ移動することも可能となり、復興の足がかりが出来たともいえる」

「はいオツケー」

喜世子の言葉にふう、と息をつき、イコルは座席に取れるように座り込んだ。

そうね、と喜世子が前置きを付いて補足をする。

「生き残った人類にとって、まず一番に考えなきゃいけない問題は、どうやってこれ以上人口の低下を防ぐかだったの。当然そのためには生きるための拠点が必要だけど、その拠点を作るには、まずは木を切り倒す。その後はその切り倒した木を燃料や紙にするなりして消費しなきゃいけないし、そして地面の舗装^{ほそつ}。そこまでやってようやく土地の割り振りを決めたり、どこを居住区にするかみたいな話し合いをやって、ようやく住居の建設に入る。少なくとも大和では全人口を一箇所に集めるにしてもそれを全て行うとしたら十年以上かかるわ。

もちろんそれは出来ないから、各場所に分かれて作業を行っていたんだけど、当然そうなると少ない人員が余計に少なくなってしまう。土地を開拓する人員が増えればヒトガタの襲撃に対応する戦闘員がいなくなつて被害が増え、逆に戦闘員に数を裂けば開拓が遅れてしまう。

そしてどうしようか迷った末に、各国が合同で意見を持ち寄り出した答えが、航空艦都市を作成することだったってわけ」

喜世子は一度息をつき、新調した教壇の後ろにある椅子に腰掛けた。

「そうすれば、航空艦の作成場所を一気に切り開くだけで、後はその場に資材を持ち寄り、また、そこに人員を集中させることで防衛と作成を同時進行で行けた。

そしてその際の各国間の話し合いのときに、神罰武装が作成され、そのおかげで人口が少ない国は防衛能力を高めることもでき、製造開始から五年、ようやく七艦編成の『国土』を、各国は手に入れた

つてわけよ」

喜世子は教室を見回した。皆教科書に目を落とし、馬鹿は机に頭を落としている。平和だなと思いつつ、

「じゃ、ラストは大和のなりたちね。神社の娘の羽撃いってみようか」

「えっ!？」

羽撃は机の上の教科書から顔を上げ、目を丸くする。

「こういう系はやっぱ寺院関係のあんたが適役じゃない」

「はあ、まあ、そうですね……」

どこか腑に落ちない感じを漂わせながらも、羽撃は立ち上がった教科書を持つ。

「国土を手に入れた各国でしたが、最後に残った問題は、神による加護を失ったことでした。」

今までの共存時代、神の力の加護を受け発展を繰り返してきたいた人類にとって、文明が壊滅的に失われていた当時はどうしても必要なものだったわけです。現在でも人類は独力で進化を辿っていますが、それはあまりにも遅く、文明の最高潮だった時代に届くにはあまりにも時間がかかりすぎます。

そこで人類が考え付いたことは、かつては禁忌とされてきた行為、人工的な神の作成でした」

羽撃はここで、一旦言葉を切る。そして一度大きく息を吸い、

「各国は意見を持ち寄り、そして、かつて『日本』と呼ばれていた大和が、その作成の指揮を取ることになりました。」

これは、神代しんだいと呼ばれる、神との共存ではなく、神が王として地上を支配していた時代の神話で、日本には人が神を殺す神話、そして、九十九神つくもがみなどの神を作り出す神話など、神が絶対として崇められていた時代には考え付かないことが存在したことによるもので、その概念を術式に応用し、神を作り出すことを各国より言い渡されました。

それにより、アジア連合などのように小国はほとんどどこかの国

々と合併が行われましたが、大和は一国の扱いを受けて残され、また神罰武装も防衛力強化のための特例として二つの所持を許されました。

またこの国の霊的力を高める名目で、かつての日本から神代の呼び名“大和”と名を改め、神の作成を行っています」

読み終え、羽撃は教科書を降ろした。喜世子に座つてもいいかとアイコンタクトを送ってみると、教科書を顔にかけて喜世子が寝ていた。

聞いてねえー！ー！ー！！

思わず羽撃以外の生徒達も思う中、その空気を寝ながらも感じたのか、

「んあ！？」

ビクンツ！ と一度飛び跳ねて、喜世子が跳ね起きた。

「ああ、うんオツケオツケ。ありがと羽撃」

「……聞いてなかったんじや……」

半目で問う羽撃に、喜世子は首を盛大に横に振り、

「違う違う！ 視覚を潰すことで聴覚を鋭敏にしたのよ！ ほら、

先生って真面目だから！」

いったいどれだけ図々しければそんな言葉を吐けるのか、生徒達には分からない。すると、

「ん……？」

喜世子があるものに気付いた。

皆の視線もそれを追って、教室の後ろへと伸びていく。

それに唯一気付かないのは、視線の先にいる一人の生徒。

エルだった。

喜世子はジッとエルを見る。

彼は教科書を立てて壁を作り、その内側に食い入るように頭を突っ込んでいる。

そーっと、足音を殺して近づいてみる。それでもエルは気付かない。

「こら、何してる！」

言って、喜世子は立てられた教科書を持ち上げた。その奥にいたエルは、うわっ！ と仰天して椅子から転げ落ちる。

彼の机の上にあったのは、一台のノートパソコンだ。

基本的にネットやメール、通信などは全て使シケ俱キを持っていければ行えることだが、パソコンは主に大量の情報を捌さばく作業に必要なものだ。

目の前の机に置いてあるパソコンは教科書の後ろに隠れるほど小型でありながら、非常に高い電算容量を持つ一級品だ。

「まったく。あたしの授業中に勉強以外のことやってるなんざいい度胸ね」

喜世子は机の後ろに回って何をやっているのか見ようとした。それを起き上がったエルが慌てて押さえ、

「な、なんでもないんです先生！ ホントごめんなさい！ だから、ね！？ ね！？」

「何が、ね？ よ。あんたこの間から頻繁にこんな状態だったけど、いったい何して

無理矢理エルを押しつけて画面を覗き込んだ喜世子の言葉がそこで止まる。

その画面に映っていたのは、茶髪のポニーテールの、そう、まるで喜好喜世子のような女性が今まさにジャージを脱いであられもない姿になっている絵がそこには載っていた。

エルは逃げ出した。全速力で逃げ出した。

素早くドアの取っ手に手を伸ばす。しかし喜世子は背にある柄を

握って、長剣を背から下ろして思い切りぶん投げた。

高速回転した長剣が、鈍い音と共にエルの頸椎に直撃した。鈍い音が、学園の廊下に響き渡った。

“ラッキー ライセンス”という同人サークルが関東には存在する。

漫画、小説、ゲームなどあらゆるものに手を伸ばしており、毎年二回行われるの同人即売祭さいのときは必ず売り切れ必死となること請け合いのサークルであり、委託販売やオークションでも手に入りにくい程の人気を誇る。

その創設者の一人、エル。エルは今、教室の後ろで縛られて女子達全員に半円状に囲まれていた。

あれからパソコンを調べたところ、教室の女子全員をモデルにした不埒なエロゲー原画が発見され、このような現状に至っている。

男子勢は気絶から再起した馬鹿を含め、全員が机の上に顔を伏せて押し黙っている。助ける気は毛頭ないらしい。ただ自分達に火の粉が降りかからないように全力で不動を貫き通している。

喜世子はなるべく笑顔で、

「っで、これはどういうことなの？」

優しく声をかけることにする。まずは何を言ってもこうやって自供させる空気を作ってやらねばならない。周りで武器を構えている女子がいるが、それは気にしないことにする。

エルは黙秘を通そうとしているのか、口を一字に結んで話す気配がない。

仕方がないので、ディバイブ・コンダクターを振りかぶってパソコンの方を向くと、

「ああ！！ 待ってください！！！」

返答がきたので、首だけをそちらに向け、言え、と空気のみで促

す。

「八月のイベント用の新作です、それ」

重々しい口を開いて、エルが告げた。女子勢は更なる供述を求め
るため、とりあえず武器を近づける。

「イラストはシャトーくんに頼んで。色々イベントとかサイトの書き
込みに『今度越組のメンバーで作品出してください』って要望がた
くさんあったんで……」

喜世子は今日来ていない最後の越組メンバー、クロエ「シャトー
のことを思い出す。確か彼女もラッキー ライセンスの一人だ。

「じゃあクロエが今日来てないのって……」

箒を振りかぶった状態のエレアの声に、エルは無言で頷く。

「原稿が押してるらしく。このままじゃ来月までに入稿間に合わな
いからって」

「それは困るぜ！」

と言ったのは、今まで押し黙っていた男子勢の一人、森羅で、

「ラッキー ライセンスの同人誌は俺にとっちゃオアシス以外の何
ものでもないんだからよ！ クロさんには絶対落とさないよう頑張
ってくれって言ってくれよ！ 今度のあれだろ！？ 総ページ数一
六〇ページ越えの超大作！」

「うん。全部君の苦手な触手モノだけどね」

「ハア！？ 嘘だろ、そんな話聞いてねえぞ！！ 俺もう予約入れ
ちまったのに！！」

「勝手に話を進めるなあ！」

羽撃の矢が、馬鹿の椅子の背もたれに直撃して爆散する。間一髪
馬鹿は机二つほど飛び越えて回避した。そのせいで近くにいた糸祿
に破片が直撃したが特に気にしない。誰も気にしない。

「あ、お兄ちゃん！ このゲームあたしのルート近親モノに走って
るよ！」

「何！？ 願ってもねえルート展開じゃねえか！ ナイスだエルく
ん！」

アホの子兄妹を見ながら、もう何かやりたい放題だな、と思いな
がら、

「じゃあ、まあとりあえずデータは抹消、と」

と言って、ディバイブ・コンダクターを振り上げた喜世子をエル
は慌てて止めた。

「待つて待つて！！ それデータじゃない！ そのパソコン、カス
タムだけでどんだけすると思っでんですか！！」

知るかと、思い、イラストとはいえ自分の痴態を描かれたゲーム
を出させてなるものかと心に決め、長剣が頂点まで到達し、振り下
るだけの段階になったところで、

「ゲームを予約してる人間を教えますから！！ 壊すのだけは勘弁
してください！！」

その言葉に、喜世子の腕が止まる。女子の視線も今までとは違っ
たものになった。

喜世子は剣を下ろし、縛られて座るエルに視線を合わせる。

「誰？」

「それは

エルが口を開きかけたとき、喜世子は視線の端で動くものを感じ
た。

すぐにそちらを振り向く。

そこにいたのは、今まさに窓から逃亡を図ろうとしている森羅だ
った。

「やっぱりね！！」

言っで、身体を後ろに向けると、クラス中の男子全員が廊下へ窓
へと逃亡を図っていた。

「全員！？」

第九話 歴史の授業は十二年間内容ほとんど一緒（後書き）

どうも！

この世界の歴史編です。キャラクターにたくさん喋らせまくったせいで何か今回あまりキャラが動きません。すいません。

これで皆さんにも大体この世界がどういうものか分かってもらえたと思います。

次の回はもうちょっとキャラが動きます。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3643x/>

機械魔術の楔人

2011年12月17日00時53分発行